

銀河系大戦史(外史I)

そんなに遠くない昔に



銀河系大戦史

Not a so long time ago...

そんなに遠くない昔に

猫屋 真

目次

Not a so long time ago...

第一章	^{Trew} トゥリユー	
第二章	^{Mayliar} メイリア	
第三章	^{Take away} 誘拐	
第四章	^{Chase after} 追跡	
第五章	^{Who's Sylwiss?} シルウィスの正体？	
第六章	^{Run away} 逃走	
プロローグ	^{In prior to the Dawn in Vermilion} プロローグの プロローグに至るエピローグ	
付録	要図、既刊情報、登場人物紹介等	

地球の名は、遠い、不確かな伝説の霧の中に沈み込み、人は、宇宙が、彼らの嗣ぐべき
正統な遺産であることを忘れていた。

人類の遺した異形の子二人は、互いをつなぐ古い血の由来を知ら^{まみ}ない。彼らが再び
たのは、邂逅^{めくりあい}のテーブルではなく、戦いのアリーナの上だった。

^{Not a so long time ago...}
それほど遠くない昔

彼らが、まだ互いを知らなかった時代。

忘れ去られた自らの起源を追い求め^{ほし}惑星^{ほし}その一人の少年が訪れた。

その惑星^{ほし}は、一人の少女がいた。彼女は、自らが鍵であることを知らなかった。

鍵は、長い間隠され、ひととき見いだされ、そして再び喪われた。

^{Not a so long time ago...}
それほど遠くない昔

少年は、その惑星^{ほし}離れ、そして、喪われた鍵のかけらにたどり着く。長い間隠された
鍵のかけらは、僅かの間、見いだされ、そして喪われる。今度こそ、永久に。

すべてが喪われ、そして、再び少年は巡り会う。彼は、彼女が探し求めていた鍵である
ことを知らない。

しかし、彼は悟った。

彼は彼女をこそ、探していたのだ、と。

前メルティア史

メルティアの歴史は、連邦圏のいかなる惑星よりも古い。この惑星は、シエルメス連邦のそもその発祥の地だった。半径数千光年の広大な三次元空間を支配するシエルメス連邦は、すでに五〇〇年以上の歴史のページを重ねてきた。それに先んじること約五〇〇〇年、海陸比九対一に近いこの“海の惑星”の地表に刻まれた歴史は、シエルメス連邦のそのの一〇倍に近い。

ワープ航法を基礎とした恒星系間航行技術が確立されたのは、前連邦暦一七八九年。連邦暦の開始、すなわち惑星シエルメスを本拠としたシエルメス連邦政府の成立までに、シエルメス人……当時のメルティア人……が拡大した居住圏は半径約三〇〇光年。惑星シエルメスを初めとして、のちに連邦圏の中核となった惑星が、この当時のフロンティアに位置する。

広大なフロンティアを前にして、メルティアを襲ったのが、かつて“東銀河半円”を席卷した諸国間の対立抗争だった。前連邦暦一八〇〇年代後半、メルティアの政治勢力は大きく三分

された。外宇宙への発展を望む二派と、メルティアへの残留を望む一派とである。

外宇宙派はメルティアを離れ、惑星シエルメスを中心とする現在のタート・レイピア恒星区を武力対決の闘技場にした。激烈をきわめた“惑星統一戦争”のあと、人類は史上初めての統一政体であるシエルメス連邦の成立を見るのである。

“シエルメス人”と化した同胞同士、流血に彩られた歴史を片目に、メルティアの残留者たちが平和な生活を楽しんでいたわけではない。スケールこそ違え、彼らは惑星メルティアでの主導権争いに巻き込まれた。“メルティア動乱期”は前連邦暦一九四〇年代から一〇〇年近くも続いた。連邦暦五〇年代に、メルティア史上最大の二人の指導者が相次いで現れなければ、メルティアは我自らを葬った“東銀河半円”の悲劇の縮小版を惑星メルティアの地表で演じたことだろう。

史上最大の二人の指導者、すなわちロムルス・レン・リアーとシルウィス・トヒユナは歴史上の奇跡を演じた。ロムルス・レンは、メルティアの統一を掲げた理念と強力な指導力でメルティア統一の事業を主導し、シルウィスは類い稀な軍事的才能によってロムルスの事業を過不足なく補佐した。この二人の絶妙のコ

ンビネーションは、連邦暦八〇年、メルティアの動乱に终い終止符を打った。八三年、メルティアはロムルスを大統領とするメルティア共和国の成立を誇らかに宣言。発祥の地に敬意を表したシエルメス連邦は、エルメティア恒星系から半径一〇〇光年の宙域のメルティアへの割譲に合意。ここに、エルメティア独立恒星区の成立を見るに至る。

ロムルス・レンの指導と、シルウィスの補佐のもとに、メルティアは順調な発展を続けた。動乱の間に三〇パーセント以上を失った人口も一〇億を超えた。各種の産業も発達し、連邦暦一〇〇年代半ばには連邦母星と並ぶほどの繁栄を示すに至った。

メルティアの繁栄にも影がさし始めたのは、ロムルスの死後、一〇〇年あまりの後、連邦暦二二〇年代に入ってからである。

ロムルス・レン・リアーの孫にあたるジェフィユス・レンは、議会の可決した“授権法”を利用してメルティアの最高執政者となり、謀略と暴力を駆使して次々に政敵を葬り去っていった。連邦暦三三五年、ジェフィユスは、ロムルスの協力者であったシルウィス・トヒユナの孫シェーンブルンを初代の王としてメルティアに王政を布き、自らは摂政を称してメルティアの支配権を一手に掌握。二四五年に

前連邦史

シェーンブルンが亡くなると、彼の権力を掣肘するものは、メルティアの地表にはもはや存在しなかった。

こうして二四九年、ジェフィユスは公然と至尊の冠を我が頭に戴き、ジェフィユス一世を称するに至る。彼は連邦憲章にならったメルティア共和国憲法を議会の承認を経ずして改正し、改正された王国憲法に基づいて議會を永久解散、彼の施政に反対する勢力に対して徹底的な弾圧を開始した。“創業の暗黒”と呼ばれる連邦暦二五〇年、反ジェフィユス派五〇万人以上が肅清された。公爵号を与えられ、国政の最高顧問となっていたシェーンブルンの長男シェーネシュンデは、ジェフィユスを公然と批判した為に暗殺された。そして、シェーネシュンデの子ペーネルはスルフエイク侯爵として中央政界を逐われたのである。

ジェフィユスはメルティアの全土を我が掌中に収めて連邦暦二七一年に死去。血なまぐさい宮廷闘争のあと三男のユフィルスが跡を嗣ぎ、以後約一一代約三〇〇年に亘って“万系一世”を称する“リアー王朝”がメルティア全土を独裁支配することになる。

前後合計三次にわたる“惑星統一戦争”の第二次戦争期、シエルメス連邦は、フロンティア宙域に猖獗を極めた、小国家群による“私掠船”活動に圧倒され、存亡の危機にあった。数百を数えた小国家群は、連邦を成立させた二大強国ティルシニア……後のタート・レイピアとセリアによる経済力と軍事力の独占に危機感を募らせ、遂には全面的な軍事抗争に足を踏み入れる決断を下したのである。

当初こそ、圧倒的な軍事力によって戦いを優勢に進めた連邦も、辺境の国家群が一致して宇宙賊を組織し、連邦圏の商業航路を破壊する行動に出たことで苦境に追い込まれることになった。

のち、シエルメス連邦初代大統領となるステイクフェスト・シャトンヒュッテ中将が頭角を現したのは、まさにこの時期である。

シャトンヒュッテ中将による凄まじいまでの掃討戦は、実に三年余を要して完結したが、この間にシャトンヒュッテと彼の部下の手によって虐殺された少数民族は一〇〇〇とも二〇〇〇とも言われ、犠牲者総数は優に一〇億を上回ったとされる。また、文字通りにみさかい

なしの熱核兵器の投入により、当時の連邦圏に属していた惑星の四割が深刻な放射能汚染に見舞われたという。

シャトンヒュッテの夢見た、“終身大統領”、さらに神聖不可侵の皇帝の座は、彼こと町一つを吹き飛ばした、暗殺者の核爆弾によって潰え去った。しかし、彼が基礎を固めた、“鋼鉄の爪”連邦空軍こそが連邦が連邦たる所以である、とのシエルメス連邦の国是は以後、数百年にわたって連邦を支配し続けることになる。

フーリック・トヒユナはシエルメス連邦の余りに血塗られた生い立ちに軽い恐怖を覚えていたのである……彼は『惑星統一戦史』を次の一文で閉ざしている。

“……前連邦暦一九九〇年、連邦政府は旧暦を廃止して連邦暦の新設を定めたが、連邦暦の第一ページは文字通りに血を以て記されたものにほかならぬことに、今連邦市民の幾人が思い至っているだろうか”

以後、連邦暦五七二年に至るまで、連邦の歴史は文字通りに戦乱と流血とが覆い尽くすことになる。



第一章 トウリユー

タラップから一步を踏みだして、少年は目を細めた。余りにも長いこと常闇に包まれた宇宙空間に目を馴らしすぎたのか、とも思う。初めての惑星。初夏の日差しはそれほどよいものではなく、空気はひやりとして肌に快かった。連邦暦五六二年七月一五日。正午にはかなり時間がある。

さして大きな空港ではなかった。タラップの下に待機しているのは、乗客を空港ビルまで運ぶための大型エア・カー。ひっきりなしにシャトルが離発着し、無数の乗客が空港ビルを行き来している連邦母星最大の宇宙港エルレイシアを、少年はふと思い出した。そのエルレイシア宇宙港とは、比較にならないほどスケールの小さい空港ビルの向こう側、地平線に近いあたりに薄紫のもやに包まれた、険しそうな峰々がほの見える。

タラップのステップを踏みながら、少年はある種の解放感に包まれて思っただ。いま、人生でもっとも幸せな時期にいるのではないのだろうか。あと何年かして、自分はこの時期を懐かしむのかもしれない。あのころはなんと幸せだったのだろうと。

思ってから苦笑する。自分の人生を振り返るには、わずか一五年にすぎない少年の人生経験は余りも短すぎる。明るいが、決して強すぎはしない日差しの中を行く彼の足取りはあくまで軽やかだった。たまさかすれ違う人々の半数が驚いたように、この美貌の少年を振り返り、若い羚羊かもしかを思わせるほっそりした後ろ姿の肩先にかかっている銀白色の髪の輝き

を視界に入れ直すのだ。

入国管理のゲートは、しかし、少年にとって愉快なものではなかった。
「これじゃダメだ。入国は認められない」

連邦総合大学イアス分校の学生IDカードを示した彼に、入国管理官は不機嫌そうに言い放ったのだ。

「入国案内だと身分証明書があればいいことになってるよ」

「学生のIDカードなんぞ、身分証明書の内には入らない」

「でも、案内には……」

言いかけ、トゥリユーはシャツのポケットから別のIDカードを取り出した。一介の学生にはふさわしくない、虹色の光沢を放つカードを目にして、入国係官の表情が変わった。カードリーダーの表示する内容に、今度は顔色が変わる。

「ミスター・レーフラム・トゥリユー・ネレイド？」

「そつ」

「入国の目的は？」

「職業は学生。旅行目的は研究調査と観光。氏名は、レーフラム・トゥリユー・ネレイド。これでいい？」

「え……ええ、結構です。し、失礼いたしました。何しろ、連邦からの入国規制は……」

「行つていい？」

係官の弁解を、少年は疎ましげに遮る。唯一の荷物であるボストンバッグを拾い上げ、少年は入管ゲートをくぐった。

ネレイド……トゥリユーはこの姓を好きではない。連邦母星の古い神話にその名がある。海^{ネレイド}の愛娘。海神に従つた妖精。そして、代々のネレイドたちにとって“海”とは宇宙を意味する。

シエルメス連邦屈指の有力政治家レイフレム・ナイザル・ネレイドと、

やはり連邦屈指の巨大資本シュレフ・コングロマリットの幹部の妹ステイシー・フランセス・ノウラン・ネレイド。彼らの名がトゥリユーの両親としてIDカードに刻まれている。

レーフラム・トゥリユーは、そのIDカードが疎ましかった。使いたくなかったが、規則と権威に凝り固まった小役人や頭の固いホテルのクラークを納得させるには、最も有効な武器だった。特に、彼が旅をすることの多い連邦圏の半分では。

“研究調査だつて？”

若すぎるために、疑いの視線を招き寄せることは少なくなかった。

“家出じゃないのかね”

やむを得ず示したIDカードが更に疑いを招く。トゥリユーの身元を確認したホテルのクラークたちが仰天し、手のひらを返すように態度を改めるのを目のあたりにする。楽しめる光景ではなかった。

宇宙港の空港ビルの構造はどこでも大して変わりがない。地上交通機関を示すサインをたどっていくと、大抵、間違いなくビルの外側へ出られるのだ。

「あれ……」

ちよつと戸惑つ。

“メルティアで最も豊かな地域”。スルフェイク州のことを、トゥリユーは事前に調べて知っている。空港ビルのエントランスには当然、客狙いのタクシーが列をなしていると思つたのだが。

実際にはタクシーらしい乗用エア・カーの姿は一台もなかったのだ。

「坊や、ダウンタウンかい？」

きよるきよるしていると声かけられた。頭が見事に禿げ上がった、髯^{なま}し革のような肌をした大柄な男がにやにや笑いを浮かべている。

「うん。タクシーは？」

「タクシーは余り一般的じゃねえ。バスが定期運行してるし、大体ここから入国する客の数なんざ知れてる。俺は今度の便のドライバーだ」「ダウンタウンって……ドルスの？　どれくらいかかる？」

「三〇分強つてところだ。行くんだつたら急ぎな、坊や。もうすぐ発車の時刻だ。荷物があるなら、預かるつ。片道五〇ミスカール（メルティア通貨）。往復なら九〇ミスカール。往復チケットは一〇日間有効だ」「往復チケット一枚頂戴」

唯一の荷物である、おおぶりのボストンバッグを彼に預けた。

「どこから来たね、坊や」

ついでにチップのコインを渡す少年に、禿げあがったドライバーの口調は砕けている。

携帯用コンピュータが入っているから丁寧に扱ってくれという少年の要求にも、気軽に応じてくれた。

「連邦母星系イアス」

「ほつ、こいつあ驚いた。坊や、大学生か。大学生には見えんな。ハイスクール・キッドじゃないのか」

「大学生だよ、これでも。小父さん」

「小父さんはねえだろ、なあ坊や。これでもまだ二〇代なんだからな」「そつかな」

「そつとも……で、何の勉強をしてるんだ。おれの甥つ子も連邦母星に行っている。何でも重力子コンピュータ工学をやってるらしい」

「凄いいね、と美しい少年は微笑を浮かべる。」

「ぼくは宇宙考古学」

「宇宙……がく？」

要領を得ない表情のドライバーに、少年は簡単に説明する。言ってみ

れば連邦の起源を求める学問のことだ、と。

「起源たつてよ、坊や。連邦はメルティアで始まったんじゃないのか。おれは学校でそう習ったんだがな」

「昔はね、そう言われてた。昔つて言っても二〇年くらい前までだけだ」

“進化のミッシングリンク問題”のことを少年は口にした。既に数百年以上も前から、その問題は生物学者の間で議論の対象になってきていた問題だった。シエルメス連邦は、この惑星メルティアを発祥の地とする。約五〇〇年から一万年前にかけて、惑星メルティアに固有と考えられる生物の進化体系が突然に崩れ、現在のシエルメス人にいたる全く新しい進化の枝が生じたらしいことは、生物学が生まれてまもなく明らかになった事実だった。

宇宙考古学は、約二〇年前、エルメティア恒星系最外縁の公転軌道を9巡る小惑星帯で明らかに人工と分かる構造物の痕跡が発見されたのをきつかけに誕生した。まだ、専攻する学者も学生も多くはないが、トゥリユーの主任教授は二〇年前に、エルメティアの小惑星帯で最初の遺跡を発見した考古学者チームの一員だった。

今、トゥリユーは三つのアプローチを試している。

丹念な遺跡の調査と、遺跡の出土品の物理学的な分析。シエルメス人の人体構成に対する化学面からのアプローチ。

トゥリユーがもつとも力を注いでいるのが、ほかの研究者がほとんど手をつけていなかった古伝承や神話を渉猟して共通性を発見する文献分析のアプローチ……。

“連邦は、ずいぶん昔にすべての宗教を破壊してしまった”とは、何代目かのスルフエイク侯爵の言葉。古い神話、伝承を集めて体系化したものと、連邦圏各地での探查結果を丹念に突き合わせて連邦の起源を辿

ろつとするトゥリユーのアプローチは、ほぼ完全な無宗教状態に陥っている連邦では困難をきわめるものだった。神話や伝承、宗教書の保存に、連邦政府も市民もまったく無関心だったのだから。

それでも彼は、僅かに遺された伝承の断片から古代宗教の輪郭を描き出すことに成功していた。源流に共通して巨大な破壊があったこともほぼ突き止めている。今度の調査旅行に出る前に、間もなく連邦首都で開かれる学会で発表するための論文の原稿を完成し、教授に預けてきているトゥリユーだった。

彼がメルティア本星を訪れる気になったのは、先代のスルフエイク侯爵……ファールリック・トヒユナが著書の中で触れていたメルティアの建国神話だった。

曰く……

“古き世に、空は神の怒りもて染め尽くされたり……炎と転じし天空より降り注ぎしは光の箭……”

トゥリユーは書いている。

『シエルメスの古代神学上、最も重要な地位を占めるのが“ノルモナ”と“クリエシユナ”の二神である。“クリエシユナ”と“ノルモナ”の古代神学上の位置付けを全面的に解明するには至っていない。運命を司る神であり、運命の象徴として青年と老人の顔を両面に持つ双面神であるとする説。また、同一神の相反する性格をそれぞれに言い表わしているものとする説とがある。』

前者では、幸運と希望を司る“クリエシユナ”は青年の顔を持ち、逃れられぬ死と悲運・絶望は老人の顔を持つ“ノルモナ”によつて語られた。後者の場合、“クリエシユナ”の性格は創造と建設であり、一方“ノルモナ”は一切の破壊と虐殺を司っていたと言われる……』

「なるほど、おもしろえ話だな。だけど坊や、悪いがデイスカッション

は終わりだ。乗んな。出発時間だ。ダウンタウンへいくんだろ、どのホテルだ？」

「メイスフィールド・イン。行く？」

「ああ、通り道だ」

乗客もまばらな中に座席を占めて間もなく大型エア・カーは動きだす。少年は、この瞬間が好きだった。乗り物が動きだす一瞬、心をよぎっていく思い……これから旅が始まる、という思い……それが少年は好きだったのだ。

ダウンタウンに繋がるハイウェイは、低い山地と海の間挟まれた狭い平地を縫うようにして走る。山の頂を覆った厚い霧がゆっくりと山肌を滑りおり、ハイウェイの上からのしかかろつていた。

「何でドルスへなんぞきたんだ、坊や。ドルスに遺跡でもあるっていうのか」

気軽そうにハンドルを操りながら、ドライバーが質問を続けていた。連邦母星なら全自動操縦で、ドライバーは計器を睨んでいるしか仕事がないものなのだが、ここではどうやら手動操縦が主流を占めているらしい。

「さあ、分からない。それより、小父さん」

「お兄さん、と呼んでくれないかね、坊や」

「じゃ、坊やをやめてくれる？」

「ああ、いいとも。なんて呼んだらいい、坊や」

「トゥリユー」

「トゥリユー？ 珍しい名前だな。オーケイ、トゥリユー、おれはブライアンだ」

「ハイ、ブライアン。ぼくはトゥリユー・ネレイド」

「ハイ、トゥリユー。それでトゥリユー、ドルスからどこへ行くつもり

なんだ」

「どこへも。一週間くらいいて、ドルスをあちこち歩いてみたい、それだけだよ」

「なんだ、そいつはつまらん。せつかくスルフェイク州へ来て、ベルステイルスの高地も訪ねて帰ったんじゃ、メルティアのよさの半分も理解したことにならんぞ。ベルステイルスへは是非行くことだ。車を借りてだな……」

「ぼくはまだ、ちゃんとしたエア・カーのドライバーズ・ライセンスを持っていないんだ。運転できるのは、ホバー・バイクだけだよ」

トゥリユーは一五歳でしかない自分の年齢のことを指摘する。ブライアンは大きさに両手を広げて見せた。

「なんだ、一五歳で大学生？」

「うん」

あどけなさの標本のような笑顔を向けられて、ブライアンはちょっと舌打ちしたようだった。

「連邦母星じゃ一五でも大学へ行けるのか、トゥリユー？」

「珍しいかもしれないけど……一二歳以上なら入学の資格はあるんだ」

「そういうもんかね、ま、トゥリユー、するとお前さんはエリートってわけだな」

「エリートだなんて、とんでもないよ。家族の反対押し切って、やつとの思いで行ってるんだもの。奨学金貰って」

「そういうもんさ。おれの甥っ子だってスルフェイク侯爵から奨学金を貰ってるさ」

「スルフェイク侯爵？」

「スルフェイク州の知事だよ、坊や、じゃなかった、トゥリユー。ドルスのアップタウン、ロドニー・エリアに邸宅がある。行ってみな。運が

よけりや、侯爵にも会える」

「あんまり興味ないな、伯爵とか侯爵とか」

「だろうさ。おれも実際興味ないね。特に、首都の偉いさんたちにやあな。ただな、トゥリユー、侯爵には興味を持ってもいいぜ。おれが保証する……」

入管でトラブっただろう？」

「え？ うん、少しね」

「入管の奴らは国家公務員だからな。鼻にかけてやがんだよ、中央政府直属だつてのをな。その上に、中央政府の方々はあの連邦嫌いと来ている。おれの甥っ子も出国で散々トラブらせやがった。やれ、書式がどうの、手続きがどうの、書類が足りない、多すぎる、挙げ句の果てに書類が整いすぎるとか何とか……大分、ましにはなったが、メルティアの人間がメルティアから出るのは大変だ」

「お役人ってそういうものじゃないのかな？ 連邦だって大して変わらないよ」

「おれも公務員なんだぜ、トゥリユー」

「へえ？」

「要は上に立つ人しだいさね。甥っ子が連邦母星に行けたのも、スルフェイク州民だからさ。にしても、もてるだろ？」

「え？」

「おまえさんさ、トゥリユー。ビルから出てきたときは、女の子かと思っただぜ。まあ、女の子にしては背が高すぎるし、なんかちよいと雰囲気も違ってたしな」

「もてる？」

苦笑。彼よりも六歳年下の弟、レイフル・ファウルスがよく女の子に間違われ、その度に奮然として「お嬢ちゃんじゃないよ！」と反論する。

「四歳で連邦母星を離れて大学に入ったトゥリユーは、明らかにそちらの方面では晩稲^{おくて}だった。

「瞬^{しゅん}右手の視界が開け、陸地に切れ込んだ海がハイウェイの足元を洗っているのが見えた。ささやかな入江の先端。低い丘陵に抱き抱えられるように、さして大きくもないスタディামのような建築物が視界をよぎった。

「ファアリック・トヒユナ・メモリアル・パーク・スタディাম。先代のスルフェイク侯爵を記念した名前だね」

「尋ねられもしないうちに説明が入った。スタディামは一瞬に小高い丘の陰に隠れ去り、ハイウェイの右手に広大な海港が、左手に閑静な住宅街が展開し始める。航空機や高速エア・カーが極度に発達した連邦圏で、船舶の利用はさして活発ではない。惑星表面の八割以上を水圏に包まれ、漁業を主要産業の一つとするメルティアは、希な例外だった。

「ファアリック・トヒユナ？ 歴史家の？」

「漆黒の美しい瞳が驚きに見張られる。振り向いた微笑が鮮やかに白い。ああ、スルフェイク侯爵は学者の血統だそうだ。

「ここらあたりからドルスのダウンタウンに入りかける。トゥリユー、ドルスの人口は知ってるか」

「知らないけど、五〇万人くらいじゃないのかな。そんな大きな街には見えない」

「どうこい、三〇〇万さ。見た目よりも広いんだぜ、この街は。物事を見た目で判断するのはよくない傾向だぜ。トゥリユー」

「そつなの？ 気をつけるよ」

視線を転じる。高速で流れ去っていく窓外の風景に。閑静な町並みは好みに合っている。海から深く切れ込んだ細長い湾に沿って広がる家並みは、連邦母星には見られない、白い積み木のよつ。

「きれいな街だね」

「古い町だからな。ぶっ壊して高層ビルをおっ立てようなんて計画もあつたらしいがな……侯爵の反対で潰れたそうだ」

「無論、ダウンタウンの中心街には超高層ビルが密集して建ち並ぶ。ダウンタウンエリアを取り囲むいわゆる旧市街には、今、窓外を流れ去っていくような繊細で古式な建築が多い。スルフェイク侯爵は代々、ダウンタウンエリアの拡張には細心の注意を払ってきたのだという。

「ダウンタウン周辺の旧市街を取り壊し、一挙にダウンタウンエリアを数倍に拡張しようとする計画はメルティアでも有数の大資本の手になるもので、リアー王朝政府の承認も得ていたのである。先代ファアリックは反駁した。『急激な変革にはかならず無理がある。無理な変革は弊害をもたらす。そして、変革ゆえの弊害を被るのはかならずドルス市民の役回りになる』」

「攻撃は激しかった。

「件^{けん}の大資本はファアリック・トヒユナを最初、懐柔しようとして失敗した。説得も買収も効かないことを悟ると、彼らは恫喝から脅迫に転じた。メルティア政府からの圧力、マス・ジャーナリズムの矛先を揃えての中傷攻撃。果ては侯爵邸にレイ・ガンを撃ち込むというテロリズムまで動員しての脅迫は、結局奏効しなかった。ファアリックは平然としてこれらの圧力を払い除けたのであるから。

「偉いね」

「笑顔がいい。一五歳。生意気盛りの年頃。それが、まるで一〇歳にならない子供のような無防備な笑顔。といって完全に子供じみているというのともやや違つ。

「偉いとも」

「フライアンは、スルフェイク州がメルティアで最も豊かで、安定した

地域であると自慢する。

「ま、全く問題がないってわけじゃないがね。ほかよりは少ないってことさ」

「そつだつてね」

この時期のメルティアの人口は約一二億、数百年前、シエルメス圏……當時はエルメティア圏と呼ばれていたが……唯一の有人惑星の地位を独占していた頃には約一〇〇億の人口を数えていたのだが。三次にわたる“惑星独立戦争”と、リアー王朝成立に伴う動乱がメルティアの人口を激減させたのだ。現在、メルティアの地表は一〇〇余りの州に分割され、それぞれが爵位を持つ、いわゆる大貴族の私有地になっている。

連邦暦二四九九年にリアー王朝を開いたジェフィユス・レン・リアーの統治は巧妙だった。トゥリユーは、豊富な歴史の知識を、胸のうちで繰り広げてみる。ジェフィユスは、彼を補佐し、支持した“優秀な人材”を登用して貴族階級を作り上げたが、必要以上の特権を与えなかった。与えたかに見せて、いつでもそれらを剥奪できる力を手元に留保しておいたのだ。

「ここ、ラドス、それにテルスの三州で、メルティアの人口の六分の一なんだつて」

「ほう、詳しいな、トゥリユー。考古学つてのは、そんなことまで調べめるのか」

「少しは歴史をかじつといた方が視野が広がるっていうのが、教授せんせの持論なんだ」

「なるほど、できのよさそうなせいだな……ラドス侯爵は当主のスルフエイク侯爵の親友……ご学友というやつだったかな？ テルス伯爵はスルフエイク侯爵家の傍流にあたる方だそつだ」

ダウンタウンに入る。エア・カーがハイウェイのランプを下りおりる。

スピードをぐんと落として、古びた建物の間を縫う。すでに連邦母星では見られなくなった雑然とした、それでいて奇妙に居心地のよさそうな町並み。トゥリユーは、一五歳の少年らしい好奇心も露わに、車窓に頬を押しつける。

「おつと、悪い。トゥリユー、気をつけな」

「え？」

がくん、というショック。身構えるひまもなく、トゥリユーは前の座席のバックレストに正面衝突する。

「いた……」

「大丈夫か、トゥリユー？」

「う……なんともないけど、なに？」

「うっかりしてたな。今日がその日だったんだ」

「え？」

きょんとするトゥリユーに、ブライアンは説明する。スルフエイク侯爵の妹姫が、侯爵の許を訪れる予定の日だ、と。

「妹姫？」

「ああ。今は、女王陛下下の養女になっておられる。プリンセス・オブ・メルティア、メイリア・リアー姫」

恭しい口調とは裏腹に、僅かに悪意が混じるのに気が付くほど、トゥリユーは十分に聡い。悪意が向けられているのが妹姫とやういふ存在なのか、それとも当代のメルティア女王なのか不分明ではあったが……

「ピンとこないな、お姫さまだの、女王陛下だのって言ってもさ」

「雲の上のひとであることは違いねえがね。侯爵は公正なお方だし、おかげで俺もともに食っていける。甥っ子は大学にまで行けた。他の州じゃ、こうはいかない。それが面白くないってお方も、雲の上には多いのかも知れねえ」

つまり女王陛下が気に食わないということか、とトゥリユーは納得する。第二代メルティア女王ルリア・セウレリウス・リアーの政治家としての評価が極めて低いことを、彼も知っていた。

「……プリンセス・オブ・メルティアのお車の通過を待ちます。五分ほど、お待ちください……」

ブライアンが、数えるほどもない乗客にアナウンスするのを、トゥリユーはぼんやり聞いていた。ドルスを斜めに横切るマーケット・ストリート。この通りを横切った向かい側の、さして高くはないが小綺麗な建物がメイスフィールド・イン。ドルスを代表する有名なホテルだ、とアナウンスが付け加える。その向こうがドルスのビジネス街。金属とブラステックの超高層建築が林立する。

待つ程もなかった。護衛らしい黒塗りのエア・カーに先導されて、白いオープンタイプのエア・カーが近付いてくるのが、トゥリユーの視野に入った。

「あれ、たった一台？」

「うん、どうしたい？」

「護衛って一台きり？」

「一台でも十分じゃないか」

「どうしてさ。危ないじゃない？ それにオープンカーだなんて……」

「ここはドルスだ。コーネットの下町じゃねえ」

連邦首都の名を上げて、ドライバーはやや尖った口調になる。スルフェイク侯爵の親族を狙うような不心得者は、少なくともドルスの住民にはいない。表情がそう語っている。スルフェイク侯爵と彼の一族は、スルフェイク州の人心を得ているようだった。

「でも、よそから来るかも知れないよ」

「……」

不機嫌そうな表情で、ブライアンは黙り込んだ。噂は本当だったらしい。トゥリユーは思う。世襲と特権の最悪の害毒が、他の貴族たちの施政を蝕み、リアー王朝の基盤を緩慢に食い潰していきつつある間に、代々のスルフェイク侯爵は……連邦の遺伝学者が驚嘆も露わに例証するのが常なのだが……いずれも政治家としての力量と、学者としての学識において非凡さを証明し続けた。もつとも、何とでも何癖はつけられるもので、暗君と暴君を欠く点で、スルフェイク侯爵家の歴史は実に不毛で退屈を催させるものである」と批評する歴史家の存在する所以。

だから、メルティアが次第に衰微し、人口も漸減する一方で、スルフェイク州だけは連邦の繁栄をそのまま移し植えたような活気にあふれている。連邦に亡命するだけの資金、つて、あるいは故郷を振り捨てるだけの蛮勇に欠けるメルティア人は、政府の禁令を破って、少しずつスルフェイクに流入する。

人口の減少は生産能力の減退から税収の減少につながる。他州の貴族はメルティアへの移住を禁じた。効果がないと見ると、女王を突き上げた。女王ルリア・セウレリウスは、さして識見に恵まれているとは言えない。突き上げられるままに、不法移住者の送還をスルフェイク侯爵に命じる。スルフェイク侯爵は、当然のように跳ねつける。それどころか、ドライバーのブライアンの甥のように、毎年何百人かに奨学金を与えて連邦に留学させることまでしている。三〇〇年を経て、さしも強固を誇ったリアー王朝の鎖国体制も大きく綻び始めていたのである。

スルフェイク州に隣接するのは、チエルノボルグ、トゥルサス、トリグラフの三州。特にチエルノボルグを治めるワルト・ヴォダー伯爵は女王の側近であり、

“スルフェイク侯爵が、不法越境者を取り締まる意思がないと仰せになるのなら、州境を封鎖するまでのことだ”

と宣言した。事実、ヴォダー伯は私兵を動員して州境を封鎖したが、数百キロの州境ラインを、数千の私兵ではカバーし切れるものではなかった。怒り狂ったヴォダー伯は、メルティア宇宙軍の動員を女王に迫っているとも伝えられる。

……その侯爵の妹姫が養女になった、というか、きつと強制されて養女にされちゃったんだろっけれど、というのもそういうことなんだろっな。

思い、トゥリユーは軽い自己嫌悪にかられる。自分が、おそらくは父譲りの、政治的な勘を所有していること。それをトゥリユーは認めたくなかった。宇宙考古学を目指しているのではなかったのか。メルティアの政治学を学びに来たのではない。連邦発祥の惑星に求めるのは、政治力学に基づくパワーゲームではなく、連邦創世の記憶を伝える古い伝承ではなかったのか。

「ほら、あれが侯爵の妹姫だ」

最初、さして真剣な視線を送ったわけではなかったが、一瞬後、トゥリユーは一五歳の少年にだけ可能な熱心さで、視野を横切の小柄なあどけない横顔に視線を注ぎ込んだ。すでに西に傾きかけた太陽（北半球）の日差しが、背の高いS・P二人に挟まれた水晶色の豊かな頭髮に黄金色の光を弾けさせた。

「え、なに、子供じゃない……？」

ちよっと唾然としたような口調は、半ばは照れ隠し。ブライアンが呆気にとられたのは、いつの間にか、その手に双眼鏡（バイノーカル）が握られていたこと。「お前さんだって子供だろうが」

やり返され、トゥリユーは納得する。スルフェイク公爵の妹姫なる単語が、妙齡の貴婦人を連想させたのだ。「どっと思っ？」

「素敵（キライ）に可愛い」

これは本音。トゥリユーの頬に鮮やかな紅みが透き通ったのは、決して西日を受けたからだけではなかった。

「幾つ？」

「まだ一二だぞうだ。いや、待てよ――だったかな」

「へえ……」

考えてみれば、スルフェイク侯爵令嬢と言ったところで一歳にも満たない乳児かもしれないし、一〇〇歳を超える老婆ということもあっているはずだった。

女王の養女として首都タロスへ移されていったのが一昨年のことだったという。肩肘を張らないスルフェイク侯爵家である。それまでは、気軽な服装でダウンタウンの繁華街（モラル）をひとり歩いている妹姫を、ブライアンもよく見かけたという。

「お気の毒だと思うぜ、ったく。まだ、遊びざかりの歳なのに、やれ儀式だ、なんだって小うるせえ王宮住まいだなんてさ。ちよっと見ねえ内に何だか痩せなさったようだしな……」

「だろっね……」

心から同意を込めた。他人事には、なぜか思えなかった。

メイスフィールド・インの前に停まった。ダウンタウン・エリアの中央。バスを降りたトゥリユーは、数ブロック先に一際豪華な作りのホテルに視線を吸い寄せられる。

「ドルス・ロイヤル・スイート・ホテルさ」

トゥリユーの視線を追って、ブライアンが顔をしかめる。

「首都の大物貴族様の経営だぞうだ……ほれ、バッグだ」

ボストンバッグを手渡してくれるブライアンに、トゥリユーは改めて礼を言う。ブライアンは、分厚い唇をほころばせて白い強そうな歯を見

せた。

「また会えるといいな、トゥリユー」

「そつだね。ここ、いい所みたいだから、きつとまた来ると思つよ」

「みたいなんじゃない。いい所なんだぜ」

レジストレーション・カウンタのクラークは僅かに眉を動かしたが、すぐにそれはトゥリユーのほつそりした身体つきと綺麗に整った顔立ちに軽く驚いたからだと分かった。連邦総合大学イアス分校発行の身分証明書でOK。クレジット・カード兼用のIDカードを出さなくて済むのはありがたい。

マーケット・ストリートを見下ろす部屋に案内され、トゥリユーは窓際に立つ。

日が落ちかけている。

稜線に沿って緩やかに降りおりてくる厚い綿のような霧がオレンジ色に染まっている。

旅の始まりの瞬間の次に、トゥリユーはこの雰囲気が好きだ。思いきり一つ伸びをして、途中で買ってきたオレンジ・ジュースのプルリングを引き開ける。

「あ、これ、本物だ……」

は思わず呟いた。

連邦母星のナイザル・ネレイド邸。朝食に必ず添えられた、絞りとてのオレンジ・ジュース。弟レーフル・ファウルスと二人きりでの朝食は、気詰まりな……ナイザルと義母^{スライ}が席の一角を占めているという点で……夕食よりも遥かに心地よかった。

連邦政府からの奨学金と、教職補助^{T.A}と呼ばれる、主任教授のアシスタントに対する報酬。それに、宇宙考古学教室からの助成金や、休暇時のアルバイトで生活を立てているトゥリユーである。

ガス状巨星イアスの衛星軌道を巡る宇宙コロニーの集合体の連邦総合大学イアス校では、食糧は自給こそできるが、効率のいい酵母培養食と澱粉・蛋白ベレットからの加工食が中心。天然のオレンジ・ジュースは手には入ったとしても高価過ぎる。苦学というほどではないにしても、贅沢のできる余裕はない。

グラスを半分くらい空け、自然木で仕立てられた調度に埋め込まれるようにしつらえられたメルティア・コンピュータ・ネットワーク（メルティクス）の端末に、持参のHHCを繋ぐ。

「メルティアで最初の入植地……入植当時から住民……アクセス方法……アポイントメント……」

何人かに会うつもりだったし、アポイントメントも取ってあった。「メルティクス」の情報サービスは、連邦コンピュータ・ネットワーク（ユニコーン）のそれと大して変わらない。ただ、人名サービスにはスルフェイク侯爵の始祖であるシルウィス・トヒユナの名があり、しかし「出身地不明」。

「フー・シルウィス？ か……」

一時期、トゥリユーも興味を抱いていたことがある。

「はしかのようなものだな、トゥリユー」

主任教授は「無駄だからやめろ」などとは忠告しなかった。実際、トゥリユーはまもなく無駄を悟ってシルウィスの出身地探しを断念する。

「ただ今のアクセスの料金は……」

接続を切りかけてメッセージに気が付く。一瞬、せこいな……などと思つたトゥリユーだが、相手が「ユニコーン」でないことをすぐに思い出した。料金を確認し、HHCのスロットにIDカードを滑らせる。

「レーフラム・トゥリユー・ネレイド……識別番号……承認願います」

「古めかしいなあ……」

つぶやき、ついでにホバー・バイクのレンタル・サービスにアクセスしてみようとして、ふと手を止める。連絡エリア・カーのドライバー、ブライアンの言葉と“フー・シルウィス？”のフレーズが脳裏にのみがえっていた。ダメでもとまではないか、とも思ふ。

「ええと、スルフェイク侯爵に面会のアポイントメントは？」

“……明日、一二時三〇分から二時間、昼食に付き合うなら構わない……このことです”

「え……？」

当然、トゥリユーは戸惑う。

「確認……」

“明日、一二時三〇分から二時間。ロドニー・エリアの侯爵邸での昼食に希望者を招待されます”

「あ、そういうことが……」

納得。トゥリユー一人を特別に招待するというわけではない。

「他に何人？」

“数人。それ以上の情報の開示は許可されていません”

「じゃ、行ってみる。侯爵邸へのアクセスは？」

「パブリック・トランスポート・デザイン、公共交通機関、それとも他の交通システム？」

「公共交通機関で行けるのかな？ そうだ、侯爵邸までの道筋を教えてください」

“メルティクス”が幾つかの経路を示す。プリントアウトサービスを頼み、トゥリユーはホバー・バイクのレンタルに関心に移した。



第二章 メイリア

ふつと視線を感じたような気がして、メイリア・トヒユナ・リアーは振り返った。

見慣れたドルスのダウンタウン。宇宙港からの連絡バスらしい大型のエアカーが、遠さがる視野の端をかすめただけだった。

「確かに誰かに見られてたような気がしたのに……」

「きよるきよるなさらぬ事です、プリンセス。プリンセス・オブ・メルティアともあるう方が、物珍しそくにきよるきよるなさっていたのでは、物笑いの種ですぞ」

メイリアは、口うるさい侍従官を余り好んではなかった。まだ幼いメイリアの世話役ということになってはいるが、メイリアにとっては“拷問係”とも呼びたい。

「別にきよるきよるしてはいないわ。誰かに見られているような気がしただけ」

服装や立ち居振る舞いに余り構わないのが持つて生まれたメイリアの気質。彼女の一挙一動を細かくあげつらう侍従官。それだけで疲れてしまふ。感情を表情に出すことは、慎重に避けてはいた。しかし、月に一回だけ許されている、兄のスルフエイク侯爵邸訪問を彼女は次第に待ち切れなくなっている。

「当然です。プリンセス・オブ・メルティアともなれば、全メルティア市民の注目の的となるものです。早くお馴れなさることです」
「馴れるものかしら」

「馴れるものです」

現在の住居である白亜宮では、正面ゲートをくぐってから、王宮の玄関に達するまで約五キロ。馬鹿馬鹿しいまでの仰々しさを心から嫌っているのがメイリア。彼女の生まれ育ったスルフェイク侯爵邸と外界をさえぎるものは高さ数十センチの軽合金の柵と、よく手入れされた生け垣だけだった。侯爵邸のエントランスを出て数分後には、彼女はロドニー・エリアを貫く目抜き通り、ロドニー・ストリートに出ているのが常だったのだから。

メイリアはドルスが好きだった。幼い頃から極く気軽にダウンタウンの繁華街へ出掛けた。ロドニー・エリアのスルフェイク侯爵邸は、彼女の友人たちの前で閉ざす扉を持たなかった。

実際、早く侯爵邸に入りたかったのだが、空港に着けば着いたで愚にもつかない儀式に参加させられた。今夜はダウンタウンのホテルで近隣の貴族を招いての晩餐会に主賓として列席しなければならないと聞かされて、メイリアは癪癪を起こしかけた。

「ここはドルスよ、お兄さま以外のどなたがそんな晩餐会を主催なさるというの？」

「これはしたり……」

古くさい言葉……と前歯で下唇を噛みしめるメイリアの仕草が子供っぽかった。

「恐れ多くも女王陛下がプリンセス・オブ・メルティアのために主催なさる晩餐会ですぞ、そのような仰せようは、陛下のご恩に背くものでありましょ。お慎みになりますように……」

じゃあ、女王陛下がご自分で主賓にならなければいいじゃないの、と喚きかける自分を、メイリアは辛うじて自制する。

「明日は侯爵邸に行ってもいいのね」

「ご随意になさいますように」

もう一度、振り返る。視力のいいメイリアの視界に、大型エアカーから下り立つ数人の人影が辛うじて映る。確かに誰かがわたしを見ていたと思う。

「プリンセス……いい加減になさいますように」

また……。メイリアは綺麗な濃紺の瞳を不満そうに動かす。

「スルフェイクには連邦のならず者どもが大勢入り込んでおります。リアー王家の真の高貴さを理解しようとせぬ蛮族どもでございます。いつ何時、プリンセスに危害を加えにこぬともかぎりませぬ。私もとて、二四時間、お守り申し上げることはできませんぞ」

メイリアは黙って頷く。王宮にこもり切りだと太っちゃうからいやだなどとは口にしない。一二歳のメイリアは成長期で……ただ、彼女の都合、背の伸びるのよりもこころも体重の増え具合が早いようだったのは確かなこと。もっとも、それは主観の世界のこと。

王家の習慣で長く肩から背中にまで伸ばした髪は透き通った水晶の色。スルフェイク侯爵家の家系に独特のもの。ふつくと丸い頬と、ちよつと夢見るような眼差しのメイリアは、よく「絵に描いたようなお姫さま」と呼ばれている。

本心は、息の詰まるようなリアー王宮……白亜宮……を束の間でも忘れたかった。それに、彼女にとつての“蛮族”とはシエルメス人を意味しない。

メイリアの生まれたスルフェイク侯爵家は、約五〇〇年前、メルティアに現れた軍人政治家シルウィス・トヒュナの末裔。

「もともとメルティアには王もいなかったし、貴族もなかった」

父ファーリックの言葉を、メイリアは思い出している。ファーリックはスルフェイク侯爵という肩書きを終始嫌っていた。

「貴族そのものが悪いのではない。彼らが『統治者の義務』を十分に心得ているのなら……しかし、実際は……」

白亜宮に集食う……とはメイリアの新しいボキャブラリ……数百人の貴族が、メルティアの富を独占する。ファールリックの舌鋒は彼らへの批判に向けられた。

「リアー王朝を確立したのは独裁であり、リアー王朝を崩壊させるのも独裁だろう」。

そして弾圧。

メイリアはまだ四歳。長兄のラルクでさえ、ようやく一七歳。

メイリアの記憶が色彩を失う。奇妙なモノトーンが彼女の最も古い記憶を覆っている。

初夏。テラスでの朝食。オレンジ・ジュースのグラスに手を伸ばしかけて手を止めた。禍々しい何かしらが背を撫でたような気がした。

初夏のドルスに最も似合わぬ物。戦闘色の装甲大型エアカー。三台。完全武装の軽装甲兵。一〇〇人近く。侯爵邸を取り囲む。

「何のつもりか！下がれ！」

長兄のラルクが叫ぶ。応えたのは、不気味な戦闘色の微笑。

「同行願います、侯爵閣下」

「きみは何者だね。わたしたちは食事の途中なのだ。邪魔をしてもらいたくないね」

「これは女王陛下のご命令です。閣下を首都へ連行せよとの。左様、国家に対する反逆煽動の容疑です。無論、女王陛下のご命令に従わぬと仰せであれば、いささか不本意ではありますが、強制力を発揮しなければなりません」

乾いた音。安全装置を解除する音。爽やかなドルスの初夏の空気。銃口から立ち上る熱対流の禍々しい揺らめき。

「我々は紳士的に、閣下をお連れしたいのですが……」

「紳士的というのは、他人の家へ、朝食時に武装兵を連れて乗り込むことじゃないよ、少尉殿。国家に対する反逆煽動などという罪状は、メルティア憲法典のどこにも記載されていない。要するに女王陛下の側近のどなたかが気紛れをおこしあそばされたのだろつ」

「小官を侮辱されるところなことになりますぞ、閣下……閣下の剛毅さは、我々もよく心得るところではありませんが」

振り向けられる銃口。死の舞踏を踊る毒蛇の鎌首。降ろされたナイフとフォークが陶器を拍つ音。

「選択の余地はないようだな。でかけることにするか……ラルク」

長兄を呼ぶ。

「はい、お父さま」

「後を頼む。できるだけ早く帰るつもりだが……それからメイ」

「お父さま？」

「いい娘にして待つておいで……」

メイリアの聞いた最後の父の言葉。ファールリックは帰らなかった。

取り調べ中の心臓発作。ラルクはメルティア政府からの通告を信じなかった。

葬儀に集まったドルス市民は約二〇万。

ボウドウをおこして、それでどうするんだい……ラルクの呟きを覚えている。その時は理解できなかった言葉が、最近になっておぼろげに意味をなすようになってきている。

エアカーはアップタウンのスルフェイク侯爵邸へ向かう。スルフェイク州の沿岸の風景を、メイリアは何度見ても飽きない。

侯爵家当主、メイリアの長兄ラルクは二五歳。三年前に、ハーム伯爵の三女シェリアと結婚している。ハーム伯は、女王ルリア・セウレリウ

スの側近の一人。

「典型的な政略結婚……」

と評され、当初、ドルスの市民はシェリア・ハームに露骨なほどの忌避を示した。オープン・カーのシェリアに泥の塊が投げ付けられた事件がある。並んで乗っていたラルクがとさにシェリアを庇ったので、ドルスの市民は全身泥塗れになったスルフエイク侯爵を前に唾然とするこ
とになった。

結局、あれがきっかけだったのね……とはメイリア。スルフエイク州民が、シェリアを「我らが侯妃」として受け入れるようになり始めたのは。

シェリアの懐妊が伝えられたのは二、三ヶ月前のこと。

「男の子？それとも女の子？」

問うメイリアに、シェリアの応えは、新たな生命を宿した母親としてはさして独創的なものではなかった。どちらでもいい。健康で丈夫だったら……そして、やや居住まいを正して反問する。

「辛い？」

省略された部分は、メイリアには説明のいらぬもの。

“スルフエイクの田舎者”……陰口を聞いたような気がする。王宮の外ではともかく、内側では彼女に敬意を払うものは少ない。実質を伴うものではない女王の養女の地位。半ば公然と投げつけられる侮辱。にこやかに語られる中傷。陰に回っては、メイリアを“土臭い”だの“魚臭い”と蔑称する侍従たち。

このままメイリア・リアーでいるかぎり、いずれ政略結婚の手駒として使い捨てられるだろう。自身、政略結婚の具に供されたシェリアが、まだ幼い義妹の運命を案じたのは当然のことだった。

そして、それは既に杞憂ではなかった。

数日前……

メルティアでも最大級の貴族トルガワ公爵エイムロフト・レン・ビューロー邸。このところ連日の園遊会とダンス・パーティで疲れきっていたメイリアは、つい席についたまま夢の世界にさまいよいこみかけていた。本場に園遊会が多い……有力な貴族の主催するものであれば、王室からの出席者が求められる。大抵、メイリアが女王の名代をさせられた。早く終わるのならよいが、夜更けて延々と続くパーティなどは、まだ一〇代にさしかかったばかりのメイリアにはちよつと荷が思い。

プリンセス・メイリア
「メイリア姫」

不意に声をかけられて、びっくりして跳ね起きる。目の前に立っている成年に視点が合うまで数秒はかかったようだった。

濃紺の瞳を凝らして、声の主を観察する。貴族的に整った容姿と、小柄な彼女だと見上げるのに苦労しそうなくらい長の長身。外見からは申し分のない端麗な貴族の子弟。

「あなたは？」

「カール・レン・ビューロー」

「カルフォルミオ子爵？」

メイリアの記憶の良さは、大貴族の子弟の自尊心を満足させたようだった。もっとも、メイリアは“レン・ビューロー”の名にまつわる知識のすべてを口にしないだけの用心深さにも恵まれていたのだが。

「疲れているようだね」

「夜更かしのし過ぎですから。午前さまって言っただけ？もう三日も続いて午前さまなんですもの」

「そういう下世話な言葉遣いはきみには似合わないよ、プリンセス」
メイリアは銀色の眉を寄せ、カールの次の言葉で、椅子の背もたれに

背中をぶつけるようにして身体を軽くのけぞらせる。

「父上から女王陛下に申し入れていただいたんだ。プリンス・メイリアをばくの婚約者^{フアンセ}にしてほしい……とね。女王陛下は悪いようにはせぬとお答え下さったそつだ」

「わたし、まだ一二です。婚約なんて早すぎます」

「早すぎはしないさ、こついうことでね。愚図愚図してたら、他の誰かにきみを奪られてしまうからね……もつとも、トルガワ公爵家相手に恋の鞘当てを挑もうなどという無謀な連中にはないだろうけれど……飲物でも？」

メイリアは冷水を求め、カルフォルミオ子爵の後ろ姿を観察する。見た目はこの上なく洗練されて上品なカール。しかし、メイリアは屍臭に似た何かしらを感じとっている。

メイリアは知っていた。

「カルフォルミオ子爵」の名がまとう忌まわしい噂……

僅か一四歳でカルフォルミオ子爵の地位を嗣ぎ、更にトルガワ侯爵家の後継者と目されるカールだが、カルフォルミオ州では激しい収奪に耐えかねた州民が逃亡を図るものの、隣接州がトルガワ州であり、逃げきれぬ確率は極小のものではない。そして捕らえられた州民を直接に拷問し、処刑するのがカールの趣味であるとも伝えられている。

ため息。

「どうぞ、王女殿下」

さしだされた冷水のグラス。何かを感じとつたように、メイリアは眉間のしわを深くする。

「ああ、そんな風に眉をしかめて……せつかくの美人が台無し……でもないな。美人はどんな顔をしていてもすてきだ」

「……」

グラスを口元に持つていきかけて、メイリアはカールの端正な美貌に浮かんでいる何かしら禍々しいものを感じた。彫像の、ほんの僅かなタッチのずれが生み出す、不気味な、アルカイックな微笑。

テーブルの上でグラスの底がことり、と音を立てた。メイリアはちよつとおぼつかない足どりで立ち上がる。肩を支えようとするカールの腕から、それでも巧みにすり抜けている。カールの微笑が僅かにこわばつたようだった。

「帰ります」

「まだ、早い」

「疲れました」

「ここで休んでいけばいい。侍従たちもすぐには集まってこない。部屋を用意させよう」

メイリアはかぶりを振る。

「歩いてでも帰ります」

カールは笑う。公爵邸から王宮のゲートまでも優に一〇キロはある。一二歳の少女の足でカバーできる距離ではない。

「無茶なお姫さまだ。でも、そういうところが好きだな。スルフェイク侯爵家はそういう家風なのか？」

「わたしはわたしです……もう、帰らせて。女王陛下がはつきりとご返事なさるまでは、わたしはあなたにとつて、何でもない筈です」

また微笑。禍々しさを増した。獲物を追いつめた肉食獣というのは当たらない。彼らは獲物をなぶらない。

「正論だな。女王陛下も、トルガワ公爵家の意向を無視はできない筈だからね」

「……」

決して運命にひたすら従順というわけでもないメイリア。しかし、こ

の時に内心を占めていたのは明らかに諦めだった。このままメイリア・リアーとして生き、やがて政略結婚の結果としてトルガワ公爵妃として一生をメルティアで終える……それが自分にとって最も悲惨な人生を約束することになる。メイリアは理性によらずして悟っていた。

夜

季節は初夏。背の高いビルの間を駆け抜ける風は晩秋のそれ。強い。沿岸を回流する寒流の影響で、夜になると盛夏でも肌寒くなるドルスの気候。トゥリユーの銀白色の髪が、風に煽られるままに舞っている。

市内に住む自称考古学者と会う約束をした。半ば好奇心、半ばはドルスに特有な料理に興味をかられて招待に応じた。その帰り。有名なレストラン。新鮮な魚介類を豊富に使った料理は悪くなかった。

しかし、バスのステップに足をかけるトゥリユーの心は失望に重く沈んでいる。さつきまで会っていた“考古学者”に失望している。彼はトゥリユーの素性を知っていた。

ナイザル・ネレイドに取り入ること。

売名を志す“考古学者”にトゥリユーは少年らしい怒りを爆発させる。席を蹴った。呆れ顔のマネージャーに、無礼を承知でIDカードを突き付けて二人分の支払いを済ませてしまった。一五歳の学生の身には些か荷が重いものの、支払いを父ナイザルに頼る意思は全くなかった。

「坊や、連邦の人間かい？」

ドライバーに声をかけられる。一瞬、わけが分からずステップで硬直した。

「え？」

「連邦人かい？」

ドライバーはトゥリユーの着込んでいるジャケットに太い指を突き付ける。半ば、面白がっている表情。連邦の有名なスポーツ・チームのロゴの打たれたジャケット。メルティアでは、余り知られているはずのな
い……

「知っているの？」

「知ってるさ」

「嫌い？」

「悪くないがね。俺は連邦は好きじゃねえ……もつともな、坊や、侯爵は、そつ無下に連邦を嫌うもんじゃないとはおっしゃってる。どこ行くんだ？」

ドライバーの、乱暴だがどこかスルフェイク侯爵への敬意を示した口調がブライアンを思い出させた。メイスフィールド・インへ戻るところだというトゥリユーに、ブライアン同様、鞆革のような黒褐色の肌をしたドライバーは顔をしかめてみせた。

「悪いな、坊や。このバスじゃねえ。多分、次の次だ。近くまで行くがね、待ったほうが結局早く着く」

「そつなの？　ありがとう」

冷気を孕んだ強い風が、少し長めの銀白色の髪を吹きなびかせた。ジャケットの襟元を掻き合せる。

「きみ……」

不意に声をかけられる。振り返った先に大柄な人影があった。かなり長身のトゥリユーでさえ見上げなければならぬ程度には大柄な……

「え？」

「失礼する。身分証明書を拝見できるかな？」

「あなたは？」

眉を寄せ、トゥリユーは少し身体的位置を移動させる。彼も多少の護

身術は心得ている。大柄な、少なくともよく訓練されたことを見て取れる男を相手にするには、やや力不足であるには違いないにしても。

「ドルス市警の者だ」

男は、害意はないという意思表示のためにスーツの内懷を示してから、身分証明書を示して見せる。ドルス市警私服刑事のジェフェリー・マーティ・ライナーノート……証明書はそう読めた。

「特別警備のためだ。不快に思うだろうが、理解を頂きたい」

「警備？」

「うむ、警備だ」

IDカードを取り出し、出してからしまったと思う。さっき支払いに使ったばかりのIDカード。

「これは失礼した。ネレイド上院議員の令息と、ダウンタウンで会えるとは思ってもみなかった」

IDカードをポケットターミナルに通しながら、ライナーノート刑事は眉を釣り上げた……ようだった。暗い。目のいいトゥリユーにも、相手の表情の細部は見えない。

「父は父……ぼくとは関係ないし、ドルスには大学の研究のために来たんです」

「了解した……別に含むところがあるわけではないんだ」

“大物”^{ビッグゲーム} ナイザルへの媚がないライナーノートの言葉は、トゥリユーに不快なものではない。

「いつもドルスでは刑事さんたちがこうやって歩き回っているの？」

トゥリユーはふと思いつく。

「プリンセス・メイリア？」

「知っているのかね？」

「昼、この通りを通っていくのを見ました」

「たしかに、プリンセス・メイリアの警護のためだ。普段は、こんな手間のかかることはしない。我々も暇じゃないんだ」

「悪い情報でもあつたんですか？」

「一般的な警備だよ、ミスター・ネレイド。プリンセス・メイリアは、スルフェイク州民にとって侯爵、侯爵妃殿下とならぶVIPだ。この程度の警備は日常茶飯事だよ。」

お手間をとらせた。ご協力に感謝する」

ライナーノート刑事の話には矛盾がある……トゥリユーは思う。特別警戒と言っておいて、日常茶飯事だ、と。ブライアンは言ったではないか。スルフェイク州民でプリンセス・メイリアを狙つような者はいないと。昼間だつて護衛のエアカーは一台きりだった。

では、その後、情報が入ったのだ。おそらく、メイリアをターゲットにしたテロかなにかが計画されている……と。

「で、それで？」

彼は口に出してみる。馬鹿馬鹿しい。テロといい、謀略といい、彼が嫌つて逃げだしてきた父^{ナイザル}の世界ではないか。

僅かに胸が痛むような気がした。昼間、見かけたあどけない横顔が一瞬フラッシュバックする。ただ、単にメルティアに生まれ、スルフェイク侯爵の娘に生まれた、というだけで、あの少女は困難な人生を歩まなければならぬ。

“連邦に生まれ、ナイザル・ネレイドの長男に生まれたというだけで……” ふと、言葉を置き換えてみる。つまり、自分はその女の子に同情しているわけか。逃れようとして、連邦母星を出た。しかし、メイリアにはその自由はない。

視線を上げる。メイスフィールド・インに向かうバスが近付いてきていた。

バスを降りた時、数ブロック先の『ドルス・ロイヤル・スイート』に次々に滑り込むエアカーの群れを目にする。いずれも超高級車と一目で分かる大型車。

何となく好奇心にかられるままに通りを横切り、華やかな照明のなかに踏み込む。質素なジャケットとスラックス姿に眉をひそめるドア・マンを敢えて無視して、ラウンジにまで入り込んでしまふ。本人は意識していない。トゥリユーの物腰は、ドア・マンたちを沈黙させる落ちつきと自然さを帯びている。

「晩餐会？」

着飾った男女の行き交う雰囲気から察した。華やかな催しは余り好まない父ナイザル。しかし、社交の必要性は認めていたし、美貌で知られた義母は社交界の花形でもあった。

「誰の？」

喉の渴きを覚えてオレンジ・ジュースのグラスを出してもらい、誰にもなく問うてみた。

「プリンセス・オブ・メルティアを主賓に迎えての、女王陛下主催の晩餐会」

答えが返ってくる。銀髪、美髭の堂々たる老バーテン。ラフな服装のトゥリユーに、本来なら「出て行け」と怒号すべき立場の人物は、グラスを差し出す厳つい表情に微笑を浮かべてさえているではないか。

トゥリユーは頷く。ああ、あの女の子だね。

「もつ、来てるの、お姫さま」

「うむ。今、お見えになった」

グラスを傾けながら、視線を旋回させる。重厚できらびやかなエントランス。装飾は豪華。もっとも、顧客をランク付けして、入り口まで分

けてしまつような作りは、設計者の好みではなかったようだ。

純白とブルシアン・ブルーのドレスに包まれた小柄な人影が彼の視線を吸い寄せた。昏間、金色に見えた髪は、照明を吸って水晶色に煌めいている。思ったよりもずっと小柄で華奢なイメージ。その歩みが一瞬止まり、ロイヤル・ブルーの眸が偶然のように正面からトゥリユーの視線を捉えた。

「え？」

ちよつとびつくりする。あわててグラスをカウンタに置く。半瞬の数の一の躊躇を先行させて、トゥリユーは軽く右手を上げてみる。周囲の多くがそつしてたから。

半ば無視されると思っていた。だから、メイリアがやはり右手を軽く上げて微笑い返した時、トゥリユーは二重に驚いた。予期に反してメイリアが反応したこと。そして、その微笑の愛らしさに。

「へえ、メイちゃん、今夜は機嫌がいいみたいだな」

「晩餐会の前はいつも不機嫌そうなのにね」

周囲の会話がますます彼を狼狽えさせる。晩餐会の会場になど入り込んでしまった自分の迂闊さに舌打ちしたかった。ナイザル・ネレイド上院議員の長男。そうでなくとも誤解を受けやすい。明日からは調査、インタビューで忙しくなる。早めに休むのが正解というものではないか。晩餐会の招待客が疎らになるのを見計らい、トゥリユーは足早にエントランスを出ようとする。

「……！」

「……！」

出たとたんにつかつた。礼服に身を固めた若い男。

「失礼」

礼儀としてトゥリユーは声をかける。急いでいたけれど、決して前を

見ていなかったわけではない。向こうがやみくもに走り込んだという印象がある。それでも連邦では、往々にして難癖をつけてくる人物がいる。それも、こういう高級ホテルの客に限って。特にトゥリユーが苦学生まがいの格好をしている……実際そうなのだが、本人には苦学などという概念のかけらもない……ためか、居丈高に怒鳴りつけてくるのが多い。

それだけに一顧だに払わずにホテルのなかに駆け込んでいった相手に、かえって注意をそえられる。彼自身と余り変わらない長身、年齢は三〇代の後半に見える青年……貴族か……の横顔を一瞬に見て取った観察力において、トゥリユーは確かに非凡なものを持ち合わせていた。

「なんであんなに急いでるんだろ？」

平凡な少年であれば、そのままメイスフィールド・インに戻り、安らかな眠りをむさぼる選択肢を選んだだろう。もともと、その眠りは長くは続かなかっただろうが……

疑問。

スルフエイク侯爵のおかれた歴史的な立場、昼間聞いたブライアンの話。

メイスフィールド・インのエントランスに入りかけて、トゥリユーの脳裏で結論が閃いた。

「まさか……」

足を止める。

「まさか……そんなことが……」



第二章 ティクアウェイ 誘拐

何の根拠もない直感だった。無視しようと思った。無視しようと思つて、無意識に、若い貴族らしい男が乗ってきたエア・カーの位置とライセンス・プレートのナンバを記憶している。黒い、オープンタイプのエア・カーは、何となく“貴族”というイメージに合わない。

歴史の観察者であるところが、歴史の発掘者でありたいと願っているトゥリユーにとって、自らが歴史上の人物となることなど夢にも考えることがない。歴史の皮肉さは、彼から歴史の発掘者としての立場を取り上げ、歴史の創造者としての立場を強制することになる。この時、直感を無視していたら、彼を題材にする歴史家たちは、彼の歴史上の軌跡の無彩色さにうんざりした思いを味わつことになったはずである。

一旦はメイスフィールド・インの部屋に戻り、熱いシャワーを浴びてからベッドに横になるうとした。疲れていたし、夕食の時に少しだがワインを口にしていた。すぐに眠りに落ちられる筈だった。

が、寝つかれない。身体の内側が奇妙に熱く、眠ろうとすればするほどに神経をちくちくと突き刺す針の存在が気になった。

「……」

二時間ぐらいいしてトゥリユーは起きあがった。服を着替える。しばらく迷ってから、調査用の装具を取り出して身につけた。伝承や伝説調査用の方ではなく、辺境惑星や小惑星帯での発掘調査用のサバイバル・キットに近いもの。

ジャケットの下にサバイバル・キットを詰め込んだベストを着けて、

部屋を出る。耐弾耐熱性のある複合アラミド繊維製のベストが役に立つような事態にぶつかるとは思えないのだが、キットをすべて詰め込めるだけのポケットはジャケットには付いていない。腕時計に視線を走らせる。メルティア標準時間の二二時二五分。宇宙港についてからまだ一〇時間。

「……」

肩を疎める。一体、メルティアまで来て何をバカなことをしているのだろう。

バカバカしくなる。もう一度、部屋に戻って横になるうか、とも思つた。が、やはり頭が奇妙に冴えている。眠れそうにない。一五歳のトゥリユーには、アルコールで眠りを誘つという方法もとれなかった。

「まあ、いいや。しばらく散歩すれば眠くなるって」

メイスフィールド・インのゲートを出る。三〇〇メートルほど離れたホテルは、まだ煌々とした光に包まれている。晚餐会はまだ続いているようだった。主賓になっているあの女の子……メイリア？……は、毎日、こつこつ儀式ばかりの生活を送っているのだろうか？ 少なくとも自分だったら、一日でも我慢できないだろう。

トゥリユーは僅かに頬を紅潮させる。

記憶を探り、整理する。昼間のバス・ドライバー、ブライアンの言葉。無意識の内に集めたメルティアを取り巻く情勢。スルフェイク侯爵と、リアー王朝の歴史的な確執、そしてさつきホテルの入り口でぶつかった若い男……知識の化合物が、並外れて鋭敏なトゥリユーの直感……論理的な推測……を触媒として化学反応の微かな閃光を閃かせる。

結論は同じだった。

もう一度肩を疎め、トゥリユーはメイスフィールド・インを離れた。ミステリー小説や冒険小説の読み過ぎかもしれない。とは言え、ミステ

リーや冒険小説は、この少年の読書の範疇には入っていなかったのだ
が……

トゥリユーが思った通り、メイリアは晩餐会の主賓席ですっかり退屈
している。だからと続く挨拶。心のこもらない会話の応酬は首都と大
して変わらない。ドルスで開かれているのだから、メイリアの見知った
顔も見られぬわけでもなかったのだが、彼らはいずれも主賓席から遠ざ
けられており、彼女の無聊を慰めるすべを与えられなかった。その代わ
り、メイリアは何十人もの“大物”とワイン・グラスを交わしてまっ
く心にもない挨拶を交換しなければならない。もっとも、最初に覚えた
のは一杯のワイン・グラスで楽に二、三〇人を相手にする方法だったし、
最近ではグラスを数回空にしてもさして頬に血の気を上らせるでもない
メイリアである。アルコールは彼女の基本的な嗜好には合わなかったが、
むしろ、その日、挨拶するべき“大物”たちの名簿と挨拶のための原
稿を暗記するのが一仕事。メイリアほどに記憶力のよい少女でなければ、
それだけで参ってしまうほどの重労働だった。

「早く終わらないかな……」

所在なげにブレスレットの腕時計の表示を確認める。時間は二時四
〇分。トゥリユーがメイスフィールド・インを出てから一〇分余りを経
過しているが、この時のメイリアはトゥリユーの存在自体をまだ知らな
い。ラウンジでトゥリユーに答礼したことも、指摘されればそんなこと
もあつたな……と意識する程度でしかない。

晩餐会は三時までの予定。あと少し我慢すれば、この窮屈な義務か
ら解放され、数日間兄のもとで休日を送ることができなのだ。

「プリンセス……そろそろお時間です。お言葉です……」

いつもは煩わしくてたまらない侍従官の言葉が、この時ばかりは天国
の音楽のように聞こえる。頷き、メイリアは儀礼でない微笑を浮かべた。
予め用意された短い挨拶と、これも儀礼的な拍手。メイリアは、まだ
酒と料理を相手の歓談を終えようとはしない人々を残してメイン・ホー
ルを退出する。メイリアは、自分の存在の中途半端さ……というよりも
無意味さを感じる。出席者の大部分にとつては彼女の存在意義は単にリ
ア王室の名代というだけのこと。それであれば、挨拶を済ませた後、
早々に引き上げさせてくれればよいようなもの。ところが奇妙なもので、
メイリアが、二度そつやつて早々に引き上げてしまうと、座が奇妙に
白けてしまうのだ。

「プリンセス・メイリア、おめでとございます」

ホールからラウンジにつながる通路に出たとき、不意に声をかけられ
る。いつも前後に付いている筈の侍従官たちの姿がなかった。晩餐会の
後かたづけの準備なのか、大きなコンテナを載せたワゴンが何台か。ホ
テルの従業員らしい若い男女が、会釈してくるのにメイリアは会釈を返
す。

声をかけてきた若い、貴族的な容貌の持ち主は、メイリアの記憶の中
の人名録には載せられていない。

「あなたは？ どうしておめでとございますなの？」

「トルガワ公爵のご息との婚約の義、整われたと伺いまして」

男は、浴びせられた疑問の後者だけを答える。余り触れられたくない
話題に、メイリアの眉がちよつと険しくなった。

「名乗って下さい」

「は、わたくしはこう言つて者です」

一瞬、メイリアは何が起つたのかまったく理解できなかった。いき
なり両腕をとられて後ろ手にねじ上げられ、壁に押しつけられた。

「……！」
悲鳴を上げた口元にテープを張り付けられた。首筋にひやりとするものを感じ、微かな衝撃音が聞こえた途端、メイリアは意識を失った。くたりと力を失った少女の小柄な身体を抱えて、男はたたずんでいた男女に合図する。コンテナの一つが開かれ、メイリアの身体がその中に押し込められる。

コンテナの蓋がロックされ、あたかもホテルに關係する荷物であるかのように運びさられるのを確認し、男はさらに微かに指をもう一度鳴らした。

ホテルの正面玄関。メイリアをスルフェイク侯爵邸に送り届ける筈のエア・カーの中でメイリアを待つていた侍従官は、ホテルのボーイの一人が血相を変えて駆け寄ってくるのを認めて愕然とした。

「メイ……プリンス・メイリアが、お倒れになりました」
「何ですと？」

「すぐにおいで下さい。ドライバーとS・Pの方々にもおいで下さるよう」と、医師の方が仰せです」

「そんなにお悪いのか？」

「わたしにはよく……しかし、わたくしどもには救急の手配を依頼されておりますので、かなり……」

リアー王室からの命令でメイリアを“お守り”、あるいは“監視”するのが彼ら侍従官とS・Pたちの任務だった。生命に替えても守り抜くとは思わぬが、メイリアがリアー王室の重要な持ち駒であることも事実。そのメイリアが突然の重病に倒れるようなことがあれば、彼らの責任は無視されまい。

侍従官に加えてS・P二人、それにエア・カーのドライバーを加えた四人はスイート・ルームの一室に案内され、そこで人生の終焉を迎えることになった。スイートに入った途端、彼らの視界を閃光が支配した。閃光は可能な限り細く絞ったレーザー・ビームで、放たれた四条の光は正確に不幸な四人の心臓を貫通した。S・Pの一人が腰のホルスターに手を走らせたのが限界で、銃把に手がかかる前に数万度の熱線ビームが彼の心臓を永久に停止させたのだ。

ドライバーを含めた四人がスイート・ルームで“始末”されるのを同時に、メイリアの乗るべきエア・カーには、殺されたドライバーと同じ服装の男がさりげなく乗り込み、発車させる。何も知らないホテルの従業員は、メイリアの水晶色の髪が後部座席に見えないのを不審に思った。目を凝らした彼は、しかし、後部座席に黒っぽい帽子をかぶった少女の頭部らしいものを見いだして、不審を解いてしまった。もともと、“夜に帽子を被って帰るなんて変だな”との印象は残ったのだが……

襲撃者たちにとって、全くの誤算があったとすれば、それはレフラム・トゥリユー・ネレイドという少年がこのホテルの周辺を逍遙していたことだろう。

トゥリユーはエア・カーから侍従官たちが呼び出されるのを目撃した。しばらくしてドライバーだけが戻ってきてエア・カーを発車させるのを目の当たりにした。

後部座席にメイリアの姿が見えないのを不審に思ったのは彼も同じで、まもなく後部座席に帽子を被った少女の姿らしいものを見いだしたところまではホテルの従業員と同じだった。しかし、彼は発掘用の装具の一つとしてスター・ライト・スコープを持っていた。高性能の受光素子と増幅システムで夜間の視野を極端に明るく保つこのスコープの中で、後部座席に座しているのが人形に過ぎないことを、トゥリユーは見抜いた。

のだ。

「……！」

直感が当たっていたことを、トゥリユーは悟らずにはいられない。プリンセス・オブ・メルティア・メイリアに対するテロ……暗殺ではなくて誘拐。多分、スルフェイク侯爵に反感を持つ人々……隣接諸州の諸侯達。

自分は多分蒼白になっているだろう。トゥリユーは思う。実際、急に震えだした両足が意思のコントロールを受け付けてくれないのだ。犯罪を目の当たりにした恐怖だったかもしれない。

恐怖に立ちすくみながらも、トゥリユーの、彼がこれまで余り意識してこなかった別の一面は冷徹なまでに計算式を展開させている。

「落ちつけ、トゥリユー。落ちついて、考えるんだ。落ちつけ……」

ジャケットの下にサバイバル・ベストまで着込んでいる。寒いはずはなかったのだが、震えが止まらない。

「救けなきゃ……でも、どうして、どうやって？」

考えていたのは数十秒だっただろう。恐怖に震えるナイーブな少年とは別の一面が再び冷徹な計算式を完成させ、トゥリユーは、笑いだしている膝を叱りつけて、ホテルのエントランスに駆けつける。そこまで大胆にやるだろうか……とも思ったのだが、可能性は高い。晩餐会はまだ続いているのか、退出してくる招待客はほとんどいない。トゥリユーの腕時計は三時一〇分を指している。

一三時二二分。

「しよつがないな、リラ。晩餐会で気分を悪くするなんていい笑い者だ。ほら、しっかり歩かないか」

甲高い声。一組の男女……らしい……シルエットがエントランスに現れる。らしい、と表現したのは、男の方が女の方を腕に抱き抱えている

らしいせいだった。抱えられている方は、まだ少女と言っていにくい

に小柄な姿に見える。髪と顔は、暗色の帽子とベールで隠されている。

声は酔っていたが、危なげのない歩調で階段を歩み下りた男は、トゥリユーの記憶しているエア・カーに足を向ける。

「待て……」

叫んで飛び出そうとする腕を、誰かにぐい、と掴まれた。

「……？」

「困るな、きみ。女王陛下主催の晩餐会の招待客の方々に無礼を働いて貰っては、警備上の責任を問われるのはわたしなんだ」

「ライナーノート刑事？」

「その通り、ミスター・ネレイド。こんなところで何をしているんだね。ネレイド議員の長男という立場は、メルティアでは直ちにトラブルにつながることもくらい、きみにも十分理解できるだろうに」

「……プリンセス・メイリアがさらわれたんだ」

「プリンセス・メイリアが？ おいおい、縁起でもないことを言うなよ。彼女のエア・カーならさつき出て行ったぞ」

「偽物なんだ。お願い、ちよつと手を離して。そうすれば、全部、説明が付くんだ。早く、早くしないと間に合わない」

「おい、ミスター・ネレイド、何を言っているんだ。偽物？ 誰がだつて？」

「だから、離してくればわかるって言っているじゃないか！ 後免ね、ライナーノートさん！」

うおっという悲鳴を上げてライナーノートが、トゥリユーの腕を掴んでいた手を離す。トゥリユーが、フットボールのプレイス・キックの要領で彼の向こうずねを思いきり蹴り上げたのだ。自慢ではないが、このプレイス・キックで三五ヤードのフィールド・ゴールを決めたこともある。ただし、その後で相手チームのラインにチャージされて失神してし

まうというおまけ付きだったが。

尻もちをついて一瞬出遅れたライナーノートの腕をかくぐつて、トゥリユーは脚力の許す限りのダッシュをかけた。

「……！」

何事、と振り返りかける男の腕に飛びつく。彼が腕に抱えている女性が目深にかぶっていた帽子とベールを一挙動でむしり取り、勢い余って舗道に横転する。

「待て、逮捕する！」

トゥリユーに掴みかかりかけたライナーノートの動作が、急にスイッチを切られたようにぐんと止まる。視線が、慌ただしくトゥリユーから、“襲われた”貴族らしい男に転じられる。

「……！」

帽子とベールをむしり取られた後、流れ落ちる水晶色の髪と、意識を失っている白い顔は、スルフエイクの州民にとっては、夜目にも見間違いないものだった。

「貴様、何者だ。プリンセスを離せ！ 動くな！ 手を挙げる！」

「……同時にできないよ、そんなことを言っただけ」

ライナーノートのせりふに、トゥリユーは場違いなおかしさを感じて呟く。

同時に実行不可能な命令には従う必要はない……男もそう判断したらしかった。

「邪魔するな、平民どもが！」

小柄なメイリアを軽々と左腕で抱え、右手にはいつの間にかレイ・ガンが鈍い光を放っていた。ポケットに走らせかけた右手を途中で止め、ライナーノートが無念そうに唸る。動くな……と命令するなら銃を抜いてからにすればいいのに、とはトゥリユーの感想である。

「貴様もスルフエイク侯爵に忠誠を誓うのなら、ことを公にせぬことだ。ことが公となれば、大切なスルフエイク侯の姉妹の生命はなくなるものと思え。そのまま動くな」

男は、トゥリユーの存在を忘れていたわけではなかった筈である。が発見されることを予知してなかった分、男には焦りがあった。ライナーノートを銃で威嚇しながら、エア・カーのcockピットに乗り込もうとした瞬間に、タイミングを計っていたトゥリユーが躍りかかった。

もう一度やれ、と言われてやれる自信はなかった。夢中で繰り出した蹴りが、見事にレイ・ガンの銃身を捉える。銃が舗道に転がる金属音。ライナーノートがダイビングし、銃をすくい上げる。

「動くな！」

芝居がかった男ならば、“残念ながら断る”とでも答えたところだろう。すばやく動いた右手から閃光が走る。反射的に顔の前に銃をかざしたライナーノートは、自身の反射神経が自らの生命を救ったことを悟った。小型の投げナイフが銃身に弾き飛ばされ、それでも彼の髪を数本切断する勢いを失わないで夜の闇の中に消えていく。

「待て！」

トゥリユーの再度の攻撃は、今度はあつさり跳ね返された。男の右手が閃き、大型のシース・ナイフが少年の左胸に吸い込まれる。慌ててバックステップする少年のジャケットが左胸のところで悲鳴を上げた。突き飛ばされるようにトゥリユーは舗道に横転し、そのまま動かなくなった。すばやくナイフを引いた男は、エア・カーの後部座席にメイリアを放り込み、自らcockピットに身を躍らせた。態勢を立て直したライナーノートが、膝射ちの構えを取るが、射線上にメイリアが入っている。

「追わなきゃ」

倒れていたトゥリユーが起き上がり、ライナーノートの肩を掴む。ラ

イナートートの両目がまん丸くなった。

「おい、ミスター・ネレイド。刺されたんじゃないのか？」

「うん……」

心臓の真上でジャケットが裂けている。シース・ナイフはジャケットを紙のように貫いて、耐弾性のある複合アラミド繊維製のサバイバル・ベストの胸ポケットに食い込み、入っていたグラス・ファイバー製のポケットナイフをへし折っていた。ポケットナイフがなかったら本当に心臓を一刺しにされていた……かも知れない。

「運がよかったよ……それより、早く追わないと、逃げられちゃうよ」

「待て、車がないんだ。まさか、こんなことになるとは思ってなかったんだ。市警に連絡して回してもらおうが、一〇分はかかる……」

「そんな……間に合わない！」

舗道に叩きつけられた打撲で、身体の内蔵が抗議の悲鳴を上げるのを無視して、トゥリユーはメイン・ストリートへ走り出る。メイリアを乗せたエア・カーのテールランプがストリートの彼方に滲んで消えかけていた。

「ハイ、トゥリユー。こんな時間までなにしてるんだ」

陽気な声。振り返ったトゥリユーの笑顔が、薄闇の中で白く閃いた。空港・ダウンタウンの連絡用大型エア・カー。そのコクピットから突き出した黒褐色のスキンヘッドが、街灯の光を弾いている。

「ハイ、ブライアン！ 大変なんだ。あのエア・カーをおっかけて！」

「なんだ？ エア・カーを追えだあ？」

「そつ」

「落ちつけよ、トゥリユー。何があつたんだ」

「ドルス市警の者だ。客はいるのか？」

ライナーノートが割って入った。ブライアンがステップを開く。

客の姿はなかった。

「今日はもう店仕舞いっすよ、刑事さん。何かあつたんですかね。トゥリユー……そつちの坊やですがね……」トゥリユーがえらく慌ててる

「話しは後だ。すぐに発車してくれ。このまままっすぐ五〇〇メートル。それから右に折れてくれ」

感心した眼差しでトゥリユーが振り返る。

「見てたの？」

「商売だ」

無愛想な返事が返ってくる。

「追う車はシュレフ・ガネフ。年式は六二。黒かダークグリーンのオープンタイプだが、ルーフを付けているかも知れない」

「ライセンス・ナンバーは……」

トゥリユーが補足する。

「偽造プレートである可能性が強いが、今すぐ追いかければ交換している暇はない筈だ。急いでくれ！」

「何かわからんが、とにかく了解。ベルトを忘れんでくださいよ」

急発進。車体は旧式だが、エンジンは十分に整備され、出力に余裕があつたのが幸いした。間髪髪ほどの差で、トゥリユーのスター・ライト・スコープが、左に折れる黒塗りのエア・カーを捕捉する。

「ブライアン、六〇〇メートル行って左！」

「了解。けつ、こいつは道を知ってやがる。ルート一〇一に乗る最短コースだ」

「郊外へ出る気か？」

「北に行けば、ゲート・ブリッジ渡って三〇分でトゥルサス州、南ならちよいと遠回りだが、ベルステイルスのウィンゲート峠を越えてチエルノボーグ州へ入るまで四時間というところですね」

「北かな……ブライアン、と言ったかな？」

「そうです、旦那。ブライアン・ヒンクル」

「この子とは知り合いか？」

「トゥリユーとなら、今日の昼からの知り合いでさ……宇宙ごうごくだったかな。色々ね、面白い話を聞かせてもらいましてね」

「なるほど……で、ブライアン。無線機はあるか？」

「そんな気の利いたもん、載せてるわけじゃないでしょうが。『メルティクス』の端末ジャックならありますがね、肝心の端末がない」

「端末ならあるよ……あんまりいい端末じゃないけど」

ライナーノートは最初、ただの紙だと思って「ふざけるな」と言いかけたのだが、トゥリユーがコードを伸ばして端末ジャックに繋ぐのを目の当たりにして言葉を途中で咽喉の奥に押し込む羽目になった。

「なんだ、それは？」

「紙型コンピュータ。折り畳めるし、防水してあるし、端末ジャックさえあつたら、どこにでも繋げるから。遅いから端末にするとか、ちょっとしたメモをとるとかする他は何にもできないけどね」

「連邦の最先端技術製品が……」

唸りながら、ライナーノートはぺらぺらした紙みたいなキーシートにおそるおそる手を触れる。やや旧式な、しかし軽量で信頼性の高いホログラム・ディスプレイが、刑事のタイピングに反応した。

メルティクス経由で市警のメイン・コンピュータを呼び出し、入力する。

「極秘。ケース三三。ゲート・ブリッジ北行き車線閉鎖を請う」。

その間も、ブライアンの大型エア・カーとオープン・タイプのエア・カー『ガネフ』とのカー・チェイスが続いている。

ガネフのドライバーが追ってくる大型エア・カーに気づいたようだった。

た。

「気づかれたみたいだ……」

スコープの中で、男の表情に狼狽が走るのを、トゥリユーは確認する。速度を上げたいところなのだろうが、ドルス市内の道路は狭く、交通規制が厳しい。それに大型エア・カーとは言え、ブライアンはドルスの道路網を熟知していた。

「市警に手配を回せた。ゲート・ブリッジの北向き車線を閉鎖させるから、連中を北へ追い込もう」

「危ねえ！伏せる！」

ブライアンの怒号。反射的にライナーノートがトゥリユーの頭を押さえるようにフロアに身を投げ出した。半瞬前までトゥリユーの頭があった空間を、レイ・ガンの閃光が通過する。

「とんでもねえ野郎だ。撃ってきやがった。無事か、トゥリユー？」

「ブライアン？」

「おれは無事だ。旦那、おんぼろでも商売道具なんですけどね」

「損害賠償は後日、市警に申請してくれ」

「で、反撃はないんすか。撃たれっぱなしってのも業腹だ」

「あの車には……」

ためらい、ライナーノートは苦笑する。彼が、綺麗に整えた口髭をたくわえた洗練された物腰の青年であることに、トゥリユーは初めて気がつく。

「そうか、きみはもうすっかりこの件にはまり込んでしまっているな。隠しても始まん。あの車にはメイが乗っている」

「メイ？」

「わ、ブライアン、気をつけて！」

「とつとつと！」

ハンドルを切り損ねた、というところだろう。大型エア・カーは、危うく煉瓦作り（に見える）古い倉庫の壁に接吻し損ねたノーズを間一髪旋回させる。あざ笑うようにテールを振ったガネフが急加速して距離を離そうとする。

「メイ……って？」

これはトゥリユー。

「プリンセス・メイリアのことだ。スルフエイクの人間ならメイといえは彼女を指すことになっている」

「へえ……人気あるんだね」

「侯爵の妹姪だからな。おい、ブライアン、離されているぞ」

「だから反撃はつて言ってるじゃないスカ。こいつは戦車じゃねえし、メイちゃんを人質にとられてるんじゃないことだって出来やしねえ。レイ・ガンで何発も撃たれたら、車体もドライバーもやられちまいますぜ」

「ブライアン、信号銃ない？」

「信号銃だつて？あるにはあるが、何するんだ？あんなのより花火の方がよっぽど気が利いてる」

「花火がないんだもの。逃げられないための用心。貸して……ライナーノートさん、こいつで見張つて！」

スター・ライト・スコープをライナーノートに押しつける。のぞき込んだ刑事は感心したように唸る。信号銃を受け取ったトゥリユーは、サブイバル・ベストから、小さいが重そうな袋と缶を取り出し細工を始める。「大丈夫だ、ブライアン……奴はルーフをかけた」

急ハンドルで、ベルトをしていないメイリアが放り出されるのを恐れたのだらう。オープンだったガネフの後部から合成樹脂製のルーフがせり上がった。同時に両サイドからはサイド・ウィンドーがせり上がり、

コクピットと後部座席を覆う。乗客が放り出されることはこれでなくなるが、運転しながらレイ・ガンを発砲するのも難しくなる。

「そうこなくちゃね……」

ブライアン、スロットをたたき込む。うおつと悲鳴を上げてライナーノートがシートに転げ込んだ。転がりながら叫ぶ。

「やった、奴は北行き車線に乗り入れたぞ。ブライアン、このまま追いつめるんだ」

フロアに転がったままのペーパ・コンピュータを拾い上げ、入力する。

「ケース二。ノースサイド。カウント三〇。オーバー」

「なに、それ？まるでフットボールの口頭指令^{オーディナル}じゃない？」

唾然とするトゥリユーに、ライナーノートはにやりといたずらっぽく笑つてみせた。

「似たようなものさ。“メルティクス”はメルティア政府がいつでも監視している。だからこつという暗号……というか、実際オーディナルと呼んでるんだがな……オーディナルを使つて連絡している」

「プリンセス・メイリアが誘拐された、なんて政府に分かったら大騒ぎになる？」

「そついつことだ。分かつてるじゃないか。それより、そつちの準備はできたのか？」

「できたよ。使わなくて済むんだつたら、使わないで済ませた方がいいな。あと、どれくらい？」

「すぐだ、もう見えてきた」

ドルスはゲート・ベイと呼ばれる細長い湾岸に広がった町であることはよく知られている。そのゲート・ベイの入り口。ゲート海峡上に架けられているのが全長一五六〇メートルのグラヴィトロニア・ゲート・ブリッジ。美しくイルミネートされた釣り橋である。このグラヴィトロニ

ア・ゲート・ブリッジの北岸がスルフェイク州最大の工業地域……通称『重力子工学都市』。メルティアの重力子工学関連の工場の半数以上が集まっているばかりではなく、スルフェイク州立大学グラヴィトロニア校を中心とした研究機関が集中する。

グラヴィトロニアを通過して約六〇キロ、北上すると北部ベルステイルス山系が広がり、その分水嶺の向こう側はトウルサス州となる。もつとも、トウルサス子爵との州境係争が激化してくるに連れて、かなりの数の工場や研究所がドルス市の南側に移転しつつある。

往復六車線の内、北向き三車線にゲートが下るされ、何台かの警察車が集まっているのを認めたのだらう、ガネフのスピードが急に落ちる。スター・ライト・スコープの視野の中で、ドライバーが狼狽も露わに左右を見回しているのをライナーノートは認めた。

「やつはうつたえている」

「どうして南行きも閉鎖しないの？危ないよ」

「両車線を閉鎖してしまつては混乱が大きくなる。ことを大きくしたくない」

「でも、逃がしちゃつたら……」

「逃がしはせんよ」

そうかな……トウリユーは首をかしげ、手袋をはめた手で信号銃を持ち上げる。ガスを使つて信号弾を射出する。反動は小さく、トウリユーも何度か使つたことがある。その信号弾に彼は多少の細工を施していた。余り使いたくなかつたが、やむを得なくなれば使つつもりだつた。空になつても奇妙に重い袋を、慎重な手付きでポケットの缶の中に収めた。

「色々と便利なものが出てくるポケットだな」

呆れ返つた調子と感嘆の響きが相半ばする口調のライナーノートに、トウリユーはあどけないといつていいほどの笑顔を見せる。

「ロボキヤッツ・ポケット
四次元ポケット」

「どこでもドアアツていうのはないのかい？」

言い差し、白けた視線を返されてライナーノートはちょっと絶句する。咳払いし、刑事としての威厳を取り戻そうと試みる。

「重いだらう。疲れないか？」

「宇宙服、着込んだまま何日も過ごすのよりは楽だよ。あれつて軽いのも一〇キロあるんだよ」

そうかね、と返事したライナーノートの横顔がぱっとオレンジ色の光に照らし出される。一瞬の間を置いて轟音が彼らの鼓膜を拍ち、エア・カーのウインドーがびりびりと震えた。

「手投げ弾だつて？奴、そんなもので！」

スピードを落とし、ほとんど停止状態になつたガネフに、ゲートブリッジを閉鎖した警官達は安堵の息をついた。それでも麻痺銃を構えてガネフを半扇状に包囲したとき、それが起こつた。

不意にエア・カーのコクピットから缶のような物が数個、放物線を描いて警官達の中央に落ちたのだ。

「爆弾だ！」

叫びが上がり、警官達が待避しようとした瞬間に閃光と轟音が起こつた。

衝突とそれに続く轟音が、非音楽的な調べでドルスの市街を震わせる。南行き車線は玉突衝突した数台が車線を完全に塞いでしまい、たちまちゲート・ブリッジ上に渋滞の列が並び始める。

ライナーノートが啞然として呻く。

「スタン・グレネード」

「音響榴弾……か」

「スタン・グレネード？」

「音と光だけの手榴弾さ。まともに食らえば周囲一〇メートル以内に

る人間は全員失神する。テロ鎮圧用の武器だったんだが……まさかテロリストに使われるとは……」

「んなこと言ってる場合じゃないでしょ、ライナーノートさん！あいつが逃げちゃう」

「な……」

「南行き車線に乗り入れるつもりだよ」

「馬鹿な……分離帯がある」

「でもやってる！」

「あのタイプならできまさ……」

自動制御を切ってミッションをローに放り込み、エンジンを全開して下方噴射をマキシマムにたたき込む。エンジンはひどく痛むが、市販のエア・カーでも数分間は一〇メートル以上、上昇できるはずだ。

「どうせ、盗難車だ。エンジンが痛もうが、ノズルがぶつとぼうが気にする必要もねえだろっし……」

「追っんだ！」

「無茶言わんでください、旦那。こいつは大型だ。あの手のマシンと同じ真似なんぞできっこねえ。下手したら墜落ですぜ」

「ブライアン……分離帯に寄せてできるだけ車体を上げて、照明を消して！ライナーノートさん、スコープ！」

「おっと了解……何をするんだ、トゥリユー」

「奥の手。使いたくなかったけど……」

ブライアンが側方噴射でエア・カーを分離帯に寄せる。推進を切り、下方噴射をマキシマムへ。大型エア・カーの車体がふわりと浮き上がり、座席から南行き車線を僅かに見おろす形になる。

その間に、ガネフは分離帯を乗り越えるのに成功し、ノーズを南に向ける。ブライアンの大型エア・カーが、エンジンを最大にふかしている

のを、分離帯を乗り越えようとしてエンジンの出力がそれに応えないための悪戦苦闘と受け取った。嘲るように、コクピットからレイ・ガンの銃身が突き出される。

「危ない、トゥリユー。逃げろ」

ライナーノートの叫びを無視して、トゥリユーは信号銃を構える。

大型エア・カーの窓から突き出された大型銃……シルエットからだけなら、信号銃は対戦車用のハンド・キャノンに酷似している……を認めたらしく、レイ・ガンのホールドが動揺する。まさか、プリンセス・メイリアごとエア・カーを吹き飛ばすつもりなのか？

閃光が走る。アクリ・ガラスの窓ガラスが高温で融け、トゥリユーのこめかみを熱波が叩く。第二撃は車体を貫通。シートを貫いてトゥリユーのわき腹をかすめた。ジャケット・シートの布地が焦げ、煙を上げる。耐弾耐熱のベストを通してさえ、灼けた鉄棒を押しつけられるような激烈な痛みがわき腹一杯に広がった。

思わずうめき声を上げるトゥリユー。ライナーノートが窓にとりついた。

「援護するぞ、トゥリユー！」

レイ・ガンを乱射。当てるつもりはない。うつかり当てては、メイリアを傷つけたり、または燃料タンクをぶち抜いて爆発させたりする危険性が大きすぎる。

狙われていない、と分かっているにも車体をかすめる閃光は、ドライバークの生存本能を刺激するには十分だった。レイ・ガンが引つ込められ、ガネフがスピードを上げる。大型エア・カーと行き違うまで一〇〇メートルない。

「ありがと。でももういいよ、撃つのをやめて」
「危ないぞ！」

「援護はいいってーあいつに撃たせなきゃ意味ないんだって」

叫び返し、トゥリユーは半身を乗り出して信号銃の照準を付ける。距離六〇、五〇、四〇メートル。再び、コクピットからレイ・ガンの銃身が突き出される。三〇、二〇、一〇……トゥリユーは自分の額をレーザーで貫かれる恐怖を覚えながら、信号銃のホールドをゆるめない。

距離〇メートル。

閃光。信号銃の発音音は、大型エア・カーのタービンにかき消された。ガネフのコクピットの側面で小さな破裂音。信号弾の炸裂。トゥリユーを狙った銃身がはね上げられ、閃いた閃光がトゥリユーの肩口をかすめた。またしても焼け付くような激痛が爆発し、トゥリユーは悲鳴を上げてシートに倒れ込んだ。

「無事かつ、トゥリユー！」

「う、うん……多分。ライナーノートさん……」

「手当は？」

「あとでいいよ」

言いながら、トゥリユーは奇妙なことをする。ポケットから出した小さな箱から、大きめの昆虫のような機械を取り出したのだ。メルティクスのジャックからはずしたペパ・コンのケーブルをつなぎ直し、素早く一連の数字をたたき込む。

「何だね、それは？」

「くつき虫^{スライキング・バグ}。あのドライバーを追っかけてくれる。一〇〇キロくらい、はなされても追いつけられるよ」

窓を開け、手のひらに載せたくつき虫^{スライキング・バグ}をひよいと突き出す。解放された昆虫よろしく、くつき虫^{スライキング・バグ}はブーンという羽音を立てて飛び立ち、たちまち闇の中に姿をくらました。

「あれもえらく便利^{ハイデック}な電化製品^{エレクトロニクス}ってやつか。こうこがくつても馬鹿に

できねえな」

「ブライアン？」

「あん？」

「燃料は？ 多分、何百キロか、走らなきゃなくなると思っけど……今なら入れている時間があるけど」

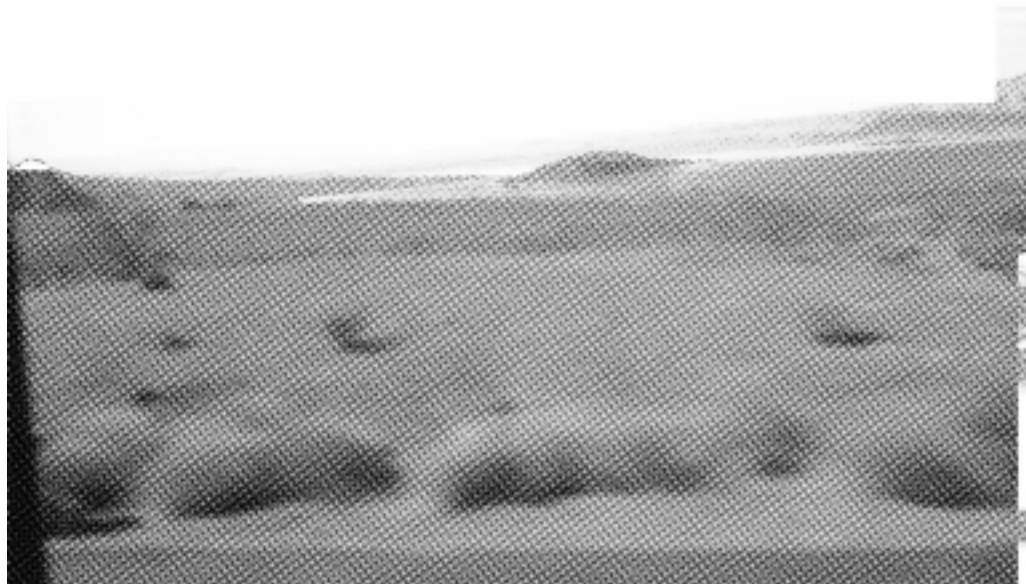
「……もう店仕舞い間近だったからな。いいとこ、あと一〇〇キロ走れりや上出来くらいしかねえな」

「……燃料代も市警のほうでなんとかさせる」

苦笑混じり。

「ちよいと自宅^{うち}へ寄らせてもらいまさ。燃料代ケチってメイちゃんをひどい目に遭わされたんじゃ、俺っちの生命がアブねえ。無理なさらんで結構ですぜ、刑事さん」

笑い、ブライアンはエア・カーのスロットルを入れ直す。



第四章 チェイス・ファイト 追跡

「お目覚め？」

金属質な響きを帯びた声に、メイリアはようやくのことで目を開いた。

「気持ち悪い……」

ひどい気分だった。

いままで味わったことのない吐き気。胃が咽喉を伝わって這い出してきたようなほどの猛烈な気分の悪さ。頭にフリキのバケツを被らされ、そのバケツを誰かがハンマーで殴りつけている、それとも、頭の中で猫の一個連隊が鼠の一個師団を追い回している、そんな頭痛。

「ここはどこ？」

「どこでもいいでしょう、プリンス・メイリア。招待を受けて頂いたことを感謝する。少々、手荒なまねをさせて頂いたが、まあそこはご容赦願おう」

妙に金属質な口調。

「あなたは誰？」

やっとのことで顔を上げるが、視界が焦点を結ばない。

しばらく頼りなげに濃紺の瞳をさまよわせていたメイリアは、がくんと首を垂れてしまう。

質問者は舌打ちし、左右にひかえている数人の男達を見回した。ごくありふれた作業着姿は、メルティアのいわゆる“西海岸”ウエスト・コーストでは珍しくもない。明らかにサイズが大きすぎる作業着でさえ、その人物の見事なほどの肢体を完全に隠しおおせているとは言えなかった。頭部がフル

フェイスのヘルメットに覆われているのが、その場を観察している第三者がいれば、残念に思ったに違いない。

「不手際だな。一二の女の子だ。もう少し、効き目の弱い薬を使うくらい知恵はなかったのか？これでは尋問もできない」

奇妙な金属質の声も、電氣的に変調を受けたものようだったが、叱責の響きを隠していない。

応える声は、やはり変調を受けているのだろうが、妙に絡みつくようないがらっぱい響きを帯びていた。

「まともな尋問など、必要はないだろう。暴力的にさらってきたのだ、今更、紳士的になりようもないではないか」

「それが不手際だと言っただよ。ドルスの警官に見咎められ、派手な追いかけつこの挙げ句に、スタン・グレネードまで使ってやっと逃げてくるとは」

「不手際をした部下は処罰する。しかし、追跡は振り切ったし、それにもうスルフェイクとの州境は越えた。この娘を煮ようと焼こうと、苦情を申し立てる者はいない」

メイリアは顎を掴まれて、顔をぐい、と引き上げられるのを感じた。

「聞こえるか、プリンセス・メイリア？　しゃべるのが辛かったら、頷くだけでいい」

「水……」

「応えられるということは聞こえている、と解釈させて貰ってよさそうだね」

手が伸び、テーブルの上の水差しをとる。冷水を注ごうとする動作を遮ったのは、先ほどのいがらっぱい響きを帯びた声。

「水などあとでよからう。さっさと尋くべきことを尋いてしまえばよい。プリンセス・メイリアに用があるのは卿だけではない」

「卿はこの娘によからぬ想いを抱いておるようだが、許さぬよ。メイを卿の想いに任せるとの約定はしてはあらぬゆえな。この娘の扱いはわたしに任せて貰う」

「話が違う！」

「ほう、どう違ふのだ？私は彼女に尋ねたいことがあった。だから、いささか乱暴なやり方ながらこうして招待したのだ。卿は、私に助力を申し入れてくれた。私はありがたく助力を受けた」

「そういう卿こそ、目的がまともでないから誘拐などという手段に訴えたのだろうが！連邦の蛮族どもでもあるまいに、卿ほどの地位にあるものが“フー・シルウィス”にとりつかれるなど、少しは恥を知ったらどうだ！」

沈黙。

ぐらぐらする視界に耐えかねて、メイリアはまた首をがくんと前に折りかける。優しいほどの手つきで首が支えられ、口元に冷たいグラスの感触が触れた。

差しつけられたグラスの感触が冷たくて心地よかった。咽喉に流れ込んで来たミネラル・ウォーターを、メイリアはむさぼるように飲み下す。

瞬間にグラス一杯の冷水を空けたメイリアに、更にもう一杯のグラスが差しつけられる。

「もう少し飲むがいい。楽になる」

「……ありがと……」

「さてな、礼はいらぬ。礼を言われるようなことはしてはあらぬから」カチリ、という金属音。メイリアは初めて、自分が固い椅子に後ろ手に戒められていたことに気づく。金属音は、彼女の両手首を拘束していた電磁手錠のはずれる音。まだひどく痺れたままの手に冷やりとしたの

は冷水の満たされたグラス。

「何をなさるのだ、伯^{コンテス}……」

「愚か者！」

蜂の羽音のような唸り。

グラスを両手に抱えたまま、メイリアはまだ霧がかかったような両眸を睜る。電磁サーベル。電磁シールドで封じた超高温のプラズマが、僅かに紅みを帯びた白熱の切っ先となって、男の喉元に差しつけられている。

「この娘の記憶力を見くびるな。衛兵の名をすべて諳^{そとん}じているのは、白亜宮^{ソラノミヤ}広しといえどもこの娘だけだということを忘れると、お互いのためにならぬ」

「……」

「……さて、メイリア」

電磁サーベルの唸りが消え、再びメイリアは顎を軽く掴まれた。

「その様子ではまだしばらく時間がかかりそうだ。少し、休むがいい。

この部屋の中を歩き回るのは自由。部屋を出るのもよい。しかし、建物からは出られぬ。疑うなら、試してみるといい」

「……？」

「呪いだよ、プリンセス。この建物を無理に出ようとすると、雷^{いかづち}に撃たれることになる。死ぬことはないが、余り愉快な目ではない。水と、食べ物が欲しければテーブルの上に置いておく。眠りたければ、眠るといい」

「……わたしに……何を尋きたいの？」

「簡単なこと……だ」

「簡単な……こと？」

「そつ。あなたの記憶力に期待する、プリンセス」

立ち居振る舞いが優美。単に優美というだけではなく、鋼の芯を思わせる勒さを感じる。

……誰だろう？

メルティアの貴族。おそらく女性。白亜宮に出入りできるくらいの高位の貴族。電磁サーベルの名手。

思い出そうとして、再び激しい頭痛と吐き気に見舞われ、メイリアはフロアにつづくまる。辛うじてもう一杯の冷水を飲み干し、粗末なソファの上に倒れ込むように崩れ折れる。しばらくはしきりに寝返りを打っていたが、息づかいが苦しげな寝息に変わるまで、さほどの時間はかからなかった。

意識とともに体力の回復を自覚するまで数時間が必要とはしなかった筈だった。一二歳のメイリアは成長期にあり、必要以上に与えられた薬剤の影響を数時間以内にはじき返す程度には十分に健康な心身の持ち主だった。

ソファから起きあがる上半身からすると滑り落ちるタオルケットを、メイリアはちよつと思議そうにフロアから拾い上げる。

ソファからフロアに降り立つ。ようやく判然とした視界に、殺風景極まる室内の佇まいが映る。石に見えたフロアは、プラスチック加工された合成樹脂らしかった。埃こそ積もってはいないけれども、ただの石積みよりもかえって寒々しい。

頭の中にかかっていた霧のようなものが晴れると同時に、記憶も戻ってきていた。

ドルスのホテルのロビー。押しつけられた冷やりとする感触を思い出し、メイリアは思わず首筋に手を走らせる。

「……誘拐……」

軽く身体を動かしてみて、どこにも違和感がないのにちよつとほっとする。晩餐会用の盛装が、粗末な作業着に着替えさせられ、結い上げてあった水晶色の長い髪も解かれて、無造作にバンダナで束ねられている。左の首につけていたクロノ・メータ組み込みのブレスレットが姿を消している。ただ、右手首に幅の広い、ちよつと重いブレスレットのような金属環が填められてしまっていた。外そうと思つたが、特殊なロックがかけられているらしく、手がかり一つない。

天井が高い。四メートル弱はある。天井近くのエア・コンの送気口があるかなさかの風を、室内に送り込んでいる。壁は厚く、表面を樹脂加工されたコンクリート。メイリアの拳程度では傷一つ、付けられない。

ため息をついて、メイリアはドアのノブに手をかけた。どうせロックがかかっているだろうし、たとえ開いていたにしても、外には見張りがいる筈……

「……！」

ドアが開く。思いきり回した弾みに、ノブが酷使に抗議して派手な金属音を響かせるのに、メイリアは思わず首を竦める。

「……？」

予想に反して、居丈高な誰何の怒声は飛んでこなかった。細目に開いたドアの向こう側は、これも殺風景な通路。思い切つて首を出し、左右を確認する。

……誰もいない。

右手の突き当たりが明るい。目を凝らすと、どうやら窓があるらしい。ちよつと考え、テーブルのところに戻る。

武器になりそうな物は何もない。水差しをテーブルの角にぶつけてみたが、ひび一つ入らない。超硬質のファイン・セラミックス。

肩を竦め、メイリアはまだ半分くらい水の入ったままの水差しを掲げて、通路に滑り出た。

出た途端の警報を予想していたけれど、それもない。

……呪いが掛けてあるのだよ、プリンセス……

「まさか……」

呪いや占いの類は信じないが、さすがにちよつと気味が悪い。通路の一方がにわかに足音に満たされることも、天井から分厚いシャッターが降りてくる、ということもなかった。水差しをぶらさげたまま、メイリアは数秒間、通路で立ち竦む。

通路は思ったよりも長かった。光の源が、最初に思った通りに明かり取りの窓であることを確認するまで、メイリアは百歩近く両足を運動させなければならなかった。

「眩しい……」

窓の外に満ちていた強烈な日光が、薄暗がりには馴れていた眸を突き刺した。

建物はコの字、あるいは口の字型……らしい。さして大きくはないが豊かに水を湛えた池に、何羽かの水鳥が羽を休めている。池の向こうに向かいの建物の壁が見える。池の回りに常緑樹の木立が植え込まれ、叩きつけるような陽光を、木の葉が弾いて深い影を水面に伸ばしている。

木漏れ日は、しかし、鏡を思わせる池の面に弾き返り、メイリアの眸を背けさせるに十分なまばゆさを孕んでいた。ベルステイルス山系を滑り降りる露を透かしたスルフェイクの日光は、もつと柔らかで眸に優しい。叩きつけるような剥き出しの日の光は東海岸にもない。

「……」

窓ガラスは、強化アクリル系の防弾ガラス。メイリアの細腕で水差しを叩き付けたくらいではひびも入らない。

が……

「……？」

電子ロックの作動を示すLEDが消えていた。故障しているのか……と窓に手をかけてみる。

「え……？」

窓がすうつと横に滑った。

「鍵がかかってない？」

じつと身を竦めて数秒。やはり人の気配も、監視カメラが首を振る、羽音に似た作動音も聞こえてこない。

こくん、と頷き、メイリアは下唇を噛みしめる。行こう……畏かも知れないけれど、じつといても助けがくるわけがない。

外側の窓も思い切って引き開け、メイリアは身軽に窓枠にその小柄な身体を滑り込ませる。華奢だけれど十分にしなやかな脚のクッションを最大限度に活かして、二メートル弱下の地面へ飛び降りる。

「……！」

髪が陽光を弾いて、本物の水晶のようにきらきらと跳ね上がった軌跡を宙に描くのに驚いたらしい。大きな羽音を巻き起こして水鳥が舞い上がった。

「……？」

何も起こらない。

「暑い……」

違エルメデアう太陽が照っているのかと思う。本来、圧力などないはずの陽光が、灼けた鉄の塊のようにメイリアの小柄な身体の上にのしかかってくる。

建物はコの字型。ただ一方だけ開いた方向からは、真っ白と云っているほどの照り返し。唇をくいっと噛みしめ、メイリアは眉を上げた。

……帰る。ここは私のいるところじゃない。絶対に帰るの！

ほんの少し前。

RVタイプ的大型エア・カーが建物からほど近い、干上がった塩湖のほとりに停車した。

「……これが？」

唾然としたのはトゥリユー。白、というより半ば透き通った、質の悪い水晶のような大小無数の塊が、強烈な陽光を弾いて暴力的なほどの反射光を周囲にまき散らす。熱気をはらんだ風が、奇妙にべつとりと肌にまつわりつく。

チエルノボルグ州の州都コファと、トリグラフ州のトリグラフ・シティの中間地域。標高マイナス二〇メートル……平均の気温は摂氏五〇度を越える。

「死の谷の乾塩湖。話にや聞いてたが……」

唸り、フライアンが放り投げてきた物を、トゥリユーは辛うじて受けとめた。

「かけてな、トゥリユー。そいつがねえと、目をやられる。塩の結晶の乱反射つてやつあ、生なかの代物じゃねえ。エア・カーじゃこれ以上は無理だ。塩でエンジンまで一気にやられちまつ」

「……で、本当に近くなのか？」

「確かにね、半減期の反応から見ても、間違いないよ」

「……やれやれ、最近は大学生の方が、警察よりも科学捜査に長けているとはな」

「嘆くことはないよ、ライナーノートさん」

トゥリユーはにこりとする。

無邪氣すぎる笑顔に、ライナーノートは苦笑してうなずく。

「ああ、連邦とメルディアじゃ、基礎的なところで科学力の厚みに差がありすぎるんだな。間に合って良かった。弱くなったって言うたって、このあたりも昔の禁制区域だ。なまじつかなトレイサじゃ、追いきれないところだった」

「崩壊のパターンをつかめるからね」

とはトゥリユー。

「信号弾に放射性同位元素詰め込んでぶちかますなんて、よく考えつく宇宙考古学というやつは、いつもそんな物騒なもの、持ち歩くのか？」

「半減期が一〇日くらいだからね。出てる放射線もものすごく弱いし、シールドしておけば特にチェックにも引っかけられないしね」

ゲート・ブリッジで、エア・カーに撃ち込んだのは、マーキングに使うアイソトープ入りの追跡用塗料。くつきき虫は、塗料の原子崩壊で発生する放射線のパターンを追跡し、電波を発信する。

もつとも、くつきき虫が発信する電波を追跡できるような高感度のラジオは市警の装備になかったのだ。

「やむを得ない。侯爵ご自身の判断を仰ごう」

すでにスルフェイク侯爵ラルク・トヒユナには報告が入っていた。時計は夜中を大きく回って、夜明けが近い時間を示していたが、ドルス市警の呼び出しに応じた侯爵夫妻の表情には眠気は感じられなかった。

「よるしい。州兵の中から対テロの要員を派遣させよう……ラジオ装置は、グラヴィトロニアに問い合わせればいいのかね？」

「……あ、あの、侯爵殿下」

へどもどしながら切り出したのはブライアンだった。偉い方と面と向かうのはどうも……と逃げだそうとした彼を、「かまわぬ、そこにいない」と引き留めたのは侯爵自身だった。

このとき、トゥリユーは肩と脇腹の火傷の手当をもらっていたので、この場にはいない。

「侯爵^{マゼス}だけで十分過ぎるほど敬意を表して貰ったことになるのだよ、ブライアン。なにかいい考えがあるのなら言ってみてくれないか……」

確か、きみの甥がグラヴィトロニアにいなかったかね、と問われて、ブライアンは恐縮したように首を竦める。

「そうでき、侯爵。マチアスから連絡があって、その手のラジオならすぐに手にはいるって、自分で抱えてもつてくるところなんです」

「では、誘導を頼んでも良いかな、ブライアン？」

「侯爵！」

署長の声を、ラルク・トヒユナは無視した。

「ただし、無理をしてはいけない。自分たちだけでメイリアを助け出すなどと思っては行けない。場所を突き止めて、あとはプロに任せなさい。そして、できるだけ早く現場を離れるのだ」

「乗りかかった船だし、メイちゃんを誘拐するなんてとんでもねえ連中を追つかけるんなら絶対手を貸させて貰う」

ブライアンが自家用のRV型エア・カーを引っ張り出した。ライナーノートが止める暇もなく、トゥリユーも乗り込んだエア・カーがドルス郊外のブライアン宅を出発したのが、ゲート・ブリッジでの事件から四時間後。

スルフェイク侯爵が「プロフェッショナルを回そう」と言ったその「プロフェッショナル」達、五名のスルフェイク州兵の対テロ部隊と落ち合ったのは、スルフェイク州とチエルノボルグ州境界のウインゲート峠^{コマンダー}。

対テロ部隊の指揮官は、ライエル・エルブレット少佐と名乗る、背の

高い、黒ぼい髪をクルーカットにした、ちょっと物憂げな様子のなかなかの美男子だった。

標高二五〇メートルのウインゲート峠までは自動走行システムに任せて時速三〇〇キロ弱で飛ばしてきたが、峠を越えてチエルノボルグ州に入った途端、道路の舗装は切れ、エア・カーのエア・インテイクが詰まりかねない猛烈な砂ぼこりが舞い上がる。やむを得ず、オフロード走行用のホイールを出して地上走行に切り替えたが、時速は八〇キロに落ちた。

「一面真っ白だ。この世の果て。死の世界ってやつを見たいなら、絶好の場所ってわけだ」

「ぞつとしないな……」

「何、ぞつとするさ。背筋のあたりがな」

「つまり……悪いけど、ライナーノートさん……ぞつとしないなって言ったのはね」

高感度ラジオと、カー・ナビゲーター、それからペーパー・コンピュータのディスプレイを見比べながら、トゥリユーが済まなさそうな口調になるのを、ライナーノートとブライアンがぎょっとした表情で振り返る。

「反応があつちなんだ」

「……冗談なら、止して欲しいところだが……つまり、塩湖のご真ん中？」

「うん」

薄い褐色の地面が、粉を吹いたような白茶けた色に変わり、それが次第に目を突き刺すような塩の結晶の色に変わっていく。

ブライアンが車を止めたのは、かつての湖畔とおぼしいあたりだった。ドアを開ける。

吹き込んできた熱風は、重く灼けた臭いはらんでいた。

気温は摂氏五二度。

フル回転するファン・ヒーターの前、一〇センチ弱の位置に二時間以上立ち続ける無謀さと体力、やせ我慢を張り続けられるだけの気力と、その行為の無意味さに耐えられるだけの精神的なタフさに恵まれた者だけが、彼らが置かれた現在の状況を理解できるに違いない。

ブライアンのRV車に続いて停止した小型の装甲エア・カーから、白茶色のユニフォームのエルブレッド少佐も降りてくる。

「どこだ？」

「あそこだよ」

心えるのはトゥリユー。干上がった塩湖の岸から二キロあまり。塩湖が干上がる前は湖の中に浮かぶ瀟洒な小島だったに違いない。照り返しで数秒と視線を凝らしてられない双眼鏡の視界の中に、岩塩を固めたような白い壁。コの字型の二階建ての建物が、陽炎の中で塵気楼のように揺らめいている。

「絶対に？」

「少なくともくつき虫はあそこにいる。移動していないよ」

「で何なんだ、あの建物あ？」

「まだ、塩湖が塩湖でなかった時代に建てられた、チエルノボルグ伯爵家の別荘らしい」

エルブレッドが応じる。

「一〇〇年くらい前の建物だ」

「塩湖のほとりに別荘だあ、伯爵さんもたいそうな趣味だ」

「一〇〇年以上も前の話だ、ブライアン。当時は、まだこのあたりに緑はあつたし、この塩湖だって真水を湛えてはいたんだ……ただ、気候というやつは人の望むようには変化してくれないものだ」

「海まで三〇〇キロない。スルフェイク州の海水の淡水化プラントを拡

張して、このあたりを灌漑する計画もあったんだが。先々代から三代続けてチエルノボルグ伯爵家には暗愚な当主が続いた」

ライナーノートの慨嘆をエルブレッドが引き継ぐ。

え？という表情で見返すライナーノートを、エルブレッドは無視した。「先代と先々代のスルフェイク侯爵にしたところが、毎日何十万トンっていう真水を無料でチエルノボルグ伯爵に引き渡すほど、お人好しではなかったな」

「……政治学と気象学のディスカッションはあとでもできるとして……どうするんだ、エルブレッド少佐？」

「コマンダー」
指揮官でいい」

ぶっきらぼうに応じてから、付け足しのように説明する。名で呼ばれるのは立场上拙いのだ

「ちよつと仕掛けをして、突入する」

あつさり言つてのける。

「突入は我々五人でやる。建物の電源を制圧し、一階から制圧をかける……そのくつつき虫で、ターゲットの位置は特定できるな？」

「ええ」

「では、わるいがトウリユー、そのラジオを持って同行してくれたまえ。我々の車を、できるだけ近くまで近づかせる。電源を潰せたら、一気に突入。きみは車の中で待機していてくれ」

「まだ一五歳の坊やにそこまでやらせるんですかい？俺たちも行きませ」

「君の車を待避させて貰わねばならない。スルフェイク州民が、許可なくチエルノボルグ州に入り込んでいた……それもプリンセス・メイリアが誘拐され、監禁されていた建物の近くまで。悪いがミスター・ヒンクル。きみはここに残っていてくれ。我々が出発したら、一〇キロほどウィ

ンゲート峠の方へ下がっていてくれるとありがたい。連絡用の無線を渡しておく」

「しかしですね、だんな」

「侯爵からの命令なのだ、ミスター・ヒンクル」

「それを言うなら、彼……」

「ブライアンはトウリユーに軽く顎をしゃくつて、

「連邦市民が混じってるのはもつと拙いでしょうが？」

「だから、彼には同行して貰つ。五人では、彼一人とプリンセス・メイリアをガードするのが限界だ。だから、きみには下がっていて貰いたい」

「では、私が行こう」

これはライナーノート。

「彼の護衛だ」

ちよつと値踏みするように目を細めてから、エルブレッドはうなずいた。

「いいでしょう、ライナーノート刑事。くれぐれも自重していただけるように」

じゃ、準備しよう……これはトウリユー。

「……で、何に使うんだ、これ？」

「何かの役に立つんじゃないかと思って……」

「何か……って、おい」

「役に立たなかったら食べちゃえばいいじゃない」

「食べちゃえば……って。一〇キロだぞ、おい。何枚焼けると思ってる？」

深夜営業のコンビニ・ショップでトウリユーが買い込んだのは、ホットケーキミックスが一〇キロ。粉砂糖が五キロ。

「ケーキ屋でも開業するつもりなのか？」

「なに、驚いてるの」

呆氣にとられるブライアン、財布の底をはたかされてうんざりするライナーノートを前に、トゥリユーはあつさりと言い切つて彼らを一気にずっけさせたのだ。

「お金がないときの朝御飯の定番じゃない。使わなかったら、メルティアのおみやげにもらつて帰るよ。それより、ライナーノートさん、それからブライアン……あれ、だけども」

「……そいつならできる筈だが……効果があるのか？」

「多分ね。見てきたけど、小さくて五ミリくらいだよ、この辺の塩の結晶。個体の塩なら、エア・インテイクにそれくらいのフィルターをしておいたら防げるでしょう？」

「準備不足で突入して、敢えなく討ち死に……なんてぞつとしねえ。やりましようぜ、刑事さん。この坊やの指示は確かだ。従つといて大きく外れたりはしませんぜ……でも、よく考えつくぜ」

「……うむ」

ちよつと躊躇い、ライナーノートは迷いを振り切るように大きく頷いてみせる。

「オーケー。準備に二時間くらい、か？」

「ええ。早く始めたら、早く終わるよ、ライナーノートさん」

暴力的なほどの日差しの下。八人は作業にかかる。持参の探知機を手には、干上がった湖の岸辺に沿つてゆつくりと移動する対テロ班の隊員。

一方、トゥリユーたち四人は、大きめの岩塩の塊の影に日差しを避けつつ、ホットケーキミックスと取り組む。

準備に二時間あまり。

「大きくないつたつて、差し渡しで四、五キロは楽にあるぜ。メルティアでいちばん暑い所で、塩に囲まれてのトレーニングときた日にや、どうもぞつとしねえ」

垂直近くまで上がりきった太陽^{エル・ス・ソール}を見上げ、ブライアンが頑丈そうな肩をすくめる。

できるだけ白っぽい服装をしろ……指揮官からの指示に、トゥリユーはサン・グラス……とつよりゴーグルに近い……をかける。銀白色の綺麗な髪を白いバンダナで包み、銀鼠色のベレーを被る。彼に倣つて、ライナーノートも海賊ならぬ、山賊スタイルを整える。

「行きましよう。余り時間はないと思つんだ……」



第五章 シル・ウィスの正体？

一瞬、砕けたガラスが一面に敷き詰められているのかと思った。

強すぎる日差しを避けて、コの字型の建物の開口部にたどり着いたメイリアは、乱舞する光の洪水に襲われて立ちすくむ。空から降り注ぐ光でさえ、まるで頭や肩に圧力を感じるほどの強烈さ。それが四方八方、上下左右、ありとあらゆる方向から乱反射して、あたり一面が光の増増。
「これって何なの？」

まともな目を開けていられない。ほんの数秒、視線を据えてただけで、目の奥に錐を差し込まれるような痛みを覚え、涙が吹き出してくる。狂気のように乱舞する光は、延々と地平線までを覆っている。

「これが呪い？ そんな……」

無理をして更に数歩を踏み出したメイリアは、爪先を何かにひっかける。目を半ばやられていてはバランス感覚どころではない。たちまち、メイリアは光の渦の中に転げ込んでしまう。

「きゃっ！」

舞い上がる細かな白い煙。吸い込み、メイリアはびっくりする。

「塩？」

そして“それ”が来た。

立ち上がりかけ、メイリアは甲高い悲鳴を上げて左手首を押さえた。膝を折り、彼女は全身を戦慄させる。

もう一度、“それ”が来た。今度は、鋸に突き刺された魚のように、メイリアは左腕を掴んだまま華奢な身体を跳ね廻らせた。歩こうにも脚

が痺れ、それよりも神経を直接かきむしられるような激痛への恐怖で全身がすくんでしまつて動かない。

「……ひどい！」

“呪い”の正体がわかつた。左手首にはめられた金属環。建物を離れようとする、高電圧がメイリアの全身を刺し貫く。

「……綺麗な女の子が苦しがつて、のたうち廻るのは、見ていて悪い眺めじゃないな。警告はしたはずだよ」

残忍な喜びに毒を滴らせそんな口調。

「卑怯者！」

「口のききかたを知らない田舎者にはしつけが必要だ」

もう一度……しかし、上げかけた悲鳴を咽喉の奥でかみ殺しきつたメイリアに、作業服とフルフェイス・ヘルメットの男は目を瞠つたようだ。

「これは驚いた。スタン・プレスレットの電撃にも馴れてしまえるほど、下賤の者は適応力が高いのかな」

「卑……怯……者……」

それが自分の声だとは思えないくらいに掠れ、切れ切れな声だったが、ありたけのプライドを込めて繰り返す。卑怯者と。もう身体感覚はない。メイリアは彼女の気丈さを誇つて良かった。大の男でも一回目で昏倒してしまつてもおかしくないのだ。

「何が卑怯者だ！ スルフェイクの田舎者が、自分を何様だと思つている！」

「……ほかの何だつて言つての！」

許せない、と思う。体の自由を奪つたら、電撃は一回で十分だった。この男は、明らかにメイリアの苦しむさまを楽しんでいる。単語を知つていたら、メイリアは相手をこつ罵つただろう。

“このど変態！”

どちらにとつて幸いなのか……メイリアの俗語に関する知識はせいぜい“午前さま”までである。

男は、スタン・プレスレットのスイッチらしい押しボタンをわざと掲げてみせる。メイリアが苦痛への恐怖に駆られるさまを期待したのだろうが、誇り高い濃紺の瞳はもはや動揺を示さない。

「まだ言うか！」

「もう止められよ」

蜂の羽音に似た電磁サーベルの唸りが、音程の外れた男のわめき声に重なつた。

「いい加減にされよ。卿の不健全な嗜好は、卿の領国でのみ発揮されるがよい。せつかく正氣に戻つてくれたのに……これでは、また暫く時を措かねばならぬではないか」

「……彼女を捕らえたのはわたしの部下だ」

「それが、なにか？」

「彼女に対する優先権はわたしにある！」

「……つたく」

あまりにも明るすぎる日差しの中で電磁サーベルの切っ先の動きはほとんど見えない。作業服の腕も動いたように見えなかつたのは、手首だけでサーベルを操つたためだろう。

半瞬後、男の咽喉から何とも形容しがたい悲鳴が迸る。スタン・プレスレットのスイッチを放り出した男は、辛うじて頭部の皮膚だけを残して切り落とされたフルフェイス・ヘルメットの頭頂部を押さえて尻餅をつく。

ひよい、という爪先の動きで、スタン・プレスレットのスイッチが宙を舞つ。電磁サーベルを構えていない左掌に吸い込まれるように収まつた。

「私に必要なのは理性的な同盟者であって、いい歳をしてしつけの必要な幼児もどきではない。幼児ならしつけがいもあるが、卿のような臺の立ったものは好みの外ゆえな。卿が自らを律せぬと言うのであれば、律せるようにして差し上げてよいが……」

「こ、後悔するぞ、伯！」

「また！」

舌打ち。

今度は腕が唸った。ひいっという悲鳴が上がる前に、今度はヘルメットの側面が削り落とされ、耳と黒い髪が露出する。

「卿が私の身分を隠すことに興味を示さぬと言つのであれば、私も卿が顔を隠すことには同意しかねる」

「……こんなことをして……！」

「私の忍耐力に余り過大な期待を寄せられますな、御曹司。ヘルメットごと、卿の首を宙に舞わせたいという衝動を、先ほどから押さえかねているのだ。卿にメイリアは渡さぬ。卿に優先権など与えたら、私の目論見などすべて水の泡だ」

男はよろばい起き、捨てぜりふを探しているようだったが、剣呑な唸りを上げる電磁サーベルの切っ先が、すべての言葉を咽喉の奥に押し込んだようだった。

八つ当たりのような怒声を浴びせながら、部下らしい男たちに抱え起こされ、それでも虚勢を張るかのように胸を反らし気味に立ち去っていく。

身体は麻痺したようになっていたが、メイリアはおもわずくすりと笑う。笑った途端に緊張が解けた。緊張が解けると、忘れていた苦痛が津波のように彼女の全身を浸す。

「痛……」

剣呑な武器を腰の鞘に戻し、電磁サーベルの主はメイリアの傍らに跪く。

僅かにためらってから、フルフェイスのヘルメットを脱ぎ、無造作に放り出す。ヘルメットの中から現れたのは、三〇路にはさしかかっているだろ。漆黒の髪に縁取られ、ダークブルーグレイの瞳が危険そうな光を湛えた端麗な容貌。

メイリアは目を睜る。

「トリグラフ伯！」

白亜宮では“もう少し表情が穏やかであれば絶世の美女”と噂されるトリグラフ伯爵夫人コリーン・ミライユは、微かに肩を竦めた。

「あの愚か者がそなたの前で、私を二度も“伯”と呼んだ。電磁サーベルの使い手の女伯爵……プリンセス・メイリアは聡明の生まれと聞いている。隠しても意味があるまい……それに……」

「……？」

「それにあのヘルメットは暑苦しい。この暑いのに、あのようなものをかぶっていては、よからぬ企みでも懷いておるのではないかと、他人に勘ぐられる」

十分に悪企みはしているが……トリグラフ伯コリーンは唇を歪めるようにして薄く笑う。

「痛い……」

「ほんの少しだけ我慢するがいい」

作業服のポケットから注射器とアンプルを出し、手慣れた手つきでメイリアの首筋に注射を打つ。

「さて……愚か者のおかげで手順が狂いつぱなしだ。そなたには悪いが、痛みが和らいだら、悪漢どもの首領におつき合い願う」

「……悪漢どもの……首領？」

誰のこと？と訝しげなメイリアに、コリーンは顎を反らすようにして笑う。

「妾のことだ」

「特段、煩雑なことを思い出してもらおうと思ってるわけではないのだ」

トリグラフ伯がメイリアを伴ったのは、建物の二階、メイリアが閉じこめられていた部屋とは比べものにならない程度に調度の整えられた続き部屋だった。

「聞きたいのは、“フー・シルウィス”への回答だ」

「“フー・シルウィス”？」

「知らぬ、とは言わせぬよ、プリンセス・メイリア」

その名で呼ばれるのは嫌いだった。が、トリグラフ伯コリーンに、彼女が最も好きな呼ばれ方を許す気にもならない。

面と向かってメイリアを“メイ”と呼べるのは、三〇〇億を超える連邦圏の住人の中で彼女の父と兄、そして兄の夫人であるシェリアの三人、四人目が現れるかどうか……それはメイリア自身にも確信がない。

そういう人と巡り会えればいいな……とはメイリアの想い。

「スルフェイク侯爵家は学者侯爵家……それも、おびただしい数の歴史家を輩出する歴史家の一族だ」

蜂の羽音に似た唸り。

魔法のように、かすかなピンク色を帯びた光の杖が、コリーンの手から吹き伸びる。端麗なといつていい美貌が、電磁サーベルの放つ鈍い光を浴びて、奇妙に陰惨な陰影を帯びて浮かび上がる。

「シルウィスが現れたのは六〇〇年ほど前のことだ。“惑星統一戦争”

に巻き込まれた連邦圏を後目に、とにかくメルティアの政治的独立を保つたばかりか、あの連邦を相手にとって国家としての独立を確保できたのは、一にかかってシルウィス・トヒユナの功績と言っている」

「……」

「“惑星統一戦争”時代は、連邦圏の英雄伝説の時代だった。スティクフェスト・シャトンヒュッテ、レイモンド・ファール、ジャービス、マリオン・フェアリのネレイド父子、フェルトリック・マーゲン・ファンデルフェルト……錚々たる英雄が連邦圏を席卷した時代……いわゆる“英雄の時代”だな」

ゆえに……コリーンは結論づける。シルウィスが英雄ならざる存在として、これら綺羅星のごとくに並び立つた政戦両面の英雄たちに対抗して、メルティアの独立を確保し得たはずがないではないか。

その英雄の出自を、なぜスルフェイク侯爵家は世に伝えぬのか？

「僅か一星とはいえ、メルティアは連邦圏の中央に位置する枢要の惑星。連邦の英雄たちが、なぜメルティアを見逃したのか、興味のある命題ではないか、プリンセス・メイリア？」

「難しいことは分かりません」

綺麗な銀色の眉を、メイリアははっきりとしかめて見せる。

「シルウィスがとても偉かったから……父がそう言っていたと」

「スルフェイク侯爵ラルク・トヒユナ……そなたの兄上がそうおっしゃったか？」

にや……と微笑い、それと目に留まらぬスピードで手首を翻す。

メイリアの、高すぎるということのない鼻先に、数千度のプラズマを封じ込めた剣呑な切っ先がびたりと固定する。十数センチの距離を隔てて、メイリアは確かに鼻先に空気の焦げる臭気を感じる。

「……改めて聞きます、プリンセス。“フー・シルウィス”？」

「知りません……知っているとしたら、兄しか居ません」

ほつ……という表情でコリーンは電磁サーベルを引つ込める。灼熱の刃で、愛らしい曲線を描くメイリアの鼻梁を切り苛む嗜虐的な嗜好とは、少なくとも現時点のトリグラフ伯は無縁であるらしく、メイリアに安堵のため息をつかせる。

「よるしい。では、スルフェイク侯爵に尋ねることとして、妾の仮説を聞いてもらえるかな？」

「……？」

「連邦圏へ留学生を出しているのは、なにもスルフェイク州だけの特権ではないのだよ、プリンセス」

「伯のところでも？」

「妾は、宇宙考古学という学問にささか興味があつての。」「存じか？」

水晶色の髪をまつらわせるようにして、メイリアは頭を振る。瞋ったロイヤル・ブルーの瞳が無邪気なほど愛らしい。

「かの“英雄の時代”、シルウィスが連邦に対抗してメルティアの独立を確保し得たのはなぜか？何のプレゼンスも持たぬ国家に好き勝手をさせておくほど、連邦も甘くはない……」

「……」

「まあ、このような話をしてもしあなたには退屈なだけであらうゆえ、先に結論を言おう。トリグラフ伯爵家のスタツフはこう結論を出したのだよ、メイリア。」

シルウィスが、連邦が無視できないような何らかのプレゼンス……強力な軍事力、科学技術を持ち合わせていたか、それとも連邦のしたたかな指導者を言いなりに動かしてしまふ何らかの技術を有していたか……」

「知りません、そんなこと」

「そなたが知っているだろうとは、実のところ、妾も思つてはおらぬ」

「え？」

「先走らず、もう少し聞くがいい。いずれ、まだ身体を動かすのも難儀であるつゆえ」

身を埋めていたソファから起きあがろうとして、メイリアは顔をしかめる。今年のはじめに、アール恒星区からやつてきた使節団。メイリアにとって信じがたいことに、彼らはカーペットのフロアに、膝を折り敷いて座るのを正式の例としていたのだ。

さすがに晩餐会までそうはならなかったものの、出迎への儀礼の時に生まれて初めて“正座”をさせられたメイリアは、感覚がないほどに痺れきった脚の痛みを隠すのにありつただけの自制心を振り絞らされる羽目になった。

ちょうど、正座しすぎて感覚がなくなつた脚に緩やかに血が巡つていくような感じ。

「メルティアではこの程度を調べるのが限度。それゆえ、妾自身が連邦へ出向いた」

「そんな……伯爵家の当主が」

「伯爵家の当主ゆえにいくらかも抜け道はある。昨年一杯、そつ、連邦圏のイアスとやらいうところの大学に籍を置いた」

メルティア・グラヴィトロニア総合大学の助手を詐称して工学研究室の一つに、堂々と“派遣研究員”として籍を置いていた一年間に、トリグラフ伯は“宇宙考古学”の存在を知つたといふ。

「面白い研究をしている少年がおつた。名は、忘れたが、人類の発祥の地はメルティアではなく、どこか遠く離れた銀河の彼方じやと言つ」

「……？」

「シルウィス、あるいはシルウィスが指導した当時のメルティアに、連

邦を圧倒できる軍事力や科学技術力はなかったことは明らか。妾は思ったのだ。シルウィスというのは、この“失われた人類の真の故郷”の間ではなかったのか、とな。

いや、メイリア、聞くのだ。妾には“失われた人類の真の故郷”とやらには興味はない。しかし、我らが神話にしか記憶をとどめておらぬような過去に、銀河を渡り得たとすれば、シルウィスの故郷は、連邦など比較にならぬほどの高度な文明が栄えていて考えるのは誤った妄想とは言えまい。連邦を恐れさせた政治的なプレゼンスとは、シルウィスの人ではなく、シルウィスの故郷なのではないか……そして、シルウィスの出自が明らかになれば、我がメルティアは連邦を恐れる必要など、金輪際なくなる、圧倒的な力を手に入れることがなつのだ、と」

「そんなの変です。もし、そうだったとしても、どうしてシルウィスだけなの？もつとたくさん人がやってきて、私たちだってシルウィスのふるさとのことを覚えていたって不思議じゃないでしょう？」

「それゆえ、尋ねるのだ、メイリア」
「ひ……」

チリチリと空気の焦げるような臭い。メイリアは、突きつけられた電磁サーベルの切っ先に、細いおとがいをのけぞらせる。

「ありたけ、しゃべって貰う。まず、古い伝承。言い伝え。何でもよい。スルフエイク侯爵家にのみ伝わる情報をな。それと、場合によっては少々だけだが痛い思いもして貰わなければならぬ」

「……」
「何、あの異常趣味の男のようなことはせぬ」

ぶんつと言つ唸り。思わず首をすくめたメイリアが熱さを感じる暇もなかった。

切られた水晶色の髪が数本、窓から差し込む陽光を弾きながらきらき

らと舞い落ちる。

「何をなさるの！いくらトリグラフ伯爵だとおっしゃっても！」

「髪で十分と思つている」

メイリアの抗議では、しかし、トリグラフ伯爵の表情を僅かでも変えさせることはできない。優美にさえ見えかねぬほどに巧まざる無造作さで、コリーン・ミライユはまだ宙に舞っている水晶色の髪を掌に納めた。
「痛い思いはしておらぬであらう？」

「でも！」

「髪では十分でないと分かった場合には、そなたにはちと我慢をして貰うことになるが……そなたとて、注射程度のことは耐えられような？」

「え？」

「髪で十分でなければ、血、あるいは皮膚ということになるうよ」

「皮膚？」

逃亡しようとした州民を電磁鞭で散々に打ち据えた上に、生きながら皮膚を剥ぐ拷問をするという……

……誰のことだったかしら？

思い出した。カルフォルミオ子爵。彼女への求婚者。

……カルフォルミオ子爵？

分かってしまった。

あの“異常趣味男”。一度で十分なはずのスタン・プレスレットの電撃を二度、三度と加えられて苦しがるメイリアを、見て楽しんでいたとしか思えぬ、あのフル・フェイスのヘルメットの男。

あれは、カルフォルミオ子爵その人。

ぞつとしてメイリアは両腕で自分自身の身体を抱きしめる。初めて、自分がとんでもない相手の手に陥っていることが分かった。

「ちくりとする程度だ。怖がらずともいい」

「何をなさるの、私の髪や……」

「もう十分に妾の意図は説明した。これ以上をそなたに知らせるつもりはないし……世の中には知らぬ方がよいことも沢山ある」

「コリーンは電磁サーベルを鞘に戻した。」

「大人になるといふことは、知るべきことと知らざるべきことを見分ける術を身につけていくといふことだ、プリンセス・メイリア」

爆発が起こったのは、その瞬間だった。

室内に立ちこめた白っぽい煙を思いつきり吸い込んで、メイリアは激しくせき込んだ。まだ、電撃から回復しきっていない全身の筋肉が、酷使に抗議して悲鳴を上げる。

「な……？」

まったく予想外だったのだろが、打ち込まれてきた斬撃をすばやく引き抜いた電磁サーベルで弾き返したのはさすがだった。

鮮やかな鮮紅色の光が弧を描き、斬撃を打ち返しざまに、高周波ブレードを握った腕を肘のあたりから切り落とす。

悲鳴と、何かが床に転がる重い音が重なった。

「スルフエイクの獵犬か？ 獵犬なら獵犬らしく、作法を知るがいい！」

ドアごと壁を吹き飛ばして踏み込んだ一〇人近くの男たちに、コリーンの声が叩きつけられる。が、彼らは答えを省略する。手に手に高周波ブレード……厚さ数センチの鋼鉄でさえ楽々と切り裂く剣呑極まりない武器を閃かせた。

無言の応答が、コリーンに相手の正体を悟らせたようだった。

「ち、トルガワの変態息子めが！」

正面から打ち込んできた一人を、僅かに体を開いて躲しざま、横殴りに電磁サーベルを揮う。

人間の肉体が上下に分離し、上体が転げ落ちるのを目の当たりにして、

さすがにメイリアも頭の中が白くなった。

誰がある、出会え！とでも叫ぶ場面じゃないかしら……などと、メイリアは場違いな感想を懐く。まだドルスにいたころ、メイリアは連邦から流れ込んできた3DTVの番組がけっこう好きで、よく兄に小言を言われた。

とは言え、彼女も無責任な視聴者でいられる立場ではない。

「あ、やだっ！」

乱暴に腕を引っ張られ、メイリアは我に返った。

コリーンが“出会え”と叫ぶまでもなく、彼女の部下たちも駆けつけてきている。電磁サーベルと高周波ブレード、小型のトマホークや戦闘ナイフが打ち合う、激しい喧噪が室内を満たしている。トリグラフ伯も、メイリアを庇っていられるほどの余裕はないようだった。

抵抗しようにも身体が言うことをきかない。引きずられ、ついに抱え上げられる。

「離して、離してったら！」

「やらせるか！」

トリグラフ伯の叫びとメイリアの悲鳴が重なった。斬られた脚がフロアに転がり、同時にメイリアの視界がぐんつと下がる。

「きゃあっ！」

放り出された弾みで辛うじて立ち上がる。

「待て、行くな、メイリア！」

コリーンが伸ばしてきた手を、メイリアは振り払う。

コリーンが一瞬バランスを崩したのを狙って、後ろから高周波ブレードが振り下ろされる。

「邪魔するなっ！ 変態息子のとりまきどもがっ」

甲高い金属音。

切断されたブレードが天井に突き刺さる。

「いやっ！こんなところ、わたしのいるところじゃないもんっ！」

膝が笑いまくって走るところではない。それでも半ば這うように、メイリアは破られたドアの方へ移動する。

「待て、待てと言っのが聞こえぬか！」

何が起ったのか、一瞬分からなかった。

収まりかけていた白い埃よりもさらに濃密な白濁した霧が室内に流れ込んできた。

一息吸いかけ、メイリアははたと息を止める。一息だけで、頭の芯が痺れ視界が霞む。息を止め、小柄な身体をころろと転がして部屋から転げでる。

しかし、逃げ切ることはできなかった。

「見つけた」

「……！」

その顔はマスクで覆われていたが、誰かは直ぐに分かった。マスク越しにさえ、血の色に染まってつり上がった目が、一二歳のメイリアにも理解できるほどあからさまに、既に常軌を逸した領域に入り込んでいる、この人物の内面を曝している。

逃げようにも、二人の屈強の男に両腕を捕らえられては、一二歳の少女に抵抗できるはずもなかった。

麻痺性のガスが、激しかったが短い白兵戦に幕を下ろしたようだった。間もなく、室内で立っている者はほとんどが侵入者だけになった。華麗な舞を舞う電磁サーベルに少なくとも五人の血を吸わせたトリグラフ伯、コリン・ミライユも、ただ一人で一〇本を超える高周波ブレードに、窓際に追いつめられている。

「いい様だな、伯」

「……トルガワの……変態息子が……ひとなみに人間の言葉など使っでないわ！」

「わたしにむかってそう言う口をきいたことを直ぐに後悔させて上げる」

舌なめずりする口調だった。

「最も下賤の者たちのおもちゃにさせたあと、その小癪な口を耳に届くくらいまで切り裂いて、髪の毛ごと顔の皮膚をむしり取ってやる。そうなるから助けてくれと哀願しても遅いですよ、伯」

「……誰が……貴様のような男にいいようにされるものか……恥を知れ。少なくとも……自分が子爵の名に値すると……本気で思っているのなら」

「今、その口を切り裂いて上げよう」

貸せ、と差し出した手に、部下がブレードを握らせる。

「子爵、危険です」

コリンの手にはまだ電磁ブレードが危険すぎる煌めきを放ち続けている。

白兵戦でのカルフォルミオ子爵の腕は、トリグラフ伯の足許にも寄れない。高周波ブレードをあぶなかく握った姿に、部下が声をかける。

「お下がりで下さい、子爵」

「部下に案じてもらうとは……情けないことだな、トルガワの変態息子」顔を仰け反らせるようにしてコリンが嘲笑を放つ。いささか過ぎるほど険のある美貌だけに、嘲笑の矢は見事にカールの自尊心の中央に突き立ったようだった。

「あの女を押さえておけ！」

「……しかし……」

「あの女を押さえておけ。何をしている、私の言うことが聞けないの

か！」

冗談ではなかった。

倍以上の敵と戦い、麻痺ガスで手足の自由を多少奪われているとは言え、トリグラフ伯は一对一で白兵を挑むには危険すぎる。

必死になって主人の命令と、自らの生命の保障を両立させる方法を探め、カルフォルミオ子爵の部下たちはようやく一つの解決策を見いだした。

「銃だ、銃を使え。足を撃てば動けないぞ」

あわただしくホルスターが探られ、次々にレイ・ガンが引き抜かれるが、それだけのタイム・ラグで十分だった。

「悪いが、卿の悪趣味につき合う意思はない、カルフォルミオ変態子爵」
電磁サーベルが唸る。

強化ガラス製の窓が丸く切り破られるまで一瞬を要さなかっただろう。
「……！」

事態を悟って男たちがレイ・ガンを構え直したときには、トリグラフ伯の優美な肢体は窓をぐぐり抜け、数メートル下の中庭へと舞い降りて行くところだった。

ふわりと着地し、見下ろす視線に向かって小粋な敬礼をして見せる。あわてて構え直されるレイ・ガンの銃口が定まる前に、その姿は視界から消えていた。

「……逃げられました！」

「そんなことは分かっている。追え！」

「は？」

「追え。あの女を活かして私の前に連れてこい。いいな、絶対に殺すな！
今、殺されていた方が千倍も幸せだったと、あの女に思わせてやる！絶対に殺すな」

「は……」

「行け、今直ぐにだ、行けえっ！」

甲高い絶叫は完全に音程を踏み外していた。

恐慌に駆られたように、一〇人近い男たちが駆け出していき、室内にはカルフォルミオ子爵カールと、メイリア、そして彼女の腕を押さえつけている二人だけが残る。

「手間を取らせてくれたね、プリンセス・メイリア」

「……」

「スルフェイク侯爵は、女王陛下からの打診に“回答を留保させていた
だきたい”と応えたそうだ。この意味が分かるかい、メイリア？」

「……」

「仮にもトルガワ公爵家からの申し入れに“留保”などという回答があるものか。一二では早すぎる……などというのも野暮だ。一二なら一二なりによさがあるというものだ。実質と形式が逆になる例だって少なくはないはずだからね、メイリア」

カールは、もはや育ちのいい大貴族の子弟という仮面をかぶり続ける意思を放棄していた。つり上がり、毛細血管が破裂したように膨らんで血光を帯びた目が、はつきりとした獣欲を露わにしているのにメイリアは気づいて総毛立つ。

彼女の両腕を押さええている部下たちに、離してやれ、と合図する。腕を解放され、起きあがろうとするメイリアを、乱闘の後をとどめてぼろぼろの状態のソファに突き飛ばす。

「……何をなさるの！」

「この期に及んで、まだねんねのふりをするのは笑止だよ、メイリア。
こういう状態になって男と女がすることといえば、決まってるじゃないか」

身を起こそうとするメイリアを、カールは、今度は思い切り乱暴に突き飛ばす。小柄なメイリアでは、暴力に慣れた大貴族の不良息子の見境なしな腕力には抵抗しきれなかった。

クッションの限界を遥かに超える勢いでソファに叩きつけられて息を詰まらせ、しばらくは身動きもできなくなった少女を見下ろし、カールは端正な唇の両端を奇妙な形にねじ曲げる。

それが、彼らの主人が、逃亡を試みたカルフォルミオ州民を拷問する時に見せる微笑であることに気づいた二人の部下が、息を呑むようにして後じさる。

足音が、不意にカールにこの場に居残る第三者の存在を思い起こさせたようだった。

「おい、おまえたち」

「はっ！」

「見せ物じゃないんだ、おまえたちも、トリグラフの女狐を探しに行つてこい！」

「かしこまりました！」

無力な二二歳の少女の運命について同情すべき理由がないわけではなかったが、彼らとて彼ら自身と彼らの家族の運命を優先させなければならなかった。

逃げるように、二人の男たちは部屋から駆け出していくのにはもはや何の注意も払わず、カールはソファの上で碧い眸を睨っている少女に注意を向け直した。

その時、轟音が建物を押し包んだ。

「二階の真ん中あたり。多分、あの部屋……」

高感度ラジオを様々な方向に向けてみたあげくに、トゥリユーは判断を下す。

「二階の、右から五番目の部屋か」

「……指揮官！」

「何か？」

「その窓から人が！女性のようです！」

「二階からだ？」

素早く双眼鏡を目にやり、そして口笛を吹く形に唇をすぼめる。

「コンテス・オブ・トリグラフ……？」

つぶやいたらしかったが、聞いたのはトゥリユーだけ。トゥリユーが、つぶやきを言葉として理解する前に、部下の一人が叫びをかぶせてくる。「プリンセス・メイリアではありません。黒い髪の……多分、成人女性です……」続いて窓から銃口！

「直ちに突入。目標、二階、右から五番目の部屋！……少々、手荒くかつ手早くやるぞ」

「了解……」

「あ、あの指揮官さん。ぼくは……？」

「君はここだ。ライナーノート刑事、護衛方よろしく頼みます」

「引き受けよう」

腹に響く振動は、地下の電源ケーブルに仕掛けられた小型の地雷の作動音。六〇年以上も前に放棄された別荘。所有者であるはずのチエルノボルグ伯爵自身も、そんな場所に自身の財産があるなどとは思ってもないだろう。自家発電装置はあったとしても準備はされていない。

そして……

第二撃は建物の周りで派手に吹き上がる、砕けた岩塩を巻き込んだ土煙。火薬の量を抑え、それでいて上に向かっての爆風だけは「ど」がつ

くほどの派手やかさで吹き上がるように調整された、“特撮専用”の爆薬セツト。

トゥリユーはちょっと不安そうに左手親指の第一関節に前歯を当てる。視線は、土煙に隠れるように建物の中へ突入していく、指揮官^{コマンダー}以下五名の対テロ班隊員の背を追っていた。

「不安か、トゥリユー？」

「え……うん。ライナーノートさん……」

「うむ？」

「ぼくは何でここにいますか？」

「何でって？」

おかしいことを……と言い返しかけ、ライナーノートも気づく。彼やブライアンには理由がある。彼らはスルフェイク州民だった。

「私やブライアンは侯爵には借りがある。メイちゃんも侯爵の妹嫁だ。彼女が難儀にあつたのを目にしまった以上、彼女を救けないわけにはいかないな。これが、私やブライアンやマチアスがここまで飛び出してきた理由だ」

州民にとって歴代のスルフェイク侯爵は甘い存在ではなかった。税率も決して低いわけではなかった。才能と意欲に満ちた人間は連邦圏への留学を含めて、世に出る機会が与えられる一方、そうでない人々にとっては決して機会に満ちた世界でもない。

しかし、他の州では極く一部の例外を除いては、その機会を得ることすら夢でしかないのだ。そして、スルフェイク侯爵は公正であり、有能な政治家だった。政治家としての公正さと有能さが宝石よりも遥かに希少な存在であるメルティアでは、スルフェイク州に生まれるということ自体が大きすぎる幸運だったのだ。

「君にはあてはまらないな。何でだが、自分でも分からないのか？」

「そうしなきゃ……そう思ったただけなんです。変ですよ。一度も会ったことも、話したこともない女の子のために、こんな危ないことしてるなんて」

「……後悔してるのか？ だとしたら、ちょっとばかり君を見損なつてたようだな」

「え？」

綺麗な漆黒の目がライナーノートを正面から見据える。頬に薄い紅の色が透き通っているのは、砂漠の強烈な日差しだけによるものではなかった。

「本当のことというと、楽しいんです。何か、わくわくするっていうのか……ね、指揮官^{コマンダー}さんたちがうまく彼女を助け出してきたとして、やっぱり追つかけてくると思います？」

「そりゃ、追いかけてくるだろうな」

ライナーノートは、視線をエアカーの後部に巡らせる。
「準備しておくか。手伝ってくれ、トゥリユー」

盛大な騒音とともにガラスが叩き割られる。室内を一閃した視線が、ソファの上に組み敷かれながらも激しくあらがっている少女の水晶色の髪を認めるまでに一秒と要さなかった。

「何だ、おまえたちは！」

カールはソファから飛び離れ、高周波ブレードに手を伸ばそうとする。
「遅い！」

エルブレッドのレイ・ガンが狙点を定める方が遙かに速かった。そして、陶器の割れ砕ける派手な騒音とともにカールの手が空中で停止する方がさらに速かった。

「う……ぐお」

声も出ないほどの激痛にカールが頭を両手で覆つ前に、もう一度その頭の上で陶器が粉々に碎け散る。

「お勇ましいですね、プリンセス」

かなり手ひどく乱されたらしい作業服の胸元を直してから、手の中に残った陶器……磁器のかげらをフロアに捨て、メイリアは笑つ。

「アール恒星区の青磁だつたみたい。ちよつともったいなかったかな？」

スルフェイクの市民なら見慣れている屈託のない笑顔に、間に合ったか、とスルフェイク州兵対テロ班の指揮官は安堵のため息をつく。あの少年は正しかった。ほんの三〇分も行動を起こすのが遅れていたら……

「助けにきてくれたの？」

ロイヤル・ブルーの綺麗な目が、サン・グラスとバンダナ、ベレーですっかり覆われたエルブレッドを見上げ、そして、“あれ？”という表情を浮かべる。

「時間がありません。お急ぎを」

「どこ？」

「すぐ外です。車を待たせてあります」



第六章 逃走^{ラナウェイ}

最初に気づいたのはトゥリユーだった。

「来た！」

「来た？」

跳ね起き、トゥリユーが指し示すスクリーン、首を突っ込むようにのぞき込む。

強烈な日差しを弾いて、本物の水晶の系のように周囲に澄んだきらめきを舞い踊らせる。スルフエイク侯爵の妹姫の髪以外に、あれほど鮮やかな煌めきを放つ髪があるはずがない。

「確かに！」

スターターが悲鳴をあげる勢いでキーを回す。

甲高い唸りとともにエンジンが息を吹き返した。窓におろされていたシャッターが巻き上げられ、畳み込まれていた走行用ホイールが繰り出され、車高が上がる。

「追っ手は？」

「まだ……でもすぐだと思っ」

言い終わらない内に、建物の複数の窓から閃光が迸った。見間違いない。うもないレイ・ガンの射線は、まだ、エア・カーの存在は認識していない。

「ライナーノートさん！」

「よし来た！」

アクセルを踏み込み、同時にギアを後退にたたき込む。

異様な唸りとともにエア・カーはバックする。メイリアを背負い、レイ・ガンの射線を躲しながら必死に走ってきた指揮官^{「コマンダー」}が、エア・カーの後部バンパーに膝をつっこみそうになり、つんのめる。

まるでタイミングを計ったように、水晶体の髪の少女が指揮官^{「コマンダー」}の肩を跳び越すようにして、急停止したエア・カーの傍らに着地する。作業服姿でなければあられない格好になっただろうが、少女は巧みに身体を丸めて着地の衝撃を和らげる。羽毛を思わせる軽やかさでふわりと立ち上がった姿が、ドアを蹴り開けたトゥリユーの視線を釘付けにした。

「痛……」

立ち上がった少女は、しかし、苦痛の呻きを漏らしてよるめく。意図してではなかったにしても、思わず差し出したトゥリユーの腕の中にもろに倒れ込んできた。

「わわわ……」

勢いをつけて倒れ込んできた少女の身体は、不十分な体勢だったトゥリユーのバランスを崩すには十分。バックステップしてバランスを回復しようにも、後ろにはエア・カーの車体がある。結果としてトゥリユーは、少女を抱いたまま後部座席へ倒れ込む羽目に陥った。

「あ、ごめんない！」

これはメイリア。

「い、い、いや……大丈夫だよ……ええと、きみは？」

言い差し、トゥリユーは慌てる。本当なら、“殿下”とか“陛下”とか呼びかけなければならぬのではないのか……ええと、“殿下”だったっけ、それとも“陛下”？

「わたしはメイリア……」

言いかけ、メイリアは問われた意味を取り違えたことを悟った。改めてトゥリユーの美貌に気づき、目を瞠る。

頬を染め、メイリアは言い直す。私は大丈夫……と。

「あなたはどなたなの？」

まじまじと彼を見つめてくる濃^{「ロヤルブルー」}紺の瞳の前に、トゥリユーの心臓がステップをとばしたタップを踊る。

……なんて綺麗な目をしてるんだろ……

乾いた汗と、舞い上がった岩塩の細かな塵で粉を吹いたようになってる髪から顔にかけてを、トゥリユーはにわかに意識してつばを飲み込んだ。

「ええと……」

紹介します……割り込んできたのは、エルブレッドだった。

「連邦からの旅行者でミスター・トゥリユー・ネレイド。彼が居なかったら、あなたをこつも早く見つけたして救出することなど思いも寄りませんでした」

「救ってくださったのね、ミスター・ネレイド。ありがとう！」

メイリアはつと腕を伸ばし、しなやかな指先でトゥリユーの頬を引き寄せた。

「？」

頬に無邪気な感謝のキスをされて、トゥリユーはすでに日に焼けて赤くなっていた頬を、耳たぶまで真っ赤に染め上げた。焦って少女の肩に手をかけ、座席に座らせる。

「え、ええと、その……だから、ええと」

なんて芸のない……トゥリユーは自分で自分に呆れ返る。こういう場面であれば、もう少し口のききようもあるだろうに……とは思っものの、綺麗な湖のようなメイリアの碧眼を前にしては、彼の舌は器用というにはほど遠い。

「挨拶は後だ、指揮官^{「コマンダー」}。ドライバーを替わってくれ！」

見かねたか、ライナーノートが割り込んだ。

「了解」

隊員の一人が運転席に飛び込む。ライナーノートが後部座席に転げ込むと同時に、エア・カーは派手に土煙を巻き上げながら発進した。

装甲エア・カーの座席は前後三列。真ん中にトゥリユーとメイリア、それに隊員一名。前に隊員二名、後部座席には隊員二名とライナーノート。後部座席の三人は、すでにレイ・ガンを抜いている。

「来るかな？」

これはライナーノート。

エルブレッドが応じた。

「来る」

「逃げ切れるかな？」

「向こうも車輪走行なら」

「こんなところにアジトを作るんだから、向こうの方が準備はできてるよね」

これはトゥリユー。頬の赤さはまだ引いていなかったが、口調は冷静さを取り戻している。

「どれくらいの距離だったら、レイ・ガンで撃たれてもOK？」

「そつだな……」

レイ・ガンのエネルギー・カプセルを改めながら、エルブレッドは、端正だが頑丈そうな顎をなでた。

「一五ヤード（一ハメートル強）つてところだな。連中の持つてるのも、このくらいの豆鉄砲だと仮定してだが、それ以内になるか、それとも連中がもつとでかい大砲を持ち出してくれば、これも保証の限りじゃない」

何か、アイデアがあるなら提案してみないか？

エルブレッドの口調は明らかに期待を含ませたものだったし、トゥ

リユーにしてみれば、エルブレッドの期待以上に、不安げな視線を彼に据えたままのお姫さまの期待を裏切るつもりはさらになかったのだ。

「ええ、うまく行くといいんだけど……」

「お前も、おまえも、貴様も、後でたつぷりと鞭をくれてやる」

チエルノボルグ伯爵の旧別荘の一室では、人の形をした活火山が荒れ狂っている。

「逃がした、逃がしました、逃げられました、だと。お前たち、いったい、何代前からトルガワ公爵家に仕えている？公爵家はそんないいわけを許すほど寛容ではなかったぞ。少なくとも、お前たちの先祖は、そんないいわけで自分たちの無能さを取り繕わねばならないほど、愚かではなかったのだ！」

カルフォルミオ子爵カールは、手近で平伏していた部下の一人の顎を蹴り飛ばし、手にした鞭でもう一人を力任せに殴り飛ばす。折れた前歯と、鼻血をまき散らしながらフロアを転げ回る彼らにはもはや目もくれずに怒号する。

メイリアに青磁の壺でたたかに殴られた頭はまだ激しく痛んでいる。一撃でも十分だったものを、メイリアは念入りに二つの壺を破片に変えた。痛みが、何代にもわたって特権をほしいままにしてきた大貴族の子弟特有の歪みきつた自尊心を手ひどいまでに傷つけ、怒りを迸らせるのだ。

「追え！すぐに追え！スルフェイクの小娘は絶対に殺すな。殺さずに私の前に連れてこい。一〇年かけて、生まれてきたことを後悔させてやる。どつか殺してくれと、私の前にひざまずいて哀願させてやる」

「あ、あの子爵……」

トリグラフ伯爵夫人を追え、という命令もまだ生きている。元々多くは連れてきていない子爵の部下の半数が、伯爵夫人コリン・ミライユを追うために館を出てしまっているのだ。彼らを呼び戻し、メイリアの追跡にあたらさなければ人数が足りなさすぎる。

「馬鹿者！」

忠告は足蹴と、引き続き殴打によって報われた。

「そんなことをわざわざ私に許可を求めずとも、さっさと呼び戻さぬか！ 私がいなければ、お前たちは何もできないのか。この屑ども！」

何を言っている……声にならない反発が、部下たちの間から立ち上ったことに、カルフォルミオ子爵カールはついに気づかない。メルティアの大貴族の例に漏れず、カールもまた部下にかけらほどの独断も専行も許さない。

声にならぬ反発は、翻訳すればこういう内容だっただろう。

……何を言っているやがる。このドラ息子^{ドラ息子}が。もともとは二二やそこらの女の子に目を付けた、あんたの変態^{変態}ぶりが原因だろうが。

反発はともかく、一〇人以上が乗り込んだ三台のエア・カーが地下から引き出された時、メイリアを乗せた装甲エア・カーはまだ一キロと離れていなかったのだから、彼らもいたずらに時を浪費していたわけではない。

部下たちが密かに驚いたことには、カール自身も最後の一台に自ら乗り込んで追跡に加わったことだった。

「電源を切られちゃったんだ。暑くて、居残ってる気にはならなかっただろうよ」

もっとも、すでに主人に対する敬意を失っていた部下の一人は、そう吐き捨てていたし、

「来たってじゃまなだけだ。総司令官気取りで後ろに控えてりゃ、それ

でよかったものを……」

と毒づいた者も少なくなかった。それらが声となって、実際に空気を振動させるということにはなかったにしても。

エア・カーはまだ三台あり、トリグラフ伯爵夫人を追跡に出た者たちの帰りを待つて、ありったけの人間を動員して追跡してはどうか、という意見を持った者もあるにはあった。彼らは、彼らの考えの正しさを知っていたが、考えを口にするこの誤りにも気づいていたから、あえて彼らの主人に異を唱える愚も犯そうとはしなかった。

「来た！」

電子双眼鏡を目に押し当てていたトゥリユーが小さく叫ぶ。

「車輪走行してない。浮揚走行してる。多分一五〇キロは出してるよ！」

「……比べてこっちは六〇キロがいいところか……」

干上がった塩湖とはいえ、起伏は少なくない。高さ数ヤードにまで盛り上がった岩塩の塔が林立し、差し渡し一ヤードから三ヤードくらいの、これも岩塩の固まりが転がっているのも珍しくない。車輪走行のエア・カーは岩塩の柱や塩塊を縫うように走る。スピードは上がらない。

ふつとトゥリユーは呟いた。

「どれくらいの塩があるのかな？」

「ざっと二〇億から三〇億トンってところだな」

のんきだな、と言いたそうなのはライナーノート。綺麗に整えたブラウンの口ひげも、塩がこびりついてごま塩状態。さすがに表情が少しひきつっている。

「採掘して原材料にすればいいもんだが……そういう事業に努力するよりも、州民から税金を絞り上げた方が楽だっていうのが、この辺のお貴

族様のお考えだ。その辺、トリグラフ伯爵あたりは偉いものだ」

「トリグラフ伯爵？」

「……？」

メイリアの華奢な身体に走った微かなふるえに気づいたのはトゥリユーだけだった。

「プリンセス・メイリア？」

「……」

不審げな視線を向けたトゥリユーに、メイリアはちよつとうるたえて目をそらす。

トリグラフ伯爵夫人コリン・ミライユ……だったっけか？

“メルティア現代史”は余り面白い講義ではなかったけれど、メルティアを訪れる連邦市民にとっては必須科目だった。

スルフエイク侯爵領に隣接するトリグラフ州の領主。数代続いた無能な当主を嗣いだ現当主のトリグラフ伯ミライユは、現在のメルティアでも有能な統治者として知られる。ミライユ湖として知られる人工湖を始めとする大規模な灌漑事業に成功、破産寸前だったトリグラフ州の再建を果たした美貌の女伯爵

“光栄ね、妾の名も連邦にまで知られているのか？”

当の本人が聞けば、苦笑してそう感想を口にしたかも知れない。

極めて有能で勤勉な独裁者としてトリグラフ州に君臨する一方、外交の席に連なる際には、連邦にとっては手強い交渉相手となる。ただし、コリンが携わった連邦との外交交渉の一覧は、トゥリユーにとっては記憶の外。

「トリグラフ伯のこと、知ってるの？」

尋ねかけ、愚問だなと思って止めた。メルティアの姫君。有名な女伯爵を知らないはずはない。

……でも、なんで震えたのかな？

メイリアがちよつと眉を曇らせたのは、トゥリユーの表情を敏感に読み取ったからかもしれない。

「あの……」

「……来たっ！」

メイリアの言葉にライナーノートの怒声が被さった。

「追ってきた！二台だっ！」

「……浮揚走行してます。車輪走行じゃない。多分、一〇〇は優に出している！」

「距離っ」

これはエルブレット。

「まだ一キロはあります。どんどん詰まります！」

「こっちは車輪走行で、精々四〇キロだ。一分もたんな」

「指揮官さんっ！」

トゥリユーが怒鳴り、窓外を指さす。

「あそこか？」

白い壁……に見えたのは、林立する塩の柱。底部の直径が二メートル、高さが四メートル以上もある、巨大な岩塩の柱が、数メートルの感覚で数百本、千本、林立する。

その中へ突っ込めと言つトゥリユーに、ライナーノートは勿論、エルブレットの表情もひきつっている。

「浮揚走行なら、上から撃たれるぞ」

「どっちでもいいんです。こんなところじゃ、散開されて挟み撃ちされたら一たまりもないじゃないですか」

「しかし、万が一……」

「あの中に逃げ込んだ方が逃げられるかも知れないの？」

「うん……じゃない、そつです……ええと、殿下」

“陛下”じゃない、“殿下”だった。

メイリアは、濃紺の目をぶうつと細める。気に入らない大きな犬を見つけた仔猫を、なぜかトゥリユーは……不謹慎にも！……思い浮かべてしまつ。

「メイでいい。面倒だもの……」

「……」

「あの中に逃げ込んだ方が逃げられるかも知れないの？」

トゥリユーは頷く。「殿下」などと普段使わない言葉を使って舌を噛みそつになるのも、このお姫さまを“メイ”と呼び捨てにするのも、彼の好みにはあわなさそつだった。

といって、では何と呼びたいのか、と言われても困る。メイリアとまっすぐに視線に合わせるのが妙に眩い気がして、何とも居心地が悪い。そのくせ、その場から直ぐに立ち去れる機会に……あつたとしても……、手を伸ばすつもりにはまったくなれもしない。

「じゃ、行きましようよ。決めたの」

メイリアは微笑つ。

「こんな所は嫌い。だから絶対に帰る。みんなもそつでしょ？」

車輪走行中のエア・カーが、半ば倒れそつなほどに右へ傾く。その右側面を、レイ・ガンの射線が薙ぎ払つた。まだ、有効打にはならない。威嚇だが、エア・カーの装甲に弾かれて派手に火花を跳ね上げ、地面を撃つた射線は膨れ上がる半球形の光の塊となつて周囲に弾き飛ぶ。

「つかまれつ、突つ込むぞ」

全重量をかけた車輪が異音を立てる。

フロント・ウィンドウ一杯に塩の柱が膨れ上がり、コマ落としのフィロムのように強引に左へと流れ去る。

ほつとする間もなく、次の塩の柱。左右に揺れながら急激に大きくなつた半透明の円柱は、トゥリユーがぶつかると目を閉じた途端に、再びフロント・ウィンドウの左隅へ流れ消える。

「来たか？」

「来た！」

追手……カルフォルミオ子爵の部下たちであることを知っているのは、まだメイリア一人……追手のエア・カーは二台。無謀にも、高度を取らないままに塩の柱の間に突つ込んでくる。

「上がるぞつ」

危険を悟つて高度を取ろうとする。下方噴射をかけた追手のエア・カーがノーズを上向かせた。

「スピード、落としてつ！」

トゥリユーが叫ぶ。

「了解」

ブレーキングとギア・ダウン。一気にスピードが落ち、距離が詰まり、一〇ヤードを切る。

気づいたらしい追手のエア・カーの窓が開き、てんでにレイ・ガンの銃身が突き出される。

その瞬間……

「……！」

後方の視界が真っ白になった。

正確には、装甲エア・カーの後部噴射口のあたりから爆発的に白い煙が吹き上がり、追手のエア・カーを真っ正面から覆い尽くしたのだ。

煙幕だ、突つ切れ、と叫んだのはカルフォルミオ子爵ではなかったやうだった。あるいは、相手がエンジン・トラブルを起こしたとでも誤解したのかも知れない。

しかし、歓声を上げて白煙の中に突っ込んだ途端、それは起こった。白煙に突っ込んだ瞬間、エア・カーを駆動するターボ・ファンエンジンの後方噴射口から異様な炎が迸った。同時に、何とも言えない奇妙な匂いが周囲を覆い包み、そして次の瞬間、エア・カーの運転席に驚愕の聲が反響する。

「エンジンが止まったぞ、再始動できない!」

「車輪走行だ、車輪走行に切り替える」

「だめだ、間に合わない。落ちる、落ちるぞ!」

いきなりエンジンが止まり、下方・後方の双方への噴射が同時に止まった。丁度、上昇しようとしてノーズを上げたところだったからひとたまりもなかった。

失速、そして墜落。

高度は約三ヤード。しかし、一〇〇キロ近い速度が致命傷だった。

耳が震えるような、金属的な叫喚。金属が砕け散り、燃料に誘爆するくぐもった爆音。そして、誘爆した燃料が周囲の塩の柱を巻き込んでオレンジ色の炎と、どす黒い爆煙を吹き上げる轟音が重なった。

「……助かったかな?」

「ちよつと難しいな、あのスピードじゃ。ま、レイ・ガンで撃つてきたのは向こうだし、正当防衛を適用させてもらおう。しかし、まあ……ホットケーキ・ミックスと粉砂糖で……」

え? という眸になったのはメイリア。

「ホットケーキ・ミックス?」

「ホットケーキ・ミックスと粉砂糖をよく混ぜたのを、この車の後方噴射でばらまいたんですよ、プリンセス」

ライナーノートは言う。

「フィルターをかけていたから、乾塩湖でも浮揚走行ができたのですよ」

うが、そのフィルターにしたところが塩の粒を防ぐ程度の粗さだったはずです」

「小麦粉と砂糖のパウダーをばらまかれるとは思っていなかったでしょうからな」

エルブレットが言葉を引き継いだ。

「ターボ・ファンが炭水化物の微粒子を吸い込んだらどうなることやら……」

高温で高速回転するターボ・ファンに付着すれば、たちまち焼き過ぎて煙を上げるホットケーキの残骸となってエンジンを停止に追い込んでしまふ。多量に混ぜられた砂糖は、数百度の高温下では飴状に融け、あつと言つ間にファンを目詰まりさせてしまっただろう。

「彼のアイデアですよ。まさか、本当にホットケーキ・ミックスでこんな芸当ができるとは……」

「……凄いのね! 連邦の人つて、みんなこんなことができるの?」

無邪気な賞賛の視線で見つめられ、トゥリユーは頬の熱さを意識する。

「……母が、よくホットケーキを焦がしていたんです」

話を脱線させ、トゥリユーは困惑する。

それが、本当に彼の“母”に関する記憶だったかどうか、甚だ曖昧だったから。

レーフラムには、六歳までしか一緒に過ごさなかった実の母に関する記憶は乏しい。しかし、“母”という単語に対して、彼が漠然と思ひ浮かべる淡い煉瓦色と深い緑の交錯する光景は、おそらくは実の母リーザ・ローレンスとともに過ごしていた頃の風景に違いなかった。継母であり、弟レーフル・ファウルスの母であるスティシー・フランセスを母として認識する心理はひどく希薄だった。

その中で、ホットケーキのパンから上がる焦げ茶色の煙と、ホットケー

キになるはずだった黒い塊を前にした“母”の表情だけが妙に鮮明だった。ただ、それが実の母だったのか、継母だったのか……当のトゥリユーにも判然としない。あるいは、どちらでもなかったのかも知れないが。

実の母同様に、ステイシー・フランセスと父との婚姻が強いられたものだと知ったのは一〇歳を過ぎた頃。継母への多少の同情は湧いたものの、それで継母や、まして父との間がいくらかでも接近するものでもない。

ふと気づき、脈絡もなければとめどもない、彼の話に聞き入っているメイリアの真剣な表情を見おろす。

「こんな話、面白い？」

メイリアは応える。外のことを知らないから。

銀河系中心から渦を描いて外宇宙へ伸びる星の密集領域に沿って、幅約三〇〇光年、奥行き六〇〇光年が連邦圏。シエルメスやメルティアを含む銀河系宇宙の直径は約一〇万光年。銀河系中心や、周囲の球状星団、銀河系に随伴するように数万光年の距離を隔てる伴銀河にまで探査船を出しているとは言え、連邦圏は巨大な銀河の一部を制覇したに過ぎないのだ。

でも……と、トゥリユーは言う。連邦の前に、銀河系の端から端までを支配した種族がいたに違いないのだ。彼らは銀河を制覇し尽くし、銀河系からも躍り出して他の銀河……マゼラン雲や、果てはアンドロメダへフロンティアを押し進めていくとしていたのではないだろうか？そして、壮大な夢を抱いたまま、彼らは……おそらくは……互いを滅ぼし合う戦争の中で、シエルメスだけを残して歴史の闇の中に消えていった。ちょっと熟っぽい調子のトゥリユーに、何か記憶を刺激されたいらしい。メイリアは右手を額に当てながら呟き始める。

「古の世、星々は真紅の華以て消し去られたり。神の怒りの雷の白き虹、天を刺し貫きて炎と変じ、炎散じて空を血の色に染めたり。天空よりの光の箭、降り注ぎて地の営みを薙ぎ払いき。」……」

最初、話に退屈して居眠りを始め、寝言でも呟いているのかと思つてちよつと気を悪くしたトゥリユーだったが、え、と目を瞠るのは、今度は彼の番だった。

メイリアが呟いているのは、古メルティア語

連邦共通語は、例外の少ない、その分やや潤いのない人工語の匂いをまつわらせている。古メルティア語は文法例外と、単語の不規則変化の大集団で、一〇人の内八人までは習得を諦める。

トゥリユー自身、古メルティア語は読めるが、発音は余りできない。

メイリアがすらすらと口にした一節は、大学のＬ（ランゲージ・ラボ）のライブラリに入っていた、一〇〇〇年以上前のメルティア人たちの発音を思わせた滑らかだった。

そして、その内容……

「今の、なに？」

「分かるの？」

「え？」

「古いおまじない。侯爵家の人間なら、みんな少しは知ってるわ」

「続きはあるの？」

「えっとね……ちよつと待つて」

せき込むトゥリユーに、メイリアは小首を傾げる。一生懸命に思い出そうとして、銀色の眉をきゅつと寄せて考え込む。

「ええと、たしか……」禍々しきは天を裂く神の槍、禍なるかな、遥かなるテラよ……」これくらいしか覚えてない」

「まだ、先があるの？」

「うん」

多分、兄のラルクならすべてを諳じているだろう。はつきりとは知らないが、メルティアの建国神話は、代々のスルフエイク侯爵家当主の研究テーマの一つだったから。メイリアの言葉は、トゥリユーの心臓を激しく弾ませた。

「ね、侯爵にもお会いできるかな？」

「会えるわ。お兄さまにもお礼を言ってもらってから……どうしたの、ミスター・ネレイド、凄く興奮してるみたいだけど？」

「うん、凄い、凄いや。メルティアの建国神話なんて、もうほとんど全部失われちゃって、残ってるのは全体の二〇分の一もあるかどうかだって言われてたんだった！」

思わず、メイリアの手を取って踊り上がりかかるのを、慌ててライナーノートが止める。

装甲エア・カーは漸く塩湖のエリアを抜け、チエルノボルグ州都^{コム}へ向かうルートに入りかけている。依然、周囲は砂漠。太陽と風の浸食に委ねられ、むき出しになった固い地層が波打ちながら地平線まで続いていた。

「トゥリユー、場所を考えてほしいね。ルーフに頭をぶつけて首を折ったりしたら、せつかくのきみの研究も埋もれてしまうぞ。それにだ……」

「……？」

「許可も得ずに、プリンセス・メイリアの手を握ったりしたことをスルフエイクの州民に知られたら、きみはメルティアから出られなくなるぞ」

「え？あ、す、済みません……」

トゥリユーはびくりしてメイリアの手を離れた。

「それって不敬罪、とか？」

「ちがっさ」

どきまぎしているトゥリユーと、悪戯っぽい目をくるくるさせているメイリアを交互に見比べながら、人の悪い微笑を浮かべたのはエルブレッドだった。

「ライナーノート氏の言いたいのは、我々がマーシャネス・メイリアの恋人を、連邦なんて言う危ないところに帰してたまるものかということだな」

「……………」

「ライナーノート刑事、それに、指揮官^{コマンダー}！」

凜と声を張ったのはメイリアだった。

「その言い方は、ミスター・ネレイドに失礼です」

「これは……失礼いたしました」

「以後、気をつけるでありますよ、プリンセス」

無骨な軍人らしからぬ優雅さで礼を返すエルブレッドに、トゥリユーとライナーノートは啞然とし、メイリアはくすくすと微笑つ。

装甲エア・カーは、多分五〇ヤード近い高さの懸崖の麓にさしかかっていた。

最初に気づいて叫んだのは、エルブレッドだった。

「上だ！浮揚走行に切り替える！」

「だめです、この埃じゃエア・インテークが」

「え、なに？」

びくりしている暇もなかった。

突き上げるような衝撃が連鎖してトゥリユーたちの足下をすくつ。

「集中豪雨^{スコール}？」

「砂漠の真ん中だぞー！」

「つかまっている！しゃべるな、舌を嚙む！」

窓際の隊員がウインドウを下ろし、レイ・ガンを空に向かって乱射し

始める。

はっとして巡らした視線の先に、かなりの高度をとってぴたりとつきしたがっている大型のエア・カーがあった。ばらばらと投げ落とされた黒いボールのようなものが、地面にバウンドするなり腹に響くような音を立て土砂を巻き上げ、周囲をもつたる土煙に包み込む。

「冗談じゃないぞ、手投げ弾だ。チエルノボルグ伯爵家の領地で爆弾騒ぎを起こして無事だとも思ってるのか？」

「エア・カーを止めて！」

「プリンセス！」

「カルフォルミオ子爵よ、あれはきつと」

とかく小賢い噂を幾重にもまとわりつかせた、メルティア最大の権力者の後継者の名が、ライナーノートを凍り付け、エルブレットを舌打ちさせる。

「カルフォルミオ子爵？」

「私に逃げられて怒り狂ってる」

ボタンを何個か引き千切られた痕も露な作業服の胸元を示して見せて、メイリアはそれ以上は説明不要でしょう、という表情で一同を見返す。

「あの……たわけの子爵が」

「だからエア・カーを止めて」

「しかし！」

「止めた方がいいよ、指揮官さん」

「トゥリユー、きみまでそう言つのか？」

「こっちはレイ・ガンしかなく……」

爆風。ホイールが一瞬グリップを失って横滑りする。

「……って、あいつらは爆弾を持ってるんだ。あいつらは、彼女を今は殺すつもりはないはずだよ。でも、止まらずに逃げてたら、爆弾を叩き

つけられるかも知れない！」

「……」

「それから……」

可能な限りの早口は、トゥリユーの国語能力の限界を試すものだった。
「ぼくを……」

指さし、トゥリユーはエルブレットたちの驚きを無視した。

「あそこで捨てて、あなた達は、あの下で車を止めて、止めると同時にとにかく逃げるんだ。車を止めたなら直ぐに逃げて」

「馬鹿を言うな、プリンセスを見捨てて……」

「でないと、その場で殺される。彼女を人質に取られたら、それまでじやないかつ。殺されたら終わりだよ。ライナーノートさんも」

「おい、きみだけに危険を冒させるわけには……」

トゥリユーは激しく首を振る。ライナーノートも訓練を受けた警察官。彼と一緒に逃げるのを目にすれば、カルフォルミオ子爵はともかく部下たちは警戒する。子供が一人、途中で逃げたくらいなら、彼らはさして注意も払うまい。

エルブレットとライナーノートは顔を見合わせ、そして蒼白な表情で同時に頷いた。

「了解……プリンセス・メイリア！」

「はいっ！」

また“至近弾”激しく揺れる。必死に手すりに掴まっているメイリアが顔を上げる。

「トゥリユーの提案に従うが、われわれはプリンセスを見捨てて逃げ出した薄情者の役割を担うことになる。よろしいか？」

「ええ……」

「大丈夫。直ぐに救けるよ……ええと、プリンセス……」

「メイ」

真つ正面から見据えてくる、深い海の色の目にトゥリユーは息を呑んだ。

「う……っん。じゃ、メイ」

躊躇いながらトゥリユーが差し出した手を、メイリアは握りしめた。
「信じてる」

「目標のエア・カー、停止しました……逃げ出していきます、一人、二人、……六人を確認！全員、成年男性ばかりです」

「ほつ、姫君よりも自分たちの生命の方が大事と見える。結構な忠誠心と言つべきだな」

露骨な嘲笑に顔を歪める子爵をしり目に、部下たちは安堵の息をついている。部下たちのほとんどは、トゥリユー・ネレイドのホットケーキ・ミックスでクラッシュした二台のエア・カーに分乗していた。カルフォルミオ子爵の豪華な大型エア・カーに同乗していたのは三人に過ぎない。五人の対テロ部隊員を相手に回せるほど、彼らは暴力沙汰には馴れてはいなかったのだから。

「車を降ろします」

「お前たちは、周囲を警戒しろ。プリンセスは、私が迎えに行く」

子爵は嗤い、座席に隣接してしつらえられたグローブ・ボックスを開く。ボックスから子爵が取り出したものを、部下たちは視界に入れないように目をそらした。カール・レン・ビューローの右手が掴みしめていたものは、明らかに長い間使い込まれていたこと分かる電磁鞭のグリップだった。

お前たちは周囲を警戒している……部下に命じ、放置された装甲工

ア・カーのドアをぐいと引き開ける。

とたんに飛来した石を、さすがにカールは電磁鞭を巧みに操つて弾き飛ばす。

「無駄な抵抗はよせなどとは言わないよ。しかし、聞き分けのない子は、女の子だとしてもしつけを受けなければいけない。天然自然のままに美しいものはない。人の手で注意深く彫琢されてこそ、鑑賞に堪え得る美が形作られていくというものなのだから」

「寄らないで！」

反対側のドアに背をすり付けるようにして、メイリアがカールを睨み据える。双眸が浮かべた濃い碧い炎は、恐怖よりも嫌悪と怒りの光で侵入者を迎えた。

「ほほつ……これは、これは」

「そばへよらないでと言っているのが、きこえないの？カルフォルミオ子爵、あなたなんか、大嫌いよ！」

「人というのは分からねものだ、メイリア」

舌なめずりをする毒蛇の口調だった。

「まだ一二年ばかりしか生きていないきみに、人生の真の楽しみのおすべりが分かるはずはない。私のもとにあれば、貴族であればこそ味わえる様々な喜びを人生に見いだすことが叶うだろう。新たな自分を見いだすための僅かな苦痛を、そう嫌うものではない」

「……」

電磁鞭を構え直すカールに、メイリアはさすがに青ざめる。電磁鞭の打撃は、一二歳の女の子の精神的・肉体的な耐久力の限界をはるかに超えている。スタン・プレスレットの電撃など、電磁鞭の一撃に比べれば針の先でつつかれたほどでさえない……メイリアはそう聞いている。

「おとなしく私の前に跪き、私の言うなりになると誓えば、二、三度、

優しく撫でる程度でやめにしておいてやるっ……しかし、あくまで私を嫌うなら」

カルフォルミオ子爵の声が、血を啜る肉食獣の鳴らす満足の唸りに似て、メイリアの背を逆撫でる。嗜虐に馴れた貴族にとつて、可憐な少女の恐怖はこの上なく甘味な刺激らしかった。

「それもまた一興ではあるな。子供でも誇り高いスルフエイク侯爵家の姫君だ。簡単に屈服して、私の興を削がないでくれるとありがたいな。誇り高ければ誇り高いほど、跪かせたときの喜びもいや増すというものだ」

恐怖を煽るためだろう。電磁鞭を構え直すカールの動きは、必要以上にゆっくりとしたものだったが、メイリアは真つ正面から大きな目を相手に据え、打撃から身をかはおうとはしない。

「恐れぬか、この小娘！」

大きく降りかぶり、電磁鞭を振り下ろしかけたカルフォルミオ子爵の聴覚を、妙に間の抜けた小さな爆発音が拍った。

「……？」

数瞬後、子爵の大型エア・カーの上でざあっという大粒の雨が降り注ぐような、しかし、比べものにならないほどの大きな音が巻き起こる。後部のエンジン・カバー、そして運転席と座席のルーフが弾け上がり、黒っぽい塵が周囲に巻き上がったのが、振り返ったカールの視界に大写しになった。

「な……」

多分、数百個の鋼球。車を止めた懸崖の上から降り注ぎ、豪華な大型エア・カーを一瞬にして孔だらけにした犯人の正体を悟って、カールはがけの上を降り仰ぐ。

その視界一杯に大きな白い塊が落下してくるのが映り込む。

「おのれ！」

青白い光の帯を引いて、カールの手元から電磁鞭が唸りを上げる。がけの上から投げ降ろされ、彼の頭部を直撃しかけていた白い塊を寸前で真つ二つに叩ききる。

二つに割れた塊……二台のエア・カーをクラッシュさせたホットケーキ・ミックスを詰め込んだ紙袋であることは明らかだった……は、落下した勢いと、電磁鞭の与えた衝撃で小麦粉と粉砂糖の白煙でカールの全身を包み込んだ。
「ぐわああっ！」

瞬間……恐ろしい悲鳴が、絶叫の形に開いたカールの口から迸った。引火したのは電磁鞭の発する高電圧のスパーク。カールを炎に包んだのは小規模な粉塵爆発だった。

程良く空気と混じりあつた炭素系の微粒子は、火薬庫一杯の高性能爆薬並の引火性と爆発力を持つ。白い煙となって飛び散った炭水化物の粉塵は、火薬に似た効果を發揮して一気に貴族の青年の全身をオレンジ色の炎で包み込んだのだ。

「子爵！」

「み、み、水だ、水……」

「水……水なんて、ああ」

エア・カーを貫いた鋼球の落下音、爆発するように吹き上がったオレンジ色の炎と、主の断末魔の悲鳴に驚いた部下たちが駆けつけたとき、レイ・ガンの安全装置を解除する金属音が彼らの足を地面に縫い止めた。
「動くな！」

「な……」

逃げ散つた筈のスルフエイク州兵たちを前に、カルフォルミオ子爵の側近たちの声が悲鳴に近くなる。

「し、子爵が！」

「案じるな。今、消してやる」

消火剤の白い泡がカールの全身をつつむまでに何秒も要さなかった。火が消えると、着込んでいた作業服はぼろぼろに焼け落ち、瀟洒になでつけてあった筈の髪もちりちりに焦げ、全身が黒い煤に覆われる惨憺たる有り様だった。傷ついた獣を思わせる唸りと、痙攣に似た四肢の動きが、一瞬の猛火はこの貴族の生命を奪うには至らなかつたらしいことを示していた。

とは言え、当分の間は人事不省に陥るに十分なダメージを受けただろうことも明らかだった。

「トゥリユー！」

エア・カーからメイリアが飛び出してくる。

半分転げ落ちるように懸崖から降りてきたのはトゥリユーだった。高さ数十ヤードの懸崖を駆け上がった来たる痕を示して、柔らかな銀髪を汗でべったりと貼り付け、両肩で喘ぐような息づかいだった。

「ありがとっ！」

「うまく行つた……みたいだね？」

背負い紐をつけた信号銃を、肩から降ろしながらトゥリユーの視線は、孔だらけの大型エア・カーと、煤と泡に包まれて呻いているカールの身体を交互に行き交う。多分、大火傷を負っているだろうカールに向けるとき、視線は痛みを押さえて曇っていた。

ベアリングに使う鋼球を詰めた紙袋を、懸崖の上から投げ降ろしてカールたちの機動力を奪い、さらにホットケーキ・ミックス詰め紙玉数十個を矢継ぎ早に放り投げて混乱を誘う。ベアリングの方は重いし、狙いを外すと人死にが出かねないので、装甲エア・カーの信号銃を使って狙い撃った。

「助かるかな、あの人？」

さすがに、ホットケーキ・ミックスが火炎瓶並の殺傷力を持つことまでトゥリユーは予想していなかったから、がけ下でオレンジ色の爆炎が上がったときには腰を抜かしかけたのだ。

トゥリユーの心配を、エルブレットはあっさりと否定してのけた。

「助かる。メルティアでも、あの程度の火傷では致命傷にはほど遠い」

「おいおい……口を挟みかけるライナーノートに、エルブレットは軽く目配せする。」

「悪い。トゥリユー、プリンセスと一緒にちよつとあちらの日陰で休んでいてくれないか。後始末について、このお方の……顎でカールを指し示して……部下の人々と相談がある」

「……？」

不思議そうな表情で、トゥリユーはエルブレットと、そしてライナーノートにわかるがわるに視線を投げる。ライナーノートは、汗で貼り付いたシャツの胸元をくつろげて風を入れる。トゥリユーに見つめられるのが、どうにも居心地が悪そうだった。

「あ、つまりだな、トゥリユー……ミスター・ネレイド。わたしは刑事であり、法律を守らない連中を捕らえて処罰する立場にある。それから、彼は……」

ライナーノートは表情を消しているエルブレットに軽く顎をしゃくつてみせる。

「彼はテロリストが市民を傷つけたり殺したりしないようにするために行動する。その過程で、若干は法律の枠を踏み越えることもあるかも知れない」

「ちよつと不本意だな、ライナーノート刑事」

苦笑して、エルブレットは首を振った。この綺麗な漆黒の目の少年に

「時には法律を無視する無法者」と思われるのだけは我慢できない。

「われわれの行動は、いわゆる超法規的なものではない。殺人許可証なんでものは、所詮 アクション・スパイ小説の中の絵空事に過ぎない」

「……と、まあ議論していても話が進展しない。無論、ああやって大怪我をして伸びてしまった悪人にとどめを刺そうなんてことはしないがね。不純な政治的取り引きつてやつをしなけりやならない段階に来ていて、それはわたしたちの仕事だ。この先、大人になればいくらでもそういう仕事はしなきゃならないんだ。一五や一六じゃ、経験するにはちょっと早い、分かってもらえるとと思うが?」

知性が理解をしても、感情が承服しない……何十年か先、自分をそのように表現する人々が現れるだろうなどということは、この時のトゥリユーには思いも寄らない。この少年の気性を正確に理解した点で、このドルス市警の刑事は希有な存在だったかも知れなかった。

まだちょっと不安そうに、トゥリユーは眉をひそめたまま頷いた。

「え、ええ、分かりました」

「さて、どうする?」

懸崖の張り出しが僅かに投げ降ろしてくれている日陰の方へ向かう、メイリアとトゥリユーの背を見送り、進み出たのはエルフレッドだった。焦げ煉けたマネキン人形のように倒れ伏しているカルフォルミオ子爵に無感動な視線を投げ、「早すぎたか」と呟く。

「提案があるんだが、聞いてくれるか?」

「……」

「このまま、このお方を放置して、全員でスルフェイク州へ脱出したいんだが?」

「治療しなければ、子爵が……」

エルフレッドは肩を竦め、そして表情を消した。

「そうして治療して回復して、この子爵さまがお前たちに向かって感謝の涙を流してみせると思うか?」

「……」

「そいつは……どうも、趣味に合わない提案だな。犯罪者が処罰されるのは歓迎だが、必要以上に処罰されるのはどうも頂けない」

「これはスルフェイク侯爵家にとって利益のあることなのだ、ライナーノート刑事」

「……という?」

「侯爵はトルガワ公爵家との縁組みを望んでおられぬ。それに、いずれにしても救出劇に侯爵家が手を貸したことは自明ゆえ」

ライナーノートはかぶりを振り、どうしようもないという様子に両手を開いて見せた。

「政治か」

「そういうことだ……」

カルフォルミオ子爵は勝手に暴走し、自滅した。子爵の父親のトルガワ公爵も決して有能な政治家ではないが、保身の術には長けている。

「カルフォルミオ子爵の無軌道さには、トルガワ公爵閣下もうんざりしているという情報もある」

「貴族って言つのは哀しいものだな」

せめて車の中に運び込んでやれよ。ライナーノートは、硬直し切ってしまった子爵の部下たちを前にため息を付く。

「無慈悲で無軌道で残酷な主人とはいっても、せめて日陰に入れてやるくらいは給料分の仕事じゃないか?」

「……提案を受け入れたとして、おれたちはどうすればいいんだ?」

部下たちの代表格らしい一人が、悲壮な決意を定めたらしい、ひきつた表情で口を切る。

「この車はもうダメだ。動かない。乗せていつてもらえるのか？」

「それはできない」

「じ、じゃあ、どうしろってんだ？こんな“死の谷”のど真ん中から、ベルステイルスの山中を歩いて縦断しろってのか？」

「砂漠の中だが真西に二〇キロ歩けばスルフエイク州に入ることをご存知ないかね？」

「な？」

「発信器を渡す。スルフエイク州に入ると同時に発信が始まる。発信が始まったらできるだけ動かぬことだ。スルフエイクの州境警備隊が救助に来てくれる手配をしておく」

「信じられない」

「一緒に食糧と水を三日分と、必要な装備を三人分渡す」

エルブレットは相手の言葉を無視した。

「ガイド・コンパスも、だ。ガイド・コンパスの示す方向へまっすぐ歩け。昼間だと日焼けで焼け死ぬかも知れない。昼間は断熱シートでもかぶって隠れている。そうすれば、チエルノボルグ伯爵家の州境警備隊に見つからずに済む」

一信九疑から、よくて三信七疑といった状態だったカルフォルミオ子爵の部下たちも、サバイバル・キットを投げ与えられると、ようやく半信半疑に近い程度には、相手を信じる気になったらしかった。というより、信じる以外の選択も残されていないことが、漸く現実として理解されてきたのだらう。サバイバル・キットを身に着ける手つきは、紛れもなく真剣そのものだった。

「さて……」

ライナーノートが促したとき、抑えているが紛れもない悲鳴が彼らを凍り付かせた。

「あ……」

それがメイリアの声であることを理解するまでに一秒の何分の一か。理解と同時に身体がアクションを起こす。

まずライナーノートが脇からレイ・ガンを引き抜きざまに駆け出す。数分の一瞬だけ遅れて、エルブレットが身を翻した。ただし、部下の三人を、“捕虜”の監視に残すことは忘れなかったが。

庇のように張り出したオーバー・ハンゲの真下。ようやく西に傾きだした日差しを受けて、少しずつ伸び始めた影の中に踏み込むと、トゥリユーもメイリアもほつと大きく息をついたものだ。

湿度は極端に低いから、日陰に入った途端、肌を突き刺すような陽光の熱さが消え、流れるほどに噴き出した汗が蒸発するのが心地よい。いきなり、だった。

「え？」

「……？」

右腕をぐいっと引かれ、メイリアはびっくりする。トゥリユーは彼女の左側。サバイバル・キットから水ボトルを取り出しているところ。

「きゃっ！」

闇が動き始めたのだと思った。

「メイ、サン・グラス！」

何百個ものスポット・ライトを真つ正面から浴びせられる明るさからの落差が大きく、サン・グラスをかけた視界は一瞬、深夜の漆黒に塗りつぶされた錯覚に覆われる。

明るさの変化への対応は、メイリアよりもトゥリユーの方がはるかに速かった。

サン・グラスを捨てるなり、転がっていた石ころを拾う。正確きわまるコントロールで、小振りなボールサイズの石ころが、メイリアの右腕を掴んだ“動く闇”に吸い込まれる……吸い込まれたように見えた。

羽虫が何百匹も一斉に飛び立ったような唸りが、鮮やかな光の弧となって石ころを十字に切り裂いた。

「トリグラフ伯爵夫人！」

「覚えてくれて、嬉しいぞ、プリンセス・メイリア。こんな所で再会できるとは、正直言つて意外の極み……それとも、歴史の原作者とやらは、よほどのご都合主義らしく見ゆる」

トリグラフ伯爵夫人コリーンは、右手に構えた電磁サーベルの刃をメイリアの胸元にかざして見せる。トゥリユーの端正な容貌に据えられたダーク・ブルー・グレイの瞳が、少し驚いたようにすがめられた。

「ほう、そなた……以前に会ったことはなかったか？」

「メイを離せ！」

「残念だが断る……それより、そなた、レーフラム・トゥリユー・ネレイドと言わぬか？」

「え？」

フル・ネームで呼ばれるとは思っていなかった。

「小母さんはだれなの？どうして知ってるの？」

「小母さんか」

唇の左端を釣り上げたのは、怒りというよりも苦笑だったらしい。

「そなた、年齢は？」

「一五」

「なるほど、一五の子供から見れば、小母さんという呼ばれるのも納得

できぬでもない。ミスター・ネレイド、忠告をしておくが、年上の女性に呼びかけるときには“小母さん”と呼ぶべきが、それとも“お姉さま”と呼ぶべきか、熟慮すべきだと言うことを忘れぬように。時として、それがそなたの人生を左右することもあるということだ」

妙に気圧されて、トゥリユーは思わずこくりと頷く。くすりと笑ったのはメイリアらしい。

「笑つてない！そなたもいずれは小母さんと呼ばれる身の上になるのは避けられぬゆえな。とは言え、こつスケルトンという小話に興じている場面でもなさそうだな」

コリーンは駆けつけてくる人影に視線を転じる。

「止まりなさい。それ以上、近づくと彼女の生命に差し障りが出よう」

「……トリグラフ伯！」

いきなり呼びかけたのはエルブレッドだった。

ちよつとびつくりしたようにコリーンがダーク・ブルー・グレイの眸を睨り、それから唇にあでやかな微笑を浮かべる。

「久しいの。このような砂漠で何をしておるのじゃ？」

「誘拐など、あなたには似合わぬ。プリンセスを離されよ！カルフォルミ才子爵も重傷を負った。事は既に潰えたものと考えられよ」

「愚か者は愚か者らしい報いを受けたということか。案じるな、妾わいはあの者のようにこの娘をむやみに残酷に扱おうと言つのではない。しばらく、我が客人となつてもらい、引き替えに侯爵からある物の提供を受けたいというだけのこと」

「であれば、正式に使者を立てて交渉をなされば宜しかるつ」

「正式の交渉では手に入らぬ物ゆえ、こつした非常手段をとつたのだ……動くな！」

トリグラフ伯の声が無形の鞭となつて、爪先をじりじりと動かしかけ

ていたライナーノートを打ち据えた。

「好んで傷つけようとは言わぬが、これが脅しだとなつたのでは、卿らの侯爵への忠誠は全うされぬ」

「何を侯爵に要求されようと言つのですか？」

「……ファーリア……」

ぎくんとしたのはメイリアだけだった。びっくりしたように瞠つた目が浮かべているのは、恐怖というよりも混乱に近い表情だったけれど。

「ふむ……ファーリアの名は、侯爵家の人間にしか伝えられておらぬと聞いたが、真実であつたようだ」

スルフエイク侯爵妃、またはスルフエイク侯爵令嬢……いずれもマーシャネス・オブ・スルフエイクの尊称を帯びる女性には、基本的に侯爵家にただ一人だけである。九歳で白亜宮へ迎えられるまでは、メイリアがそう呼ばれていたし、現在はシェリア・ハーム・トヒユナ侯爵妃殿下に冠せられるのがその名。

「“ファーリア”とは、マーシャネス・オブ・スルフエイクは代々伝えられる、始祖シルウイスのもたらしたと聞く紫色のダイヤモンドを指すと聞き及ぶ」

「フー・シルウイス？」

「そつ。そなたは賢いな。これでなぜ、妾がそなたの顔と名を知っているのかの回答にならう。名を忘れておつたが、直にそなたの顔を見て思い出せぬようなら、妾もそろそろ老化を案じた方がよからうといつもの。シルウイスが、人類の始祖の地の出身者だという仮説には聞くべきところがありすぎるほど。“英雄の時代”にメルティアが独立を保ち得た秘密こそが、シルウイスの出身地にあつたのではないかと考えることに、な」

「でも、証拠がない……え、まさか……」

「始祖シルウイスのもたらせし物……そう伝えられる物は多くはないのだ。“ファーリア”なる宝玉と、始祖より伝わる侯爵家の血。この二つが妾なりの“フー・シルウイス？”への回答だ」

「血？」

「連邦に帰つたら、遺伝学と言つアプローチを試してみようことを勧めるぞ、少年。この髪がキーとなる」

「髪？」

透き通る煌めきをはらんできらきらと吹きなびくメイリアの水晶色の髪。

「侯爵家の血を引く人間のほとんどがこの麗しい水晶の髪を持つという伝説としては面白いが、現実としてはいささかできすぎている。そなたも学生なら知つておるつ、優性学といつものを。都合主義のスペース・オペラとやらでもあるまいし、優性学も遺伝学も無視して、侯爵家の一族だからと言つ理由だけで同じ色の髪が五〇〇年も伝わるはずがないではないか……」

息をつき、コリンはメイリアを捕らえた左手に力を込める。メイリアが痛そうに顔をしかめるが、今回は無視することに決めたようだった。「ゆえに、“ファーリア”とメイリアの二つながらを手に入れる必要がある」

「手に入れて？」

「知れたこと。メルティアを立て直す。白亜宮の腐りようにもいささかうんざりしたが、連邦のやりようも気には入らぬ。今の単なる延長としての将来に甘んじたくもないが、未来を開くに野蛮人どもの手も借りとうはない……用が済めば、プリンセス・メイリアは傷一つつけずに帰す」

「“フー・シルウイス？”の答えは武器だつて言つんですか？」

「かも知れぬ。妾はもつと効果的なシステムだと考えておるが……少年

いやミスター・ネレイド、妾は学究ではないし、ここは講演にはおおよそふさわしくない場所だ。そろそろ、妾も早く帰って冷たい白ワインが飲みたい」

「無駄なことを、トリグラフ伯！そのような兵器など手に入れて、何の意味がある？」

「動くなと言った筈だ！」

ブーツに包まれた下肢が鮮やかな動きを見せて爪先の石ころを蹴り飛ばす。

声にならない叫びを上げて、ライナーノットが間一髪、身を沈める。

彼の額に接吻し損ねた石ころは、恐ろしいスピードでライナーノットの髪を掠めて飛び去った。

「いや、離して！」

「聞き分けのない娘だ。傷は付けぬと言ったはずだ」

「戦争の道具なんて手に入れてどうするの？連邦と戦争するつもりなの？」

「戦争をしたいという愚か者どもへのこけ脅かしが必要なきもある」

「でも伯爵夫人、あなたはいいけど、あなたが亡くなったあとはどうするの？」

「さての。先の世代のことは先の世代が心配をすれば十分というものとは思わぬが。我らのなすべきなのは、先の世代の選択に無用の制約を与えぬこと。いまのままでは、メルティアはもう何代も保たぬ」

「……」

「ミスター・レーフラム・トゥリユー・ネレイド、そなたの研究成果は期待してある。学会には参加させてもらつつもりゆえ」

微笑い、コリーンは有無を言わずにメイリアの腕を引いて懸崖を回り込んでいく。おおよそ、一〇〇メートルほど先に、彼女がああ旧チエ

ルノボルグ伯別荘から乗り逃げてきたエア・カーが止めてある。

“死の谷”はチエルノボルグ、スルフエイク、そしてトリグラフ三州の境界にほぼ近い。南へ一〇キロも走り、トリグラフ伯爵夫人領へ逃げ込んでしまえば、トルガワ公爵はもとより、スルフエイク侯爵がどう地団駄を踏もつとも、事実上の治外法権が彼女を手厚く保護してくれる。

その筈だった。

「悪いな、姐さん。その物騒なサーベルを引つ込めて、メイちゃんを離してくれませんか」

「なに？」

頭軽く一つ半上に、鞆し革を思わせるスキンヘッドと、頑丈そうない歯が見えた。

反射的に電磁サーベルを揮おうとしたコリーンの手を止めさせたのが、背に走った激痛だった。

左肩胛骨下に突き立てられているのが、大型のアーミー・ナイフの先端であることを悟ってコリーンの表情から余裕の一切が吹き飛んだ。鋭利な刃先は服地を易々と突き通し、コリーンの背に浅く食い込んでいた。

「何をする！」

「だから、メイちゃんを離してくればいいんで、姐さん。でないとこのままぐつと押し込んでしまいますぜ」

スキンヘッドの大男……ブライアンは困ったような口調で続ける。

「電磁サーベルとアーミー・ナイフじゃ全然こっちに分がねえ。別嬪さんの身体に傷を付けるのは好みじゃねえが、ここはメイちゃんの生命が最優先なんだから」

「誉めてくれたと受け取っておこうか……お前も、スルフエイクの獵犬

か？」

「しがない運転手です。侯爵には借りがあるんで、機会があれば義理はたさなけりやなんのです……おっと、警告つてやつあしましたぜ」

ナイフの切っ先が、正確に心臓を直指している。

コリーンの右手からサーベルが落ちて右足のつま先の前に転がり、彼女が敗北を悟ったことを示した。

「分かった。この歳で死にたくはないし、そなたに殺人を犯させるのも不本意だ……サーベルは離れたぞ」

「オーケイです、姐さん」

「早くナイフを抜いてくれぬか？」

メイリアの手をつかんでいた手を離して、両手を軽く上げ、降伏のポーズをとったコリーンが顔をしかめる。黒服のせいではつきりと見えないが、背に食い込んだナイフの切っ先の周囲は血で濡れ始めている。

「さすがに少々、痛む」

「こいつぁ失礼、マダム」

ブライアンはナイフを引き抜く。

ブライアンがナイフを引き抜くと同時に、コリーンの右足が閃いた。爪先が電磁サーベルのグリップを引っかけて宙に舞わせる。

まるでトリックのようにグリップが主の右掌におさまると同時に、剣呑極まりない超高熱の刃が吹き伸びた。

と同時に巨体に似合わぬ敏捷さで身を沈めたブライアンの頭上を、ぶんつと言つ唸りとともに赤みを帯びた閃光が通過した。

「逃げろ、プリンセス！」

「でも！」

「議論してる余裕はないっ！」

ブライアンの声に背を突き飛ばされ、メイリアは半ば転がるように走

り出す。

「失礼、マダム！」

ブライアンの反撃はコリーンの予想を裏切った。

身を沈めるのが身構える動作だった。

突進。

それと悟ったコリーンのブーツが肩口に食い込んだが、肩の厚い筋肉が弾き返す。

悲鳴が上がった。

丁度膝の高さを狙ったスピアリング・タックル。一〇〇キロを優に超えるブライアンの体重は、トリグラフ伯爵夫人の身体を彼の背中越しに舞い上げ、地面に叩きつけるだけの衝撃力をはらんでいた。

電磁サーベルのグリップがくるくると回りながら、今度こそ手の届かない位置に転がり落ちる。サーベルの所有者は空中で一回転し、それでも優れた反射神経とバランスの良さを見せて背中から受け身の態勢で重力の支配を受け入れた。しかし、優に一メートル半あまりの高さにまで舞い上げられた衝撃は、さすがに吸収しきれなかった。

落ちると同時に地面を蹴り、転がった武器に突進しようとして、コリーンの動きがぐんと止まる。強打した背と、ブライアンのタックルをもろに食らった右膝が酷使に抗議の悲鳴を上げ、肉体の所有者の意思に叛旗を翻したのだ。

「……」

「もう一べんやれっといわれてもできねえだろうな。凄え使い手だっけ聞いてなかったら、首と胸が泣き別れってやつさ」

「……妾のことを知っていたのか？」

「無線つてやつがありませ、マダム」

ウィングート峠での合流を指示されたものの、トゥリユーたちが追わ

れていること、さらにカルフォルミオ子爵のエア・カーに追いつめられたことを知って、ブライアンは引き返すことを躊躇わなかった。

「偶然でさ、マダム。マダムが車を止めて、そっちへ行きなざるのが見えたもので……ひよっとしたらと思ひましてね。そしたら、メイちゃんがトリグラフ伯爵夫人にさらわれたって。伯爵夫人と言や恐つとろしいサーベルの使い手で知られてなさる」

「そうか」

今度こそ、敗北を悟った表情でコリーンは頷いた。

「有名になるのも考え物だな。さて、どうやらこれ以上、“フー・シルウィス?”にこだわっても何の益もなくなったよつじや」

駆け寄ってくるスルフエイク州兵たちとライナーノート、そしてトゥリユーとメイリアを視界に入れ、コリーンはブライアンに手を差し出す。「そなたのタツクルで膝をやられたようだ。立ち上がりたい、手伝ってくれぬか。無様にしりもちをついたまま、城下の誓いとやらを強いられるのはいささか以上に好みに合わぬ」

「どつぞ」

まだ何かトリックがあるかも、と言つ心配はブライアンには無用だった。

「ごつい手を借りて、コリーンは立ち上がったが、右膝を痛めたのは本当らしく、身体は不安定に揺れていた。

トゥリユーたちが駆けつけたとき、コリーンは懸崖に背を持たせかけるようにして辛うじて体のバランスを保っていた。

「伯爵夫人……」

「どうやら妾の負けのようだ。何か、妾の処遇について提案はあるか？」

「……ドルスへ来て頂ければ幸いです」

「ドルスへ？逮捕かな？」

「いえ」

エルブレットは否定した。

「判断はわたしのレベルを超える。ゆえに侯爵に判断を仰ぐものです」

「コリーンの微笑は和解ではなく、峻拒を示していた。

「判断がそなたのレベルを超える、じゃとっよう言つわ。それでは、逮捕と変わらぬな。そのような扱いは妾の好みには合わぬ」

「……」

「ブライアンとやら言つたな」

「？」

「そなたの言うとおり、無線とは便利なもの。南に二〇キロほどで妾が領地。さすがに州境には兵を置いておらぬが、最も近い駐屯地はここから五〇キロほどのところにある」

「……！」

「という前提で、妾の提案を検討してみてくれぬか。妾はこのまま我が領地へ帰る。そなたらを追わせることはせぬ。それから、“フー・シルウィス”に関する妾の仮説は、メルティアの他の貴族どもには口外せぬ。今回のことは、いずれスルフエイク侯爵に詫びを入れよう」

トゥリユーは内心呆れた。反面、なぜトリグラフ伯爵夫人がメルティアでも最も有能な政治家の一人に数えられるのか、納得した思いがしたのも事実である。

エルブレットがメイリアを見る。

メイリアは頷き、トゥリユーを顧みた。

見つめてくるロイヤル・ブルーの眸に、トゥリユーは頷きを返す。

応えるのはメイリアの役目だった。

「提案を受け入れます、トリグラフ伯爵夫人」

つかつかと歩み出るメイリアに、コリーンは始めて少し戸惑ったような表情になった。

その両頬を、メイリアはいきなり摘んで左右に引き伸ばしたのだ。

「……メイ……メイ……」

「怖い思いさせられたお返しです、伯爵夫人。でも、庇って下さったことには感謝します……少しは、ですけど」

ちょっとびつくりしたような表情になって、コリーンはつまみ上げられた両の頬を撫でた。

「やれやれ、おとなしそうな顔をしていて、侯爵家の人間はなかなか怖いな。以後、気を付けよう」

連邦は無論のこと、メルティア内部でさえ、誰の耳目をも騒がすことなく、この事件が幕を閉じてしばらくの後……。

メルティアの貴族社会に、トルガワ公爵家の継承者の変更とカルフォルミオ子爵家の断絶が伝えられたのはその一ヶ月後。カルフォルミオ子爵カール・レン・ピュローは急病による逝去を公表されたものの、彼の異常な性癖を知る人々が公式発表を信じなかったのは当然だった。

トリグラフ伯爵家が、密輸の疑いでメルティア政府の司法当局の強制捜査を受けるに至ったのはこの翌年のことである。

しかし、トリグラフ州都トリグラフ・シティの伯爵邸に踏み込んだメルティア政府の捜査官と、同行していたメルティア宇宙軍の将兵たちを驚きと失望が待っていた。

伯爵邸はすでに半年以上も前に引き払われており、“証拠物件押収”の名目での略奪に目を血走らせていた彼らは完全に肩透かしを食らった

となった。そして、彼らが腹立ち紛れにトリグラフ・シティの略奪を思いつく前に、伯爵邸は轟音とともに、権力の名を帯びた最悪の盗賊たちを瓦礫の山の中に飲み込んだのである。同時に、トルガワ公爵をはじめとする有力貴族たちのさまざまな醜聞^{スキャンダル}が、メルティアばかりか連邦のマス・ジャーナリズムに格好の材料を与え始めるに至り、メルティア政府はトリグラフ伯爵家へのいっさいの調査中止を決定する。

伯爵家当主だったコリーン・ミライユが、偽名を使って連邦圏へ出国したことは確実視された。しかし、その後の彼女の消息は噂の域を出ることはない。



プロローグのプロローグに至るエピローグ

「お帰りなさい、メイ。それから、いらっしやいミスター・ネレイド」

トゥリユーたちを迎えてくれたのは、短くした黒髪にマリン・ブルーの瞳の背の高い女性だった。ゆったりした仕立ての服装と、緩やかな身ごなしが、この女性が近い将来に母親になることを示していた。

「あ、ええと……」

トゥリユーにはスルフエイク侯爵家の人々に関する知識は少ない。

鈍い音が響いた。

仰天して運転席で立ち上がったブライアンが、ルーフにスキンヘッドを打ちつけた音だった。

「侯爵妃殿下……痛てて」

「え？」

「大丈夫？あなたがブライアンね。そちらがライナーノート刑事？……」

あら、眠ってしまったのね。相変わらずね、メイは」

侯爵妃……すなわち、スルフエイク侯爵妃シェリア・ハーム・トヒユナは、眠りの神の愛撫に身を委ねきっているメイリアの肩をそっと揺さぶる。

二台のエア・カーに分乗したトゥリユーたちがその場を離れたのは一〇分後。トゥリユーはブライアンのRVへの同乗を主張し、メイリアはトゥリユーと別の車に乗ることを肯じなかった。

「やれやれ……プリンセス。侯爵邸に着くまで、どうかスルフエイクの人間にお姿を見られぬように。トゥリユー、本当にメルティアから出ら

れなくなるから、気を付けろ」

エア・カーが動き始めて直ぐ、トゥリユーの隣に座席を占めたメイリアはことごとく頬をトゥリユーの肩に預けた。

ウィングート峠を越え、ドルス郊外のロードニー・エリアに入るまで約四時間。

エア・カーが侯爵邸に至る街路樹の小径にさしかかるまで、メイリアは安心し切った表情でトゥリユーの肩に頬を埋め続けたのだ。

「……………あ、あ、お義姉さま？」

「しよつのない娘ね。救けてもらった上に、お礼もろくに言わないで眠りこけていたのね」

「え……………あ、ご免なさい」

ずっとトゥリユーの肩を借りていたことに初めて気が付いたらしい。メイリアは真つ赤になっただけだった。

「あ、ありがとう、トゥリユー」

「え、いえ、いいんです。ちよつと背中が痛かったけれど……………」

無心に眠っているメイリアの寝顔を眺めているのは悪い気分ではなかったけれど、トゥリユーはそれを口にはしなかった。

「さあ、皆さん、いらつしゃって下さいな」

「あ、いや、その、妃殿下、この格好で侯爵邸に伺うのなあ、ちよいと……………」

「分かっています。凄い汗の臭いですわね。それと、土埃……………広くはない家ですけど、バス・ルームと着替えの用意はさせてあります。さつさとなさいな。これはスルフェイク侯爵妃からの命令ですよ。」

メイ、あなたもよ」

「はい、お義姉さま」

有無を言わせない調子でぼんぼんと紡がれる言葉は、奇妙に反発を感じさせなかった。

「身だしなみが終わったら、お食事よ。執事に案内させるから、食堂へいらつしゃい。大活躍のお話を聞かせて欲しくてうずうずしている人がさつきから痺れを切らしていますから、余りバス・ルームで長居はなさらないでね」

追い立てるように四人を侯爵邸に招き入れた後、シェリアは、ブライアンのRVを護衛してきた対テロ部隊の装甲エア・カーのドアをこつこつとノックする。

「出ておいでなさいませ、兄上……………ライエル・エルブレット・ハーム男爵閣下」

「わたしはそのような身分のものではありません。侯爵妃殿下……………」と云ったところで許してはもらえぬな」

ドアが開き、エルブレットが日に焼けた精悍そうな容貌には似合わない物憂げな表情を覗かせた。

侯爵妃が、薄汚れた一介の少佐に騎士への礼を施すのを目にしたら、ライナーノートあたりは仰天したに違いない。

「ありがとう、兄上。メイを救ってください」

「救ったのはあの少年だ。私たちじゃない……………。いい少年だ。連邦の間でさえなかったらな」

「そうね……………」

ちよつと痛ましげにシェリアも眉をひそめ、トゥリユー達が招き入れられた侯爵邸に視線を投げる。

「兄上には見えなかった？」

「何が？」

「あの少年にも、それにメイにも、背に羽が生えているわ。いずれ、私たちの手の届かないようなところへ飛び立っていくと思う。メルティアでは、あの子達を入れる器が足りないわね」

「そうかも知れないが……侯爵にはよろしく伝えておいてくれ、私はここで退散するし、タロスのうるさい連中につかまらぬよう、うまく立ち回るつもりだ、と」

「ええ。また、いらしてね、兄上」

バス・タブのお湯を二回も替えて肌が痛むほどこすり立ててから、用意された服に着替えてダイニング・ルームへ案内された。

晚餐のテーブルには、スルフェイク侯爵と侯爵妃シエリア。そして服装を改めたメイリアが着き、もじもじとお尻のすわりの悪そうなのはトゥリユー、ブライアン、ライナーノートの三人。対テロ部隊の五人は、さすがに招待を辞退して早々に侯爵邸を辞去している。

「妹の生命と、そしておそらくは矜持を救ってくれたことに感謝します、ミスター・ネレイド……」

いちいち名を呼ばれ、四人はへどもどしてグラスを掲げて見せるしかなかった。

席についた侯爵は二〇台の半ばから後半にしか見えない若さで……実際、まだその年代だったのだが……トゥリユーを驚かせた。もつとも、彼の視線の六割方は、ほんの一、二メートルの距離からしきりに彼に話しかけてくるメイリアに吸い寄せられていたのだけだ。

トゥリユーが内心恐れていたような仰々しい服装も強いらなかったし、晚餐はどちらかと言えば新鮮な魚介を中心にした、“凝ってはいないけれど、美味しくて、量もたっぷり”といったスタイルの食事だった。

前夜は完全な徹夜。今日一日は、ウィークエンド・ソールジャー 週末、土顔負けの大活躍を演じた後だったから、四人にとってこの食事はありがたかった。

相当量の皿が下げられ、これだけは最上級の白ワインのグラスが何度

か空になると、徹夜仕事に馴れていたはずのライナーノートやブライアンも、下瞼に接吻したがる上瞼の説得に困難を覚え始めたようだった。

「寝室を用意させたから、一晩、そちらで休まれるがいいでしょう。市警と空港、それから大学には私の方から連絡を入れさせます」

「いえ、侯爵……そのようなお気遣いは……」

ライナーノートが口にした辞退の言葉をのどの奥に押し返したのはシエリアだった。

「勧められたら、理不尽でない限り従うこと。これが侯爵邸の客人のルールです。疲れ切っている人たちに一日の休暇も与えない組織など、スルフェイクでは認められませんわ」

ミスター・ネレイド……スルフェイク侯爵がトゥリユーの背に声をかけたのは、他の三人が寝室に案内され、彼もダイニング・ルームを辞去しようとしたときだった。

「はい？」

「疲れているとは思いますが、少し話をしたい」

「え？」

「きみがいなかったら、妹は救われなかったと聞いています。その礼も言いたい……よろしいか？」

意味は分からなかった。

疲れ切っていて眠いのは事実だった。

しかし、メイリアに途中まで聞いた“メルティア建国神話”のすべてを、この侯爵が語っているという話は、疲労をある程度無視できるくらいに彼にとっては魅力的だった。

「ええ、侯爵。よろこんで……」

異議を唱えたのはメイリア。彼女もすでに上下の瞼を引き離しておくのに渾身の努力が必要な状態にあるのは明らかだったけれど。

「お兄さま、ずるい」

「うん？」

「わたしもトゥリユーとお話したいのに」

「今日はいろいろあり過ぎた」

ラルクはかぶりを振る。やんちゃな妹に向ける兄の視線は、トゥリユー

にもつぐ九歳の誕生日を迎える異母弟を思い起こさせた。

……帰ったら、話してやろう。メルティアのプリンセスや、侯爵なんていう人と直にあつて話をしてきたつて。

「休暇はまだ何日があるね。とりあえず、今日はお休み、メイ」

「あした、ドルスを案内させてもらつてもいい？」

「え、ちよつと、それは……」

メイリアと会えるのはともかく、大勢の護衛を引き連れてぞろぞろと歩き回るのだけはごめんだった。

口を挟みかけ、トゥリユーは素早く目配せする侯爵に気づく。

「ミスター・ネレイドにはグラヴィトロニアが興味深いだろう。ご一緒するとい、メイ」

「きつとね」

びつくりするほど綺麗に澄んだ目を嬉しそうに輝かせ、メイリアは兄にお休みなさいの挨拶をする。同時に、立ち去りがたくてその場にたたずみ続けているトゥリユーにも、水晶色の髪をふわ、となびかせてかく会釈した。

「きつと、明日ね」

さして広くない、おそらくは非公式な客をもてなすための瀟洒な飾り付けの部屋に通されて、レーフラム・トゥリユー・ネレイドは、それぞ

れの壁をさりげなく飾っている古びたタペストリーや絵画に視線を吸い寄せられた。

「語ることは禁じられていた。きみの推測通り、シルUISその人の遺志によつてね」

ラルクの声は、それに先行した逡巡をそれと感じさせなかった。

「ただ、きみはメイリアの生命を救ってくれた……無論、わたしだとしてスルフェイク侯爵家の発祥に関して、何もかも知っているわけではないのだ。むしろ、全体が一〇〇あるとして、その内の一〇を知っているかどうかと言う程度でしかないだろうと思うが。それでも、これまで“シルUISは誰か”に挑戦して挫折を続けてきた人々に比べれば、かなりのことは語つてあげられるとおもう」

「スルフェイク侯爵家の開祖……つまり、シルUIS・トヒユナは他の惑星……多分、シエルメス連邦の真の発祥地からの移住者」

「いいところをついているんだらうと思うね。それは、わたしの推論とも一致する」

言いさし、ラルクはちよつと苦い笑いを端正な頬に走らせる。

「ただ物的な証拠は何もない。いろんな状況証拠……きみが、これまで連邦国の各地で収拾してきた遺物、伝承、遺跡などに関する報告は読ませてもらっているよ。加えて、スルフェイク侯爵家に残された各種の伝承を考え合わせれば、シルUISの生まれたのがメルティアではない、と推論するのはそう難しくない」

「では？」

ラルクは再び笑つ。トゥリユーの気負い込んだ口調を、むしろ好ましくみているような微笑だった。が、一瞬に微笑を消した侯爵は、放り投げる口調に変わる。

「分からないのだよ、トゥリユー」

「分からない？」

「そう、分からないのだ」

「でも、侯爵は侯爵家に各種の伝承が伝えられているって……」

「微々たるものだ。よろしい、まだ、タイムリミットまでは三時間ほどある」

戸惑い。何が三時間だと言っているのだろ。トゥリユーは、あと数日、メルティアにとどまるつもりだったし……メルティアを離れる前にはメイリアを見舞いに行きたかった。本当なら、プリンセス・オブ・メルティア……おいそれと見舞いに行ける立場の少女ではないが、ああいう事件をともした相手に数分の時間をつくってくれる寛大さを、このスルフェイク侯爵に期待してもいいのではないだろうか。

澄み切ったロイヤル・ブルーの瞳の、小柄な少女の面影が不意に脳裏に浮かび上がり、トゥリユーは白すぎるくらいに白い頬を微かに紅潮させる。

スルフェイク侯爵は、トゥリユーの表情の変化に気づいていたとしても、顔色には出さなかった。何も目にしなかったような調子で続ける。

「十分すぎるくらいの時間だ。ゆっくり話したところで、一時間はかかるまい、楽にするといい」

コーヒーをサーバーごと運ばせ、ラルク・トヒユナはソファに腰を沈めた。二つのマグ・カップに注がれた熱いコーヒーの芳香が、昨夜から一睡もしていないトゥリユーの嗅覚を快く刺激する。マグ・カップを傾け、熱い黒褐色の液体が咽喉を滑り降りていく心地よさをしばし楽しんだ。

「……さて、まず、事実から告げていくのが、この分野に志したものとしての当然の心得と言えるのだろうか」

自分も、ミルクを軽く注いだコーヒーをかき混ぜながら、ラルクの口調はやや惑う響きを帯びていた。マグを置き、居住まいをただすトゥリユーの几帳面さに、ラルクは再び微笑を誘われたようだった。

「侯爵家に伝えられる伝承によると、シルウィスはメルティアで生まれた人間ではない。無論、連邦圏に属するいかなる有人惑星を故郷にしているわけでもないのだよ」

「じ、じゃあ？」

「伝承……といっても、口伝と言うわけでもなくてね。文書が残されている。その中で、シルウィスが、メルティアの近くで遭難し、大破した移民船の搭乗員だったと言っただけが明らかにされている。その移民船がどこから出発し、どこへ向かう予定であったのか、全く明らかにされていない。だから、分からない……」としか言いようがないのだよ。そして、この紫ダイヤ……」

スルフェイク侯爵家に伝えられる、五彩に煌めきを放つ大粒の紫ダイヤ。現女王ルリア・セイレリウスの養女となるまでは、メイリアの右手を飾っていたそのダイヤを、ラルクは示した。

「なぜ、彼ら……つまりリアー王家の側近達だけれども……は、このダイヤを極秘の内に奪おうとしたのか？」

「ものすごく小説家的な説明ですけど、その指輪、というか、そのダイヤは高密度記憶用のクリスタル・チップが何かで、その中に重要な機密が封じ込められている……とか何とか……たとえば、連邦空軍もまだ発明していないような超兵器の設計図……」

トゥリユーの、いかにも馬鹿馬鹿しそうな口調に、ラルクは満足げに頷きを返す。確かに、小説家的だ。それも、子供向けの冒険小説の類のプロットだ。

「いっそ、宝島への地図だったら、もっと冒険小説的じゃないでしょ」

うか」

言いさし、トゥリユーは、自分の言葉の意味に気づいて僅かに顔色を変える。

「まさか……」

「それも分からない……期待に背いて悪いが、このダイアが高密度記憶チップであると言う証拠は何もない。何代か前のスルフエイク侯爵が、好奇心にかられて、このダイアの分子構造分析を行ったことがあったらしい。残された記録は、このダイアの結晶構造の中に、ある種の規則的な繰り返しが見えられたことを告げている。しかし、その繰り返しがある種の暗号だとして、それを解くためのキー・ワードのかけらも我々には与えられてはいないのだ。キー・ワードを全く欠いた場合、暗号を解くのは、それを作るための数百倍の労力を要求する」

「……」

「思うに、リアー家の人々はある種の仮説を立てたらしい。次のような事実に基づいてね……」

この指輪は、代々のマーシャネス・オブ・スルフエイクに伝えられるしきたりになっている。それこそ、シルウィスの代からだ。

ところで、これはほとんどの歴史が見落としているし、代々のスルフエイク侯爵、あるいは侯爵家出身の歴史家も無視している事実なのだが、マーシャネス・オブ・スルフエイクの名を公式に与えられるのが侯爵妃、もしくは侯爵家の長女ということになっているにも関わらず、実際にマーシャネス・オブ・スルフエイクの称号を帯びるのは、圧倒的に侯爵家の長女が多いのだよ。これまで、約二〇人のマーシャネス・オブ・スルフエイクがいるのだが、そのうち、侯爵妃は二割強ではない……」

「……？」

ラルクは、サーバーから新たな一杯を注いだ。

「コーヒーはもういいかね、トゥリユー？」

「え、ええ、頂きます」

元々、さして頑健とは言えない体質である。徹夜で、しかも、目一杯に身体を使う羽目になった疲労が、一杯のブラックコーヒーをきっかけにして緩やかに全身に回り始めるような気がした。研究室や実験室で、一晚を殆ど仮眠なしで過ごしたときに似ているな……とトゥリユーは思う。身体の内芯にわたる疲労が、全身にゆっくりと広がっていく。ときどき、暗い穴に落ち込むように意識がふっと途切れそうになるのを、トゥリユーは辛うじて堪えている。

トゥリユーが、新たに注がれたコーヒーに口をつけるのを待つて、ラルクは唐突に話題を切り替える。

「遺伝病というのを知っているね」

「遺伝病？ええ、知っています」

「そして、我々人間の遺伝子を伝える分子構造体の内、大部分は実は機能していないと思われる無意味な構造であることも？」

「え……それは、まあ……」

唐突な理解。トゥリユーは一瞬言葉を失う。

「つまり、まさか……」

「これも仮説に過ぎないのだよ、トゥリユー」

はぐらかされ、トゥリユーはちょっと不愉快そうに銀色の眉を寄せる。「マーシャネス・オブ・スルフエイクの称号をおびる女性は、特異な遺伝的形質を持っているのだ、とでも？」

「まさか……」

失笑。ラルクは指摘する。マーシャネス・オブ・スルフエイクは、その席が欠員であれば、侯爵妃、もしくは侯爵家当主の長女が新たに称号を与えられる。その際の不文律として、侯爵家当主の長女に優先順位が与えられているに過ぎない。別に遺伝的な何かしらを検査して資格審査をするわけではないのだ。

「これも結局、仮説に過ぎないわけだけでもね。トゥリユー、人間の遺伝子は、要するに四種類の塩基分子の無限の組み合わせ。これを四進符号と見なしたとして、十分な長さ、つまり遺伝子の構造体だが、その中に埋め込むことは既に理論的には不可能ではない。それを、侯爵家の女性達に、たとえば隔世遺伝の形で継承されるように組み込むことも、勿論、不可能とはいえない。無論、理論上のことだけでもね。しかも、彼女達の遺伝子構造の中に組み込まれるのは、さして長くもないキー・ワード……紫ダイアに見せかけた高密度記憶チップの結晶構造の中に埋め込まれた暗号情報を解くためのキー・ワードで十分……」

「でも、もし、突然変異や何かで情報が破壊されてしまったら……」

「特定の個人の遺伝情報を使うわけではないのだ。スルフエイク侯爵家につながる人間だけでも、過去に数百人を数えているのだよ、トゥリユー。その内の何人かが正確な情報を構成に伝えて行けばよい。別にそれがマーシャネス・オブ・スルフエイクである必然性はないものだ。情報が発見されず、時間の中に埋もれていくとして、それはそれでもよい……この程度の謎解きができぬのであれば、取えて知るには及ばない……わたしがシルウィスであればそう考えるだろうね」

「……そんな……」

「推測してみようと思ったことがある」

シルウィス・トヒユナは考えたのではない。彼が、メルティアに伴

い来たった科学技術は、あるいは現在の連邦ですら到達できていない水準に達したものでなかったのか。この偉大な開祖を包む伝説には、まだ仮説の域を出ていない最先端の科学技術によってしか説明し得ぬものが少なくない。シルウィスは、それらの技術が、メルティアの発展を必ずしも保証するものではないことを知っていた。だから、彼は技術情報を封じた記憶チップを“家宝”のような形で継承させるとともに、彼自身なり、彼の娘なりの遺伝子情報の中に必要な情報を埋め込んだのではない。気づいて解読し、彼の伝えた“超科学”か、あるいはメッセージを読み取れるような人物であれば、伝えられた情報を悪用することもあるまい。もし、そうでなかったとして、それはそれでしかたのないことである。

「……メイリアが狙われたのは、それで説明がつく。リアー王朝の中にも切れる者は少なくないからね、彼らの中にわたしと同じ推測を組み立て、最も手ごるな標的としてメイを狙った連中が今度の騒動を企てたのだとしても、わたしは驚かないね」

「でも、彼らは全滅した。もう、メイリア……が狙われることはないんでしょね？」

「心配かね、メイのことが」

「え……」

見る見る頬を紅潮させるトゥリユーに、ラルクの視線は好意的だった。その表情は奇妙なほど暗い。

「メイリアの兄として、メイに好意を持ってきているのは有り難いし、今回あの娘の生命を救ってくれたきみには最大限の感謝を捧げた」

時代がかった言い方で、とトゥリユーは思っ。それとも切口上？

トゥリユーはこの時まで一五歳。世馴れているどころか、むしろ世間

知らずといつても、さして公平を欠く見方ではない。しかし、そのトゥリユーでも、年長の人物がこういう言い方をするときには、ろくなことがないという程度の常識は弁えている。

困惑したような沈黙に陥ったトゥリユーに、ラルクは再び好意的な微笑を浮かべる。決して、無条件のものではなかったにせよ。

「わたしが、何を言い出そうとしているのか、わかってくれたようですね」

「……？」

後年、宇宙考古学とは全く縁のない領域で超絶的な明敏さを謳われることになるトゥリユー・ネレイドだが、この時は、まだ一五歳という年齢から自由ではいらなかった。否定を示す万国共通のサインを、トゥリユーは示した。かぶりを振ったのである。

やはりゆつくりと首を振り、ラルクは残りのコーヒを啜る。受け皿に戻されたとき、マグ・カップが不自然に大きな音を立てた。

「……この指輪と侯爵家にまつわる伝承、そしてマーシャネス・オブ・スルフェイクに関わるわたし自身の推測……いずれも、スルフェイク侯爵家の当主のみ、知りおくべきことです。メイを救ってくれたからこそ、きみに語って聞かせたわけですが、無論、それには前提条件があります」

「前提条件……？ まさか……そんな……」

口調が不吉な予感を抱かせる。費やした時間を確認するかのよう、ラルクは腕時計に視線を走らせた。

「多分の、きみの推測は正しい」

「推測っていわれても……まさか、ばくの記憶を消してしまうとか……」

「その、まさか、だよ、トゥリユー」

一瞬、理解できなかった。啞然とするトゥリユーを後目に、スルフェイク侯爵は平坦な口調で説明を続ける。

「過去六〇時間の記憶の一切を消去する薬剤がある。これ以上、強力な薬剤には無視できない副作用があるので、使うわけにはいかない。わたしがさっき、タイムリミットといったのはあと三時間……正確には二時間余りだけだね。それだけの時間が過ぎると、多分、今度の事件がきみやわたし、それにメイの記憶の中に無視できないものとして残るだろうということなのだよ」

「ちよ、ちよと待って下さい、侯爵。あなたはご自分やメイリアの記憶まで……」

「選択の余地はない。メイは勘のいい娘だし、リアー王家も、今回の出来事に関してわたしを問いつめてくるだろう。幸いにして深層催眠までは使わないだろうが……いずれにしても、きみだけではなく、わたしもメイも、今回のことを記憶に残しておくわけにはいかないのだよ」

漆黒の瞳が点に見えるほど大きく目を見張り、トゥリユーは思わずソファから立ち上がる。正確には立ち上がりかけ、急に激しいめまいに襲われてソファに崩れ落ちる。

「悪い……許して欲しいなどというつもりはない。きみにも選択の余地はないのだ……なぜなら……」

ラルクは声を落とす。彼は他人の不幸をわが身の幸福と感ずるような不健全な精神作用からは完全に無縁の人物だった。むしろ、周囲の人間が人生の幸福な局面に会するのを歓迎したし、彼らが造物主の悪意に見舞われるのを目の当たりにして、快さを感じたことは一度もない。蒼白になって自分を見つめている少年の姿が、スルフェイク侯爵に自責の念を抱かせなかったといえ、それは事実を裏切っている。

しかし、同時にラルク・トヒユナは言葉を飾ることも余りしない人物である。

「きみは、もう服んでしまっているんだ、その薬をね」

「まさか……コーヒー？」

「そう、コーヒーに。だからわたしも服んだ。あと三〇分もすれば効いてくる。きみは、これまでの出来事……きみがメルティアに着いてからのことをすべて忘れる。メイと会ったことも、あの娘を救ったことも。そして、わたしがここで語ったこともね。目を覚ましたとき、きみはメルティアに着いたばかりなのだ」

「いやだ……」

めまいが、既に薬が効果を発揮し始めていることを雄弁に示している。トゥリユーは、無視しようとした。

「冗談じゃない……侯爵、そんなことができるはずがない」

「事実を事実として受け入れるのが、学究としてのあるべき姿ではないかね」

“視線が人を殺すとしたら、この時のトゥリユーの視線はラルクを射殺するに十分だったかも知れない……”という表現は、この場合には当たらない。トゥリユーは、決して憎悪の視線でスルフエイク侯爵を凝視したりはしなかった。にもかかわらず、ラルク・トヒユナは、確かにある種の罪悪感を感じている。まだ、ミドル・ティーンにさしかかったばかりのこの少年がメイリアに抱いたであろう、ある感情。彼にとつて、始めて見いだした限りなく価値のある何かしらを、無理解なままに無視してしまわねばならないのだという……

「メイリアも……？」

「あの娘にもさつき薬を与えた。メイの休暇は今日で終わる。休暇の

初日にテロに遭い、けがをして入院していた……そういう疑似記憶を与えることになるだろうと思う……きみのことは……あるいは夢の中で思い出すこともあるだろう。夢の中で、はらはらするようなできごとに出会って、誰かが自分を救ってくれた。あの年頃だ。メイがそれを事実として人々に語ったところで、ありがちな夢として片づけられるだろうし、本人も夢だとは思わないだろう」

もう一杯、コーヒーを注ぎかけ、ラルクはトゥリユーがマグを差し出しているの気づく。

「害はないんでしょう？」

「三杯くらいならね」

注がれたコーヒーを、ためらうことなく一口嚙り、トゥリユーは問う。すっかり忘れてしまつのか、と。

「潜在意識にまでは干渉できない。もし、きみが、無論、メイもだが……きみが今回の出来事を潜在意識にまで刻みつけていたなら。さてね、何かそう、いつかこんな夢を見たことがあるな……という程度には思い出すことがあるかも知れない。もっとも、もう一度、メイに会う機会があったとして、いつか会ったことがあるな、程度の印象しか持てないだろう。リアー王家は、あの娘を王家の顔、王室外交の顔として使っている。いつか会ったことがある、と思ったところで、3DTVで見たんだろ、ぐらいにしか思えないだろうね」

「そう……ですか……」

ため息。白いマグカップの中の濃褐色の漣を暫く見つめ、それから思いついたように一気にそれを飲み干す。

「目が覚めたら、ぼくはどこにいるんでしょう？」

「宇宙港の医務室だ。着陸船の降下中に気分が悪くなり、そのまま失神して医務室に運ばれたことになる」

「格好、悪いですね」

「……」

申し訳ない……などという悪趣味な台詞を、ラルクは使わなかった。もう一度、ため息をつき、トゥリユーはソファに身を委ねた。急速に眠気が襲ってきたらしく、いつもは綺麗に澄み切っている瞳に薄いもやがかかったように見えていた。

「これっておかしいな」

「何が、だね？」

トゥリユーは言っただ。童話であれば、あるいは映画なり、普通の小説なりであれば、彼がメイリアを救いだし、侯爵のもとに返した時点で話は終わる。ハッピー・エンドで終わるはずではないのだろうか。

スルフエイク侯爵の端正な表情がちょっと曇る。

「これは小説ではなく、現実だ……といたいところだが。実際には歴史にも様々な原作者、あるいは脚本家なり、演出家なりが存在するものだ。彼らは彼らにとつてのハッピー・エンディングを要求し、舞台の上の役者達には原作なり脚本なりに忠実であることをのみ要求するものなのだよ」

「造物主の悪意？」

「違うね、違うとも、トゥリユー。これは造物主の悪意に類するものではない」

「じゃあ……政治、かな？」

「おそらくは、ね。メルティアが王国でなく、シエルメス連邦と対立してはなく、メイがスルフエイク侯爵家の娘で、リアー王朝の養女だなどという複雑な境遇になれば……物語はハッピーエンディングを迎えられたらるうに」

「それも変ですよ、侯爵」

トゥリユーは微笑する。虚ろな、すでに現実と夢との境界を見失い始めた者の見せる微笑。

「少なくともメイリアも、侯爵も、それにぼく自身も、死にはしなかったんだし……」

何年か後、もう一度繰り返すことになる台詞を、トゥリユーはこの時口にし、そしてその言葉を口にしたことがあることを、二度と思い出さなかった。

「メイリアが、プリンス・オブ・メルティアでなければ……マーシャネス・オブ・スルフエイクであつたことがなければ、今度のことは起こらなかった。ぼくが事件に巻き込まれることもなかったし、メイリアに出会うことも、勿論有り得なかったんだ。違いますか？夢になつてしまつても、ぼくは巻き込まれたことを後悔してないんです」
無駄だと思つけれど……眠りに落ちる前、トゥリユーは言い残した。メイリアにさようならと言つておいて下さい……と。

遠くの方でしていた声が少しずつ意識の中に侵入してくるのを感じて、トゥリユーは目を開く。最初に視界に入ってきた白いものに幾分ぎよつとして身構える。白衣を着た人間であることに気づいて緊張を解いた。

「大丈夫かね、きみ？」

「……ここは？」

「スルフエイク宇宙港の医務室だ。連絡船の中で倒れたそうだが、気分はどうかね？ たまに無重量状態から急減速に移ったときに船酔に似た症状を起こす人がいるのだが、きみもそれなのかな」

「……？」

ベッドに半身を起こし、周囲を見回す。

「どうしたね？」

「いえ……何か……その、夢を見ていたような気がして」

「ふむ……」

頭の薄くなりかけた、中年の医師の口調はやや義務的な響きを帯びている。

「どんな夢だね」

「さあ……」

何か心躍るような思いのかけらが、記憶の触手からすると抜け落ちた。トゥリユーはかぶりを振り、忘れてしまった旨を告げる。医師は納得したように頷く。

「夢は忘れるものだ」

「そうですね……」

忘れちゃいけない……ふと、そんな気がしてトゥリユーは首を傾げる。なぜ、何を？

「もう、大丈夫そうですね。ありがとうございます」

ベッドから降りるトゥリユーに、医師はもう少し待つように言う。

「いま空港は警戒態勢にあるんだ。おかげで混雑している。もう三分ほど待てば、随分ましになるはずだから、それまで待ったらどうかね」

「警戒態勢って？ 何かあったんですか」

「うむ……ちよつとな」

言葉を濁す医師を、トゥリユーは不思議そうに見つめる。僅かに肩を竦め、医師の忠告に従うことにする。ふと腕時計を見やり、メルティア

に着くつもりだった日付よりも三日ばかり後になっていることに気づくが、さして不審を覚えなかった。途中立ち寄った、アステロイドベルトの遺跡で予定よりも時間を費やしてしまったのだ。バッグから取り出したハンド・ヘルド・コンピューターをメルティクスデータのデータベースに繋いでもらい、収集した資料を連邦総合大学イース分校の自分のアカウントに転送するついでに、着信したメールを確認する。提出しておいたレポートへの、主任教授からのコメントと論文草稿への要望。何通かの学会への招待状。友人からの近況に混じって、弟レール・ファウルスからのメールが昨日づけで着信している。微笑を浮かべて読み進めていたトゥリユーの視線がふと止まる。

「……メルティアのスルフェイク州というところで、テロがあったそうですね。気をつけて下さい。プリンセス・オブ・メルティアとかいう人が狙われて、怪我をしたそうですね」

ためらってから、さっきの医師にプリンセス・オブ・メルティアなる人物を確認してみる。急に渋い表情になった医師は、しかし、パブリックな人名録サービスを教えてくれた。

「そのHHCは画像モードもあるのかね、顔写真をアクセスしてみる」といい

「……あれ、女の子なんだ……」

「まだ――か――二になられたばかりだ」

「――か――二でプリンセス・オブ・メルティア？」

「侯爵の妹姫でいらっしゃる」

「侯爵？」

「スルフェイク侯爵だよ」

「ふうん……」

マーシャネス・オブ・スルフェイク

スルフェイク侯爵の妹姫なる単語が、妙齡の貴婦人を連想させたのだ……マーシャネス・オブ・スルフェイク？

「マーシャネス・オブ・スルフェイク？」

「現女王の養女……という人質になれるまではな。知っているじゃないかね」

「え？」

戸惑い。HHCの小さな立体画像スクリーンが映し出している透き通った水晶色の髪と、綺麗な濃紺の瞳の少女。奇妙な既視感と懐かしさに似た何かしら……彼女が連邦を訪問した時に見たのかも知れない……そう思ったが、データサービスは告げている。プリンス・オブ・メルティアが、これまで一度もメルティアを離れたことがないことを。

憑かれたようにHHCの画面に見入っていたトゥリユーに、医師が再び声をかける。

「もう、そろそろよさそうだ。気分がよいようだったら、そろそろ出発の時間じゃないかね」

我に返る。メルティクスとHHCを切り離し、礼を言つて医務室を出る。警戒態勢と言つた割に、警官の姿もなく、さつきまで送迎ロビーに集まっていたらしい人影が散り始めていた。それも、連絡船の乗客ではなく、誰かVIPの見送りに来た市民らしかった。

間くともなく聞いていた会話の中のある単語が、なぜかトゥリユーの意識をひどく刺激し、彼を慌たたく振り返らせた。

“……メイ……？”

国内飛行便の搭乗サテライトへつながる走路に、視線を走らせる。微かに、水晶色の煌めきを認めたと思つたのは、あるいは錯覚だったのかも知れない。

「……？」

しばらくして、トゥリユーは固定していた視線を動かし、肩を竦めてバッグを抱え直す。律動的な歩調で、彼は送迎ロビーを立ち去った。自分が何を見ようとしたのか、何に反応したのか、この時の彼は遂に悟ることはなかった。

ロビーから地上交通機関の掲示を頼つて空港ビルが出る。期待していたタクシーの列がなく、ちよつと戸惑つてきよるきよるしているトゥリユー。頭が見事に禿げ上がった、棘し革のような肌をした大柄な男が、やにや笑いを浮かべて声をかけてきた。

「よう坊や、ダウンタウンかい？」

物語要図(メルティア・スルフェイク大陸西海岸)

